

腰抜けハンター奮闘記

重さん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ポツケ村でただ一人、ハンターを営む少年。マキリは村民たちから腰抜けハンターとして親しまれていた。

安心して狩れるモンスタースターはガウシカくらい。飛竜なんてとんでもない。ポツケ農場は心の癒し、幼馴染は脅威の化身。

片手剣両手に二年間。農業大好き狩猟嫌い。

しかし、彼がそこまで腰抜けだったのにはある理由があった。

そんなマキリの元に、新たなハンターがやってきた。大剣使いのホイレンだ。

これでお払い箱、あとは農業やって暮らします。マキリは喜々として農業に向かおうとするが、そうは問屋が卸さない。

最後の狩りと言われ、ホイレンと共にクエストに臨むマキリ。

それが彼の始まりとも知らずに。

これはハンターらしからぬハンターである彼の、望まなかった奮闘記。

第19話	第18話	第17話	第16話	第15話	第14話	第13話	第12話	第11話	第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
236	230	221	212	188	172	157	150	133	123	113	101	80	64	53	38	28	15	1

目次

第1話

「うわあああああ!!」

雪山全体に鳴り響く破碎音。そして情けない声。

万年雪の上を、少年が走っている。

『ガアアアアアアア!!』

少年を追うは、一つの巨体。

猿のような姿かたち、しかし猿よりは圧倒的に巨大なそのモンスターの名は、ドドブランゴ。口から大きくはみ出た牙は群れのリーダーの証となる。先の破碎音は岩石の破壊音で、その岩は少年の背丈ほどもあったと言え、少年の焦燥感がわかるだろうか。

それだけの危機的状況にも拘わらず、五体のブランゴも追跡に加勢している。

「なんでーなんでこんなことにー」

少年の装備はマフモフシリーズ。彼出身の村では全く珍しくない防具だ。本当ならばそこに片手剣、ボーンククリを持っている、しかし、彼がそれを身につけている様子はない。

ようするに、彼は今丸腰だった。

丸腰でモンスターに挑むなど、無謀も無謀、自殺と変わらない。ただでさえ、少年にはドドブランゴに相對する気などなかった。だからこそ彼は今逃がっている。

全力で、全身全霊をかけて逃がっている。

ただ一つ、目的の薬草が入ったポーチだけを携えて。

「もうハンターなんて嫌だあああ!!」

少年の悲痛な叫びが再び雪山に轟いた。

※

ポケ村からは、一年の間、雪が消えることはない。

フラヒヤ山脈の雪山を狙うハンターにとっては拠点となる村だが、間違っても栄えている、ということとは出来ない。むしろ、雪山の麓と

いう厳しい環境を生き抜く逞しい村民が居るからこそ、かろうじて、存続できている。

そんなポツケ村からほどほど近い場所に、ポツケ農場という場所がある。

そこではキノコの栽培や釣り、なにより畑を使った農業をしており、少なからず、雪に閉ざされた場所で暮らす村民の生活に役立っていた。

「よっ、よっ」

そこで一人、猫型のモンスター、アイルーに交じって鍬を振るっている銀髪の少年が居た。

両手で鍬を振るう様子は生き生きとしており、何も知らない人間が見れば農家の息子と勘違いすることだろう。

「・・・あの、ご主人」

「ん？どうしたの？コジロウ」

そんな生き生きとしている主人に、アイルーのコジロウは声をかける。コジロウの表情はまるで何かを堪えているようであり、それでいて、何かを言わなくてはならない、という使命感に満ちていた。

少年は首を傾げてコジロウに先を促す。

コジロウはしばらくの間、言おうか言うまいか、口を噤んでいたが、意を決し口を開く。

「・・・あの、狩猟にはいかななくて良いんですかにや？」

少年の笑顔が凍り付く。

そう、少年は農家の息子ではない。

自然の調和を守護する者。ハンターなのだ。

大自然の脅威たるモンスターを狩り、人間と自然の釣り合いを保つ者。

だが、今ここで農業をしている彼は、どこからどう見ても『立派な』ハンターではない。

少年は凍り付いた笑顔を溶かし、柔和な、少し困った苦笑を浮かべた。

「・・・僕が狩猟に行っても、ガウシカを狩るくらいしか出来ないって、

コジロウは知ってなかったっけ？」

ガウシカとは、大きな角を二本持ったモンスターである。その角での攻撃は確かに強力ではあるが、動きは直線的で、初心者ハンターであろうと狩れる。それどころか、下手をすれば少し鍛えた一般人でも狩猟できる。そんな存在だった。

歴戦のハンターから言わせてみれば、ただの食料。

そんなガウシカ程度しか殺せない少年は、ハンター業界では無能と言ってもいい立ち位置だ。

「でも、この村にはご主人しかハンターが居ないんじゃない？」

その言葉に、少年はうつ、と胸を抑える。

そう、この村は一時、上質なマカライト鉱石が取れるとして栄えたものの、いまとなつては交通の便も悪いド田舎。

交通の便が悪いということは、外からハンターが来ることも少ない。

必然的に、雪山にほど近く、モンスターも豊富なこの村には駐在するハンターが必要になる。

そのハンターが少年だった。

「というか、さつき村長が呼んでいたようにや・・・」
「うつ」

二度目の胸痛。少年はもはや笑みを浮かべてはおらず、唯々胸を抑えて蹲るのみだった。

ポツケ村の村長、通称オババは温和な老婆なのだが、普段怒らないだけに怒ると怖い。

「・・・コジロウ、良いかい」

しかし、少年は立ち上がる。

立ち上がり、目の前のアイルーに目線を合わせ、にっこりと、出来る限りの笑みを浮かべた。

「僕はね、別にやりたくてこの仕事をやっているわけじゃないんだ。ドンドルマからハンターが来るまでの繋ぎなんだよ」

少年がハンターになったとき、村長は言った。

『すぐにドンドルマからハンターを送ってもらうから、その間だけで

もやってくれんかね』

少年は了承した。ハンターなんて仕事は自分に向いていないとは思っていたが、それでも、繋ぎだというのなら、村のためだというのなら、受け入れないわけにはいかなかった。

「それで僕は何年間ハンターをやってきたんだよ！十三歳から初めて二年間だよ！二年間も繋ぎをやるってどういうことさ！」

いくらなんでも遅すぎる。それが少年の主張だった。

少年とて、ドンドルマからハンターを募集しても、すぐには来るとは思っていなかった。少なくとも三カ月くらいは必要だろうな、と、彼自身そのくらいは覚悟していた。なにせこの村はド田舎なのだ。好き好んでド田舎に来る人間などいない。特にドンドルマなんて言う都会に住んでいる人間であればなおさらだ。

しかし、まさか二年間も見つからないとは思わない。

「契約違反だよ！いや、契約違反じゃないにしてもひどすぎるよ！僕がどれだけ命がけだと思ってるのさ！」

「でも、この間ドスギアノスを狩猟したじやにやいですか」

「コジロウ。良いことを教えてあげよう。あの時ドスギアノスはトサカが折れていた。これがどういうことかわかるかな？」

少年はまだ幼い子供に言っただけ聞かせるように柔和な笑みを浮かべているが、その笑顔には何故かプレッシャーがあった。

コジロウは少しだけ慄きながら、どういうことか考える。

「・・・どういうことじゃ？」

考えてもわからなかった。

「・・・コジロウ。ドスギアノスのトサカつていうのはリーダーの証なんだ。それが折られているっていうことはつまり、誰かと戦った後つてことなんだよ。つまり消耗していた。トサカを壊されるほどにね。僕はそのドスギアノスに止めを刺しただけ。わかったかな？」

「・・・つまり、ご主人の手柄ではない、と？」

「よくできました」

少年は満足そうに頷き、鍬を取る。

「元々僕はハンターなんて向いてないの。こうやって鍬を振っている

方がよっぽど性に合ってる」

そして、少年は再び鍬を振り始める。

そうなってしまえば、もうコジロウに言えることは何もない。ため息を吐き、農作業に戻ろうとする。

その時だった。

「みーっけーたー!!」

少年にとってもコジロウにとっても聞き覚えのあるアルトボイスが農場を駆け抜けた。

少年は背中に棒でも入れられたかのように背筋を伸ばし、コジロウもまたその声に全身の毛を逆立たせた。

恐る恐る少年が農場の入り口に目を向ければ、そこには一人の少女が居た。

背中まである金髪を一つに束ね、肌は太陽の光に照らされて白く輝いている。

「マキリ!! あんたオババに呼ばれてるくせになにやってんの!!」

「と、トマリ・・・」

少年マキリは、少女トマリを見て、苦虫を食い潰したような表情を浮かべる。普通に考えれば失礼な行為だ。

しかし、トマリはそんなことを気にした様子はなく、唯々憤慨していた。

「あんたハンターなんだから! さっさと来て! 防具着て! 武器持って!」

「ちよ、ちよつと待ってつてば、僕は別にやりたくてハンターやってるわけじゃ」

「問答無用! 今はあんたしかハンターが居ないからあんたがやるの! 文句ある!?!」

マキリは言葉を詰まらせた。

確かに、この村にはハンターがマキリしかいないし、ほかにハンターが出来そうな人間もいない。

結局は、マキリがやるしかないのだ。

「わかったらほら! 準備しなさい!」

マキリはトマリに手を引かれ、農場から連行される。その際、コジロウに助けを求める視線を送ったが、コジロウは元気よく手を振るだけだった。

※

「薬草を取ってきてほしいのさ」

オババの話はそんなことだった。

聞けば、大工のおっちゃんやんが屋根から落ちて腰を痛めたらしい。しかし、薬草を取りに行こうにも最近の雪山は物騒だ。

そんなこんなで、ハンターであるマキリに話が回ってきたということだった。

「・・・それにしても、あんたはいつも一緒にいるねえ」

オババは、トマリを見ながら呟いた。トマリは今もなお、マキリが逃げ出さないように見張っている。

トマリはふん、と鼻を鳴らすと、目を細めてマキリを見た。

「こいつが意気地なしなのがいけないんです」

マキリは頬をひくつかせた。自分が意気地なしというのは否定のしようがないが、ハンターもやっていない幼馴染に言われるのは少し納得がいかなかった。

しかし、納得がいけないとは言ったものの事実は事実。言い返すことなどできない。マキリは苛立ちをいったん胸の内に収めて、オババと視線を合わせる。

「で、オババ。薬草は良いんだけど、雪山が物騒だっていうのは？」

「あんたも知ってるだろう？ 轟竜の噂は」

マキリの眉が少しだけ強張った。

轟竜、ティガレックス。

極めて獰猛な飛竜で、危険性が凄まじく高いモンスターだ。ドスギアノスやガウシカとは比べることもできない。

今のマキリが出会ってしまえば、かなりの確率で殺されるだろう。「・・・それって、目撃情報か何か？」

「いいや、ポポが食い散らかされててね。その残骸を見た爺さんが言ったのさ」

爺さん。と古龍観測所に所属する爺さんだ。飛竜に関する知識は人一倍で、古龍というあまり生態がわかっていないモンスターについても知識があるという。

例えば目撃情報がなくとも、その爺さんが言うのなら間違いないだろう。

雪山には今、轟竜、ティガレックスが居る。マキリでも決して敵わないような脅威が存在する。

「・・・わかった。行くよ」

ならば、行くしかない。

大工のおっちゃんの怪我が大したものではないのなら構わないが、屋根から落ちたというのであれば出来るだけ早く直さなければ後遺症が残る可能性もある。

ほかの村人には任せられない。

ならば自分が行くしかない。

マキリは確固たる意志をもって頷いた。

「そうかい。気を付けてね」

「ああ、肥し玉を持っていくから、ヤバくなったらさっさと逃げるよ」
肥し玉とは、モンスターの嫌がるにおいを出す煙球のようなものである。

はつきり言っただけ物凄く臭い。しかも、相手がこちらに気付いている状態で使っても意味がない。むしろ激昂させる。

そんな代物だが、ないよりはマシだろう。

「・・・まあ、あんただったらなんだかんだ言っただけ帰ってきそうだけだね」

トマリの発言に、マキリは肩を落とす。

なんだか自分の扱いが軽いなあ。なんでかなあ。マキリは少しだけ落ち込んだが、すぐに気持ちを立て直して、村の出口へと向かう。

「あんた、肥し玉持っていくんじゃないのかい」

「オババ、意気地なしのあいつが肥し玉を置いていくわけないじゃない

い。元から持つてるわよ」
後ろから聞こえてくる会話を出来るだけ拾わないようにして。

※

その結果がこれである。

「轟竜だけじゃなくて雪獅子までいるなんて聞いてないよ!!」

雪獅子、ドドブランゴの別名だ。

雪山に生息しているのだから遭遇する可能性はゼロではないが、オババから聞いた話では「轟竜の他に大型モンスターの情報なし」とのことだった。

だというのに

「どうしてこうなるんだよー!」

轟竜が移動できないようなルートを経由し、鬼の気配にもビクつくほどに警戒し、やつとのこと薬草を採取した。

そして一息ついたその時、雪の中からブランゴが現れたのだ。

それだけならばよかった。逃げられない敵ではない。

しかし、そのブランゴは何を思ったのか遠吠えをしたのだ。

それは明らかに仲間を呼ぶ部類の遠吠えだった。

それに気付いて、逃走の足を速めても後の祭り。

親玉であるドドブランゴが到着し、今に至る。

マキリは逃げながら、心の中で文句を言いつづけていた。

遭遇する場所が悪すぎる! よりにもよってエリア8だなんて!

エリア8とは、雪山の山頂近くである。鋼龍クシャルダオラの抜け殻が特徴的で、山の裏に続くトンネル以外はなにもない場所だ。

エリア8で身を隠せる場所はその山の裏くらいだが、そこに身を隠してもドドブランゴは山を乗り越えて追いかけてくる。よってその手は使えない。

さらに山頂。見渡す限りの斜面となっている。当然、見渡しは最高

上を向く。

そこにあつたのは、竜のシルエット。

長い尾、腕と同化した、グライダーのような構造をした翼。

そして、逆光であつてもわかるその巨大な顎。

それは、大きな雪埃をまき散らしながら、マキリの前に着地した。

そうして初めて、マキリはその竜の全体像を見た。

黄色い外殻に青い縞模様。飛行よりも走行寄りに進化した太い腕。

一度狙った獲物を絶対に逃さないと言われる獰猛な目。

そのすべてが、マキリの生存本能に危険信号を飛ばしていた。

「・・・ティガレックス」

マキリがそう呟くと同時に、轟竜は上体を起こし、息を大きく吸い込んだ。

それを見たマキリは急いで耳を塞ぎ、轟竜から身を投げ出すようにして雪に倒れこんだ。

『■■■■■■■■■■ッ!!!』

その次の瞬間、冗談でも何でもなく、衝撃波が放たれた。足元の雪が抉れ、空間が歪み、鼓膜が破れそうなほどの咆哮。

マキリは耳を塞いでもなお、肌で感じる咆哮の威力に戦慄した。

轟竜の所以となったとされる、周囲に轟く咆哮は、マキリが今まで聞いたどんな音よりも強烈だった。

肌のピリピリとした感覚がなくなった瞬間、マキリは転がるようにして立ち上がり、轟竜に目を向けた。

咆哮を放つことに集中するためか、轟竜はその場から動くことはない。そして、幸い、轟竜はマキリに意識を向けている様子はなかった。彼の関心が向いているのはただ一つ。目の前にいる、人間などよりよっぽど大きな獲物だけだった。

そして、哀れにも彼の関心を向けられてしまった雪獅子はというと。

逃げていた。

配下のブランゴたちと共に、わき目も降らず、一心不乱に逃げた。

心なしか、先ほどよりも走る速度が上がっているような気さえする。

盛大な雪埃を上げながら逃げていく姿は情けなさを飛び越して、いつそのこと潔く見えてしまう。

マキリは若干呆れていたが、轟竜にそのような感情は存在しない。あるのはただ一つ。腹を満たすという欲望のみ。

轟竜は足に力を溜め、一気にそれを解き放った。

再びの雪埃。

「うわっ!」

煙球を使ったのかと思うほどの、濛々と広がる雪煙がマキリの視界を遮った。濃霧に包まれたかのようなその有様では、敵の姿どころか自分の姿すら見失いそうになる。

しかし、音だけは確かに聞こえてくる。

轟竜の低い唸り声と、雪獅子の何かを訴えようとするような悲痛な叫び。

何が起こっているのかは、見ていなくとも一目瞭然だった。

マキリは歯を食いしばって、己を奮い立たせる。

ここで立ち止まっても何もできない。惚けている場合じゃない。

マキリは己の記憶を頼りに、洞窟に向かって走り出した。

しかし、その足音に反応したのかは定かではないが、その瞬間、轟竜が捕食しているはずの方向から、まるで岩でも削り取るかのような音が響いた。

捕食するにしては妙な音だな。マキリがそう思った瞬間。

彼の意識は一瞬、暗闇に落ちかけた。

何が起こったのか、マキリには分からなかったが、自分が雪原に倒れているということを認識してからは芋づる式に理解した。

恐らく、雪の塊のようなものでもぶつけられたのだろう。マキリの体には、倒れただけでは説明できないほどの雪がまとわりついていた。ポーチに手が届かないし、これでは走る速度も大幅に制限される。

体は痛みを訴えていた。しかし、そんなことよりも、マキリにとってはここを離れることが先決だった。

「・・・くそつたれ」

だが、その意思に反して体は動かなかった。

どうやら今の一撃は、自分の体を動かなくさせるには十分なものだったらしい。

マキリは妙に冷静な思考を巡らせて、自分の状況を判断する。しかし、考えれば考えるほど、自分の絶望的な状況に対する諦観が湧いてくる。

遠くでは、轟竜が捕食している音が聞こえる。肉がぐちゃぐちゃと音を立て、いやおうなしにグロテスクな光景を思い起こさせる。

「・・・これ、死ぬかも」

マキリは息を吐きながら呟いた。

「でもまあ、やることはやらないとな」

一応、約束だし。

そんなことを思い、マキリは自分の体も一緒に攻撃する勢いで、自分に纏わりついた雪を殴った。

「つつーっ！」

案の定、自分の体にも拳があたり、マキリは顔を歪めるが、その甲斐あつてか、自分の背中についていた雪は吹き飛んだ。

体は動かないが、腕はまだ動く。マキリはポーチから茶色い色をした球体を取り出した。

「・・・まあ、気休めだけどっ!!」

言葉と共に、茶色の臭気が爆発した。

マキリの顔の横に叩きつけられた肥し玉は、あつという間に周囲に広がっていく。これを顔にぶつけられた村人は一週間トイレ恐怖症になったというのだから、その威力は推して知るべし。

その匂いを至近距離で食らったマキリは、遠のきかけた意識を必死につないだ。

ここで気を失ったら、轟竜どうこうじゃなく雪山の寒さで死ぬ。

死ぬわけにはいかない。その一心で、マキリはどうかそのにおい

しかし、その答えを口に出す前に、男は喋りだした。

「いやあ、参ったぜ。あんな村に配属されたと思ったらいきなりティガレックスだもんよ。いやはや、本当に人使いが荒いなあの婆。いや、別に良いんだぜ？ただ、まさかお前みたいな餓鬼一人で二年間もハンターやってたとはなあ。よくやるよ本当。お疲れさん。今度からは俺もやるから気楽にいこうぜ」

本当に口数が多い。マキリはため息を吐きたい気持ちを抑えて、既に雪ぼこりがなくなった視界でその男の顔を捉える。

「お、中々の美少年。こりや都の奴らに見せたら喜ぶな。ま、装備が貧弱すぎるが」

その男は燃えるような赤い髪に、二十代後半とみられる顔つき、装備はこの辺りでは見慣れない赤と黒をベースにした防具に、同じ色合いの大剣を背負っている。

以前、このような装備を持ったハンターを見たことがある。確か、レウスシリーズとかいう装備だ。

空の王者と呼ばれるモンスターリオレウスの素材を使って作られた防具。それはすなわち、リオレウスを倒すことのできる力量を持っているということに他ならない。

マキリは自分の役割の終わりを悟り、口元に笑みを浮かべた。

「・・・僕はマキリ。あんたは？」

マキリが声を絞り出せば、男は口角を上げて笑った。

「ホイレンだ。よろしく、マキリ。ああ、それと」

そして、続けた。

「お前、臭いぞ」

待ち望んだ邂逅だった。

しかし、ホイレンの第一印象は最悪だった。

第2話

「なんだ、無事だったんだ」

帰って早々、トマリの言葉に、マキリは肩を落とす。村人たちの反応も似たり寄ったりだ。「おお、無事だったか。まあそうだろうと思っただ」お帰り、薬草はとれたかい?」「なんかお前臭いな」「薬草が臭いとか俺嫌だぞ」最後の言葉はあろうことか大工の親父である。

時刻は既に夜。多くの家が仄かな明かりをつけ、夕食の準備をしているところだった。

しかし、マキリはホイレンの肩を借りて村に戻ると、飯も食わずにベッドに突っ伏した。

もう何もする気は起きなかった。身体は緊張と疲労で岩石のように硬く、重くなり、立っていることすら億劫だ。

そんな様子に気付いていたのだろう。オババは何も言わず、家で休むようにと厳命した。

マキリは頭の半分では感謝して、半分では何も考えず、その疲労に身を任せ、意識を静かに、無意識の海に沈めた。

※

「よしマキリ。一狩り行こうぜ」

「断る」

「そう言わずにさあ、行こうぜ? な?」

出会いの日が明けた朝一番、ホイレンがマキリの家に来たのはそんな時だった。

リビングに設置してある椅子に陣取り、ホイレンは絶えず話し続けた。

既にリビングには朝食の準備をしており、家の中にはホットミルクの香ばしい匂いが漂い、テーブルにはアイルーによって作られたおかずが並んでいた。

まさに朝食を頂こう。そう思った時に現れたホイレンは、その要件

も相まってまさしく邪魔ものであった。

朝から騒々しい奴だな。マキリは苦々しく思いながらも、顔には出さない。

「僕、昨日死にかけたんだよ？」

「あ？死にかけたことと狩場に行かないことと何の関係があんの？」

何を言っているのかわからない。とでも言いたげなホイレンの表情に、マキリは呆れる。

「死にかけたんだぞ。少しは休むにきまつてるだろ」

ホイレンは納得したように頷いて、けれど、すぐ横に振った。

「違うなマキリ、死にかけた時つてのは、次の日も疲れが続いているから休むんだ」

「なにが違うんだよ。今あんたが言った通りだろ」

「だつてお前、疲れてねーんだもん。俺だつて疲れてない。ほら、いけるだろ？」

マキリは眉間に皺を寄せた。何を言っているのかが分からないわけではなく、何故そんなことが分かったのか、という理由で。

「疲れてるよ。全身がたがた言ってる」

「嘘つけ。疲れてるやつはそこまでハキハキ受け答えなんてしねえ」

あつさりと嘘だと見抜かれる。

確かに、マキリは昨日、動けないほど疲労したものの、体力自体は全快している。

なるほど、観察眼はあるらしい。マキリは再び内心で舌打ちした。

言うまでもなく、マキリは狩りになど行きたくなかった。

そもその話、マキリは普段の雪山にすら行きたくないのだ。轟竜が居る雪山など言わずもがなだった。

なんとしても、マキリは行きたくない。

「しっしっ」

強く、語気を強めた。

強い語気でこう言えば、大体の人間は引き下がる。誰だつて好き好んで嫌われたくはない。わざわざイラついている人間に関わろうなんて言うのはよほど物好きか、人を怒らせるのが好きな人格破綻者く

らいだ。

しかし、どうやらホイレンは物好きの類らしかった。言われた言葉をものともせず、口角を上げていた。

「イラつく元氣があるなら大丈夫だ。ほら、行くぞ」

引く様子は毛ほども見えない。

マキリは顔を顰めながら、頭を回転させた。

何か良い言い訳はないか。ひねれば、案外あっさりど、テーブルの上に目が向いた。そして、その瞬間、自分の考えに自分で頷いた。

これで行こう。

「武器がない」

思った時には、既に声に出していた。

「あ？」

何を言っているのかわからない、と言いたげなホイレンに、マキリは再び言った。

「昨日武器が壊れた。だから今日はいけない」

マキリはそう言っ、テーブルの上に置いてあるボーンククリの残骸を指さした。

※

『良いかマキリ。武器というものは己の分にあつたものでなくてはならない』

重装備を身にまとつたマキリの前任ハンターが、目の前に立っていた。

特徴的な飛竜、フルフルの装備を身に纏うその姿と、どんなに腕が磨かれても自分を律し続けるその姿は、ハンターの中のハンターだった。

前任者が、常に口を酸っぱくして言っていたのが武器と防具についてだった。

『己の分に過ぎた武器は自分を過信させる。防具も同じだ。自分の実力に見合ったものを身に着ける。さもなくば、お前は簡単に死ぬこと

になる』

前任者は基本的に寡黙な男だったが、マキリにとってそれは気にならなかった。

自然の調和を守るハンターという仕事をしている前任者のことは誇りに思っていた。

だから二年前から今日この時まで、その言葉を忠実に守ってきた。常に己の実力に見合ったマフモフシリーズを身に着け、初心者用として前任者から渡されたボーンククリを使い続けてきた。

けれど、もうその言葉を守る必要もない。

「僕はあるが来るまでの繋ぎなんだ。だからもう、武器を新調するつもりはない」

マキリにとってハンターとは一時的な職に過ぎない。あくまでも繋ぎだ。

マキリには狩猟より農業の方が性に合っている。自分のほかにハンターが誰も居なかった。だから自分がやってきた。

それも、これで終わりなのだ。

「あんたはティガレックスを相手に撃退するくらいの実力者だ。それなら僕が居ようが居まいが変わらない」

昨日、ティガレックスはいつの間にか消えていた。

マキリには何が起こったかわからなかったが、ホイレンが追い払ったのだろう。それくらいの実力はある、すなわち、一人で専属ハンターをやるだけの実力があると、マキリは判断していた。

しかし、ホイレンはそれを笑い飛ばした。

「ははは！そいつは買い被りだマキリ。ティガレックスは飯になるか飯にならねえか、その判断しかしねえよ。あいつが逃げたのは肥し玉の匂いを嫌ったのと、そこに俺が一撃叩き込んでやったからだ」

流石に臭い中で戦うのは嫌だったんだろうさ。ホイレンはそう言って笑った。

マキリは、自分の見当違いな予測に赤面したが、咳払いをして仕切り直す。

「とにかく、あんたはそれなりに強いわけだろ。リオレウスを狩れる

くらいなんだからさ」

「んー、まあな。けど、ティガレックスは正直、勘弁だな」

分かってんだろ？と、マキリはホイレンに問いを向けた。しかし、マキリは首を傾げる。

お前と同じさ、ホイレンは最初にそう言っ続けて続ける。

「確かに俺は経験を積んだ。だが、万が一がないわけじゃない。特に、ティガレックスとかの狂暴で、往生際が悪い奴らをしてにするとときはいつだって命懸けだ」

マキリは少し意外に思った。

リオレウスを狩るほどのハンターともなれば、狩りを楽しみみとしている人間ばかりだと思っていたのだが、なかなかどうして、マキリにも納得が出来る『臆病な』心情を持ち合わせているらしい。

狩りに絶対はない。

狩る側だったはずがいつの間にか狩られる側に代わっていることも少なくない。特に、マキリに限って言えばほとんどのモンスターは狩るものではなく狩られるものだ。

だから、ホイレンの心情は痛いほどに理解できた。

ただ、誰も知らない人間のために、マキリは自分を犠牲にするつもりなど更々ない。

「・・・でも、僕はハンターに向いてない」

「強情だなお前。ハンター協会の頑固爺どもにめちやくちや似てる。そういうやつって大体自分が無能なことを知られるのが怖いから動かないだけなんだよな。知ってる知ってる」

「分かってるなら、もう構わないでくれ」

ホイレンは意外そうな顔をしてマキリを見た。予想していた答えと違ったらしい。ハンターならば、それなりの誇りを持っているとも思っていたのだろうか。

ちゃんちゃらおかしい。そんなものなど疾うの昔に捨てている

マキリは鼻で笑う。

「自分が腰抜けだっことはわかってる。だからハンターに向いてないって言ってるんだよ」

ハンターは命懸けだ。

臆病な人間とは、最もそれを生業にしてはならない人間のことだ。「ハンターとは恐怖に打ち勝てる人間だ。臆病な人間がやっちゃいけない」

マキリは二年間のハンター生活で、いや、それ以前でも、既に学んでいた。

リスクを取れない人間が大成することはない。いざというとき、リスクを取って挑戦する人間こそ強いハンターになれる。

人間よりもはるかに巨大な生物を相手にするハンターには必要不可欠なその心意気が、マキリには足りていない。

ホイレンは腕を組んで一度深く頷いた。

「・・・なるほどな。まあ、お前の言うことは少しわかった」

「そっか、じゃあ」

「だが、お前には一緒に来てもらう」

「・・・あのなあ」

眉間に皺を寄せ始めたマキリを、ホイレンは右手で制した。

「一緒に狩りに来い、とは言わん。だが、俺も情報収集はしたい。ここに駐在するとなると雪山の地理には通じている必要がある。だから案内を頼む」

マキリは一瞬呆氣にとられる。

意外だった。こんなにもあっさり諦めるとは。

マキリから見てホイレンは、言ってしまうえば遠慮がなく、あくまでも自分の考えを押し通すような人間だとみていたのだが、どうやらその認識を改めなくてはならないらしい。まあ、第一印象が違うなんてことはよくあることだ。

それはともかくとして、マキリは考える。

確かに、雪山の地形は単純なように見えて複雑だ。その複雑さを知っていると知っていないのでは雲泥の差がある。昨日のように、大型モンスターから一時的に身を隠すための洞穴も雪山にはいくつが存在しているし、雪に隠れたクレバスの位置なども詳しく把握しておく必要があるだろう。

これからこの村のハンターをやってもらうのだから、それくらいのことではしてやらなければ罰が当たる。

性格の悪いことを言ってしまうえば、すぐに死なれては、マキリにとっても都合が悪い。

「・・・うん、わかった。それくらいならやるよ」

恐らく、これがハンターとしての最後の仕事になる。

有終の美、というほど中身のある仕事ではなかったが、きちんと後任に引き継げるのであれば、悪くない。

今までのハンター生活に思いを馳せるマキリは、ついぞ気づくことはなかった。

向かいのホイレンが、どこか意味深な笑みを浮かべていることに。

※

エリア6と言われる場所。

そこは大きく開かれた広間のようになっており、山と崖に挟まれた雪原だ。

二人の男はそこで絶え間なく動き続けていた。

「聞いていいかな」

ぐしゃり、と何かが潰れる音と共に、マキリが口を開いた。

「なんだ」

燃え上がるような音と共に、ホイレンが答えた。

「この大剣、僕にぴったりなんだけど？」

ぎゃあぎゃあ、と、鳥のような声が周囲から鳴り響く。

「昔の俺と体格が同じなんだろ」

ホイレンは『炎剣・リオレウス』を振り下ろしながら答えた。

「納得はしてないけどいいや。で、もう一つ聞いていいかな」

血しぶきが舞う。

「なんだ」

肉の焦げた匂いが鼻を衝く。

「どうして僕はモンスターと戦ってるのかな」

大剣『アギト』で鳥竜種に類するモンスター『ギアノス』を吹き飛ばしながら、マキリはホイレンを睨み付ける。

しかし、睨み付けられたホイレンはと言えば、口笛を吹いてマキリを称賛した。

「様になってるじゃねえか。結構訓練しただろ」

「万全な訓練をしておかないと不安だからね。でも、大剣は嫌いだ」
「なんで」

「重いから逃げ辛い」

「・・・腰抜け」

「なんとでも」

マキリとホイレンは、雪山に赴いていた。

出会った次の日のうちに。すなわち、マキリが行くと了承した日のうちに。

しかし、本来なら二人が雪山に来るまでには少なくとも五日はかかる予定だった。

理由は、マキリの武器だ。

マキリはボーンククリを新たに作るつもりはなかったが、有り合わせの、既製品で済ませてしまうとグリップの感触の相違などでうまく動けないのではないか、という不安があった。

モンスターと戦わないとしても、狩場に行くからには万全を期しておかなければならない。

だから仕方なく、加工屋に頼んで今回限りのボーンククリを作ってもらおう。そのボーンククリが出来るまで、五日かかる。よって、出立も五日後になるだろう。そう思っていた。

そこでホイレンが待ったをかけたのだ。

「こんなこともあろうかと！って奴だな」

マキリの手の中にあるアギトは、それなりに強力な大剣だ。重量も威力も、今までのボーンククリよりは断然上だろう。これはホイレンが昔使っていたものらしい。それが今のマキリにぴったり合うのだから、偶然というものは恐ろしい。

しかし、マキリの言いたいことはそこではない。いや、前任者の『分を弁える』という教えを平然と破ってしまったことについては少し弁解する必要があるが、問題はそこではない。

「さっきの戦闘は避けられたよね？どうして音爆弾でわざわざ誘き寄せるようなことをしたのか、納得できる説明をしてもらおうか」

「お、おう。というかお前、なんか性格変わってないか？」

「お前に遠慮するだけ無駄だと学んだだけだよ」

あんた、からお前、に呼び方が変わっていることから、マキリの怒りの度合いが見て取れる。

ホイレンはマキリの様子に少しだけ気圧されながらも、咳払いをして話し始めた。

「良いか、俺たちが今戦ったギアノス、あいつらは何体だった？」

「七体だよ。結構な群れだ」

マキリは周囲の死体を眺めながら、冷静に分析する。

自分ひとりだったら確実に逃げていたし、そもそも見つかるような真似はしない。

ホイレンは頷き、指を一本立てた。

「あいつらの数で奇襲されると、俺でも少し厳しい。死にはしないが、怪我をするくらいはするだろう。後顧の憂いは絶った方がいい」

「要するに後で邪魔をされると面倒だから先に殺したと、そういうことで良い？」

「そういうことだな。うん」

マキリは大きくため息を吐く。

「…ハンターとは思えない。無用な殺生は密猟者と変わらないだろ」
「ち、違うって。こういうのは、安全を確保するために必要なんだよ！お前、大型モンスターと戦わないから分からないだろ！小型モンスターの鬱陶しさ！」

マキリは思わず呻いた。

確かに、ハンターとしての実力が伴っていない人間がする発言ではなかった。

「…悪かったよ。でも、出来るだけ戦闘は避けてくれ。流石に死に

たくはない」

マキリはアギトを背中に納刀すると、ため息交じりに歩き出した。

ホイレンは、マキリの背中を見て少しだけ目を細めた。

「・・・やるとなったらやる、と」

「何してる？ さっさとしないと夜までに帰れないぞー！」

「お、おう、すまん」

案外、人に対しては物怖じしないようだった。

※

「ここから先は狭い通路になってる。だから中型モンスターから身を隠したいときとかはここを使う」

「はあ、よく見つけたもんだな」

「見つけないと死ぬからね」

マキリは肩を竦めながら答えた。

そこはエリアとエリアをつなぐ、行ってしまうえば通路のような場所。モンスターは基本的に大きなエリアから離れることはないが、激昂していたり卵を盗んだりするときはどこまでも追いかけてくる。そういう時は隠れる場所が必要だ。

いま二人が居るのは雪山の中に張り巡らされた洞窟だ。ドスギアノスなどの中型モンスターであれば通ることが出来るが、飛竜などの大型モンスターは間違っても入ってこれないような場所。

「まあ、あんたに必要な情報なのは分らないけど」

「いや、助かる。武器を研ぐときにも使えるからな」

ホイレンはそう言いながら、地図に場所と用途を書き込んでいる。見た目に合わずまめな男だ。

作業が終わるまで、マキリはちよつとした段差に腰掛けて待つ。

周囲を覆うのは外の白銀とは打って変わって、氷の青色だ。外から入ってくる風が甲高い音を響かせている。時折どこからかギアノスの鳴き声が響くが、音の反響からしてかなり遠くだということがわかる。だが、警戒は怠らない。

雪山は厳しい環境だ。適応できない生物は片っ端から凍え、あるいは飢えて、死んでいく。

適応したとしても、そこにあるのは厳格な食物連鎖。さらに、食物連鎖を打ち壊すような外来種、『轟竜』『古龍』といった存在。

そんな場所で、人間が出来ることは驚くほど少ない。

ただ風が吹いただけでも倒れてしまいかねないのが人間だ。そんな場所で二年間も、何事もなくやってこれた。マキリの顔には自然と笑みが作られる。

「嬉しそうだな」

ホイレンはメモを取りながら話しかけた。

マキリは気の緩んだ場面を見られて軽く赤面したが、素直に頷く。

「嬉しいよ。雪山はモンスタアの危険がなくても、油断したら死ぬからね。肩の重荷が取れた」

「それは良かったと思うが、ちよつと疑問があるんだよな」

ホイレンはメモを取り終えたのか、マキリに目を向ける。いつもは軽い言葉ばかり並べる男の目には、少しの真剣さがあるように見えた。

「お前、そんなに臆病なのになんでハンターやってんだ？」

「僕以外にやれる人間が居ないからだよ」

マキリは即答した。昔から訊かれ続けてきた問だった。

なぜハンターをしているのか。臆病なのに、向いていないのに。

時折雪山に遠征しに来るハンターたちに、そういった問いを向けられることは幾度もあった。

その度に答えてきたことだ。自分以外にやれる人間が居なかった。

そういえば、ほとんどの人間はそうか、と言ってそれ以上追及しない。深入りすれば『じゃあ、あなたがやってくれませんか』と言われるとでも思ったのだろうか。それとも、ただ単に興味がなかったのか。

しかし、ホイレンはそうではなかった。

「いや、ほかにもいるだろ。あの嬢ちゃんとか」

「トマリのこと？」

「そうそう、まあ、お前に比べれば体格はよくないが、威勢は良いじゃねえか。頭一つ分も違うお前に食って掛かるような奴だぜ？」

「・・・それ、本気で言ってる？」

マキリは目を細めて、ホイレンを睨み付けた。

詳しいことはホイレンには分からないが、そこには確かに怒気が含まれていた。

しかし、ホイレンはからからと笑うばかりで相手にしようとしな

い。「怒るな怒るな。だってよ、お前、思わねえの？あの嬢ちゃん、お前が狩場に行くことが当然だって思ってるぜ？『じゃあお前が狩場に行ってみろ』そう言いたくなつたこと、本気でねえの？」

マキリの頬が少し強張つたことを、ホイレンは肯定と受け取った。「あるだろ？お前に慣れない得物をもって、道案内して来いって言つたのもあいつだもん。狩場の怖さをわかってるとは思えねえ」

「トマリはいつも正しいことを言っているだけだよ。僕は大剣が扱えるし、あんたに道案内をするなら早くした方がいい」

「お前の気持ちを無視してるじゃねえか」

「それこそどうでもいいことだ。僕よりも村のことを取るのは当たり前だろ」

「あいつの言い方は高圧的すぎるだろ」

「そのくらいじゃないと僕が動かないからだよ」

最初、マキリはホイレンの大剣を借りるつもりはなかった。

理由は既製品のボーンククリを買わなかったのと同じだ。グリツプが手に合わない可能性はもちろん、動き方も普段とは違う。ましてや大剣は武器の中でも屈指の動きにくさを持つ武器だ。ホイレンにいくら頼まれても、それだけは曲げるつもりはなかった。なにより、前任者の教えに反する。

しかし、マキリとホイレンの討論に、突如としてトマリが参戦したのだ。

唐突にマキリの家のドアが開き、その場で堂々と発言した姿には、さしものホイレンでも言葉を失っていた。

『あんた、昔は大剣も太刀もランスも使ってたでしょ。うだうだ言うてないでさつきと行って来て』

一応、あんたはまだハンターなんだから。との言葉を付け加えられ、マキリは肩を落としながら従った。

それがホイレンには不思議だったのだ。

「お前、あの嬢ちゃんに弱みかなんか握られてんのか？やけに素直だよな」

「・・・この話は帰ってからにしよう。まだ回るところはある」

マキリは一方的に話を打ち切ると、周囲に警戒しながら、細い通路を歩き出した。

ホイレンはふうん、と、言いながら、少しだけ口元を歪めた。

「訳アリか」

弱みを握られているのか、そう聞いた時の苦々し気な表情を、ホイレンは見逃さなかった。

第3話

まだ回る場所は残っていた。

だが、気温が下がる夜に雪山で狩りをする度胸などマキリにはない。加えて、探索という名目にもかかわらず、暗く、周囲を見渡せないに狩場をうろつくことに意味などない。

そのことから、帰還は夕暮れになった。地平線に沈む太陽の光は、合掌造りの建物を赤く染める。美しい光景だ。

特に、入り口にある巨大な岩は、いや応なく目に入る。

この岩、ただの岩ではなく、巨大なマカライト鉱石だ。かつて良質なマカライト鉱石の出土で栄えていた名残。マカライト鉱石特有の青が夕日とのコントラストをなしている。

ホイレンはその特徴的な大岩を見上げて目を細めて、感心したように息を吐いてから、その根元に居るオババに目を向けた。オババもホイレンに気付कि、焚火から目を外す。

「雪山はどうだったね」

オババは柔和な笑みを浮かべた。重ねた歳のなせる業なのか、その笑みを見ているだけで疲れが抜けるようだ。

ホイレンもそれに応え、笑う。

「よく言えば遣り甲斐がある。悪く言えば面倒な狩場だ。まあ、こいつの知識も役に立ってところが救いだな」

「僕だけじゃなくて、代々雪山のハンターに受け継がれてきた情報だけどね」

ホイレンは隣に立つマキリの肩を叩く。マキリは嬉しいような困ったような、そんな苦笑いを浮かべた。ハンターとしての知識が褒められてうれしい反面、もう役に立たない知識なのが何とも言えないのだろう。

例えほかに何か要因があったとしても、その場に居なかったオババには分からない。

オババはゆつたりとした口調を崩さず、あくまでもマイペースに話した。

「二人とも、今日はゆっくり休みなさい。明日はホイレンさんの歓迎会もあるからね」

オババは焚火に向き直ったかと思うと、間髪入れずに鼻提灯を付け始めた。

就寝までの時間、わずか一秒。驚異的な早さだった。

「・・・寝るの早いな」

「オババも年だからね」

詳しい年齢はマキリにもわからないが、マキリの母親が子供の時から既にオババだったらしい。竜人族だから寿命が長いのだろうが、それにしても謎の多い女性である。

マキリはホイレンに向き直る。

「で、どうする？一応、村の中でも案内しようか？」

「そうだな。昨日は夜だったから、周りきれなかった」

「わかった。それじゃあ案内するよ」

マキリはもつとも、と言葉を区切った。

「ここからほとんど見えるんだけどね」

「まあ、そうだな」

オババの居る場所からはハンターがギルドからの依頼を受ける集会所、食材から爆弾までなんでもござれの道具屋、そしてハンターには欠かせない加工屋がすべて一望できる。元々小さな村だ。重要な店はすべて大通りに集まっている。

案内する必要があるか、と言われると首を傾げるが、紹介があるとなしでは随分違うだろう。

まず、二人は道具屋に立ち寄った。中には一人の女性と、奥で帳簿を付けている男の姿がある。

「アイさん。ちよつといい？」

「ああマキリ、と、新しいハンターさんかい？」

マキリが声をかけた恰幅の良い女性、アイはホイレンに目を向けてつま先から頭の先までぎつと見渡すと、うんうんと頷いた。

「良いね。マキリとは違ってハンターっぽいよ。あんた」

「そいつはありがとうよ」

「本当のことを言っただけさ。マキリ、あんたもお疲れさん」

「はは、ありがとう」

アイに叩かれてマキリは少しだけ笑みを浮かべる。ハンターという職をそこまで好いていないのは、村では周知の事実だ。それでもハンターをやっているのだから、それを労うのも当然だろう。

例え腰抜けであつても、居ると居ないので随分違うのだ。

笑いあっている二人の姿は、さながら親子のような温かみに満ちていた。

ところが、アイの表情が一瞬でもっと濃い笑みに変わったかと思うと、マキリの肩は万力のような力で握られた。

「で、トマリちゃんとはどうなってるんだい？」

その空気が一瞬にして怪しいものに変わり、マキリの笑いが引き攣る。

「いや、その、別にどうか、そういうのじゃなくて」

「なんだい、まだ何もしてないのかい。情けないね」

ホイレンは面白そうな匂いを嗅ぎつけたらしく、愉快そうに目を細める。

「へえ、何かお前、あの嬢ちゃんとそういう関係だったのか」

「違うって・・・」

ホイレンとアイの声音には明確にからかいの色が見え、マキリはため息を吐きながら否定した。ホイレンは仕方がないとしても、アイは事情を少なからず知っているはずなのだ。冗談だとしてもたちが悪い。

しかし、二人は一通りマキリで遊んだら満足したのか、とつくに二人の話に戻っていた。

「砥石や回復薬ならきちんと売ってるから安心しな！調合してくれる娘も伝手があるから、珍しい材料さえなければ手配できるよー」

「おおマジか！すげえなアイさん！じゃあ回復薬グレートとか行けるのか!？」

「行ける行ける！何のために農場があると思ってるんだい！そのマキリが頼みもしないのに管理してるよー」

「おっしや！正直調合とか苦手できあ、助かるよ！」

二人の会話は実にハンターと商人らしい一幕だった。若干マキリに対する悪口があつたような気がするが。

対して、マキリは自分とアイの会話に思いを馳せた。

『最近安い野菜ある？』

『シャキシヤキキャベツかねえ。あ、あとはポポノタンがあるよ。あんたが狩ってきた奴』

『ああ・・・んじやあそれで』

『あ、砥石は要らないのかい？』

『大丈夫。この一週間でポポしか相手してないから、そんなに消耗してない』

所帯じみている。いや、実際この場面は夕飯の買い物に来た時なので所帯じみっていて間違いではない。しかしハンターとしては間違っている。そんな気がする。

そういう意味で、ホイレンとアイの会話は懐かしかった。

久々にハンターらしい、真つ当な会話というものを聞いた気がする。

「さて、それじゃあ他のところも紹介してもらおうか。マキリ」

「ああ、なんだい案内中だったの。引き留めて悪かったね」

「いや、アイさんが良い人だつてことがわかってよかったよ」

ホイレンの言葉を聞いて、アイは目を丸くする。

そして、大きく口を開けて笑った。

「はっはっは！こりやまいったね。口も上手だ。こいつは食わせ物だね」

「本当のことを言っただけだって」

この二人、会ったばかりのはずなのに息ピッタリである。

ホイレンの無遠慮にも見える強引さは、ある種人間関係を円滑に進めるためには重要なものかもしれない。特に、様々な場所を転々とするハンターにはそういった短時間で周囲に溶け込む努力が必要なのだろう。

その点で言えば前任者はあまり優秀ではなかったのかな。

マキリがぼんやりと考えていると。ふと、後ろから視線を感じた。振り返れば、そこにいたトマリは手を上げて挨拶をしてきた。マキリも同じように挨拶を返す。

「トマリ、ただいま」

「・・・大剣、似合わないわね」

「普段使わないから」

夕食の買い物に来たのだろう。トマリは買い物かごを手に持ち、マフモフシリーズによく似た民族衣装を身に着けていた。厳密にいうならば、民族衣装にマフモフシリーズがよく似ているのだが、まあ良いだろう。

トマリはマキリの言葉を鼻で笑った。

「でも、使えるんでしょ？」

「まあ、使って体を痛めるようなことはしないけど」

「良いじゃない。私じゃ持ち上げるのも難しいし」

そう言っ、トマリは自分の腕を掴む。厚着であるはずの民族衣装の上からもわかるその細さは、大剣を扱うには不足が過ぎた。

マキリは一瞬言葉に迷ったが、ため息交じり、冗談交じりに呟いた。

「・・・これからこの力が役に立つかは分からないけどね」

「だったら加工屋に弟子入りすれば？力なら不足なしでしょう」

「あれは技術がないと無理だからなあ。流星に十五からやつてもきついでらろ」

「でしようね。言ってみただけ」

二人が他愛もない話をしていると、アイとの会話を終えたホイレンが近づいてきた。

「おお、嬢ちゃんか。ただいま」

「ホイレンさん。お疲れ様です」

トマリは礼儀正しく礼をする。その様子に、ホイレンはお、と感心したような様子を見せる。

「礼儀正しいなあ。マキリ、そう思わないか？」

「あれ？僕の態度に不満でもあるの？」

「・・・いや、お前って俺相手だと太々しいよなっ」

ホイレンの言葉に、マキリは首を傾げて考える。そして、すぐに結論を出す。

「なんだろう。ホイレン相手ならこうした方がよさそうかなって」

「なんだそりや。野生の勘か？」

「ホイレン、あんまり畏まられるの好きじゃないでしょ。だからこっちの方が良いかと思って」

ホイレンは目を瞬かせてマキリを凝視する。

「・・・お前、案外よく見てんだな」

「案外って何」

「いや、臆病者っていうくらいだから視野が狭いもんだと思ってた」

今度はマキリが目を瞬かせる番だった。そして、首を傾げる。

「・・・逆じゃない？」

「あ？なんで」

「え、むしろなんで？」

二人がそろって首を傾げる。明らかに話がかみ合っていない。

「・・・あの、ホイレンさん。これ以上遅くなると、加工屋さんが閉まると思います」

二人の問答とも言えない問答を見かねたのか、トマリがため息交じりに介入した。それを聞いて、ホイレンもおお、と気付いたような顔をした。

「そうだな。よし、マキリ行くぞ」

「了解。じゃあねトマリ」

トマリは手を振るだけで答えた。雑な扱いに、マキリは苦笑いを浮かべる。

三人はそこで別れ、トマリは道具屋へ、二人は加工屋へとそれぞれ歩を向けた。

※

数分後。

マキリは一人、ポツケ農場で釣りを楽しんでいた。

空には既に星が見えている。傍らにはマキリと共に釣竿を持ったコジロウの姿があった。

「……主人。いい加減に元気出してくださいにや」

「……うん。ごめん、ちよつと堪えたから、あと少し釣りをしているでもいいかな」

「それはかまわにやいですけど……何もこんなところで魚を釣らなくても」

マキリは岸からほど近い場所で釣りを楽しんでいた。実はポツケ農場には栈橋があり、その先端から釣りをした方が大きな魚が捕れるのだが、マキリは今、大物をつりたくて釣りをしているわけではない。

「まさか案内をする側が追い出されるとは……」

マキリはぽつりとつぶやいた。

道具屋の紹介を終えて加工屋に向かった二人は、ひとまず加工屋のオツカイに挨拶をするところまでは行った。そこまでは問題なかった。

ところが、ホイレンとオツカイとの間で大剣の美しき論争が勃発。攻撃力、強度こそが正義だと唱えるホイレンに対して、加工屋の立場から整備のしやすさを重視するオツカイは出会ってわずか二分にして鬭争状態に移行した。

マキリは無論仲裁しようとした。いくら何でも初対面から決裂するのはまずいと判断したのだ。

しかし、二人にとつては余計なお世話だったらしく、マキリは邪魔だと言われて加工屋から追い出されてしまった。

「……いやあ、ほんと、時間の価値ってなんなんだろう」

「主人。オツカイさんはいつでもそんな感じにや。気にしたらまけにや」

「そうだね……コジロウ。ありがとう」

オツカイはよく言えば真面目、悪く言えば頑固な職人気質だ。納得できない仕事はしない。だから品質にはこだわりますが、その分融通が利かない。

マキリもそのことはよくわかっていたつもりだったが、まさか生まれたときから知っている人間よりも今日会った人間との会話を優先されるとは思わなかった。地味にシヨックである。まあ、あれは会話というよりは喧嘩だったか。

マキリは釣った魚を持っていた焼き肉セットを使って焼いていた。コジロウも魚には目がないらしく、焼けた傍から魚を頬張っている。その様子を微笑ましく見てから再び釣りに戻ると、水面を見たマキリは目を瞬かせた。

「・・・ああ、今日は晴れだったか。コジロウ、川を見てごらん」

マキリがそういうと、コジロウも川に目を向けて、にやくと、間延びした声を上げた。恐らく感嘆しているのだろう。

マキリは破顔一笑して呟いた。

「こういうのが見れたのは収穫だったね」

天に広がる星の海とその水鏡。

雲に隠れる月の光と、山から吹き下ろす夜の風。

視線を上にあげれば、そこには満天の星空がある。

ああ、良いな。

陳腐な感想しか出てこないが、それでいい。マキリは詩を読む練習などしていないし、無理に着飾っても嘘くさい。

こんなにゆつくりと夜空を眺めたのはいつぶりだろう。

昔はそんなことをしていたような気がするけれど、もう随分と長い間、こんなことをする余裕はなかった。

そして、ふと思った。

ハンターを辞めたのだから、これからはこの自然の中で暮らすわけだ。

大自然の中に人間が作り出したゆりかごの中で、油断していても死ぬことがなく、安全な世界。

夜空を眺めていても、モンスターの脅威に怯えなくても良い場所
で。

「・・・悪くない、よね」

望んでいた場所は、もうすぐそばまで来ている。

そんなことを感じながら、マキリは手ごたえが出た釣竿を引き上げた。

サシミウオだった。

※

「・・・で、聞きたいことってのは何だ？」

オツカイは短く、端的に切り出した。

村の人間と同じように民族衣装を身に着けているが、その眼光は猛禽類のように鋭い。人を睨み付ければ、さぞ威圧感が増すことだろう。

論争が一区切りした二人は、家の中で酒を飲み交わしていた。

論争はどちらか一方が勝ったわけではない。どちらの言うことにも理があり、そもそもハンターと加工屋、二つの視点で争っているのは結論を出すのは難しい。

二人もそのことはわかっていた。だからなのか、意外にもあつさり、妥協という形で落ち着いた。マキリの心配は完全に取り越し苦労だったということになる。

家の中にいるのはホイレンとオツカイ、オツカイの妻であるウイと、娘のクーだけだ。クーは初めて見る大人に興味津々の様子だったが、何やら真剣な雰囲気を感じたウイが抑えている。

「ちよーつとだけな。ちよつとだけ、質問がある。答えたく無けりや答えなくてもいいんだ。それを念頭に置いて聞いてくれ。オーケーか？」

ホイレンは相変わらずの軽い口調で、しかし、少しだけ真剣な表情で問いかける。オツカイは少し不審に思ったが、頷いて了承の意を表した。

それを見たホイレンは咳払いをして、所々あー、や、んーという声を挟んだ。

「マキリのことなんだがな」

「あいつがどうかしたか。最近は何も特別なことにはしてないしかやっていないが」

「んー、そこなんだよなあ」

オツカイは怪訝な顔をする。

「何がだ？あいつのボーンククリには何も特別なことはしていないぞ」

「そうじゃなくてだな。あーっと、なんか隠してたら悪いな。いや、本当に」

ホイレンは頭を掻いて、とても言い辛そうな様子を見せる。オツカイは首を傾げる。いったい何を訊くつもりだろうか。そう思った時、オツカイの脳裏に一つの可能性が浮かんだ。

そして、それは見事に的中する。

「あいつの本当の武器を教えてください」

オツカイとウイの表情が強張り、クーは首を傾げた。

ホイレンは『隠していたこと』であることを察して、珍しく苦笑いを浮かべた。

第4話

雑草を抜く音が農場に響く。

雲ひとつない青空が頭上を覆い、銀色の髪が太陽の光を反射する。傍ではコジロウも全身の力を込めて雑草を抜いており、時々すつぽ抜けては尻餅をついていた。

マキリはそれを見ては静かに笑い、大丈夫かと声をかける。コジロウはニヤーと鳴いて返事を返す。

ホイレンとの雪山探索の翌日、マキリは農場に足を運んでいた。

これは珍しいことではない。マキリは狩りがないときはほとんど毎日のようにポツケ農場を訪れている。それは彼が自分をそう評するのように、農場が気質に向いているということもあり、来るべき将来のための訓練とも言える。

毎日作物の様子を見て、何か異常があれば対処する。それが農家の仕事だが、そもそも『異常』を察することが出来るのは熟練の勘に近いものがあり、その『対処』もまた、確固とした知識が必要なのだ。だからそれを見て、覚える。その為には出来る限り足繁く通い、経験の量を増やす。

マキリがやっているのは、そういうことだった。

やがて、コジロウが二回に一回は尻餅をつくようになり、マキリは穏やかに笑いながら休憩を提案した。

二人、地面に座りながらパンをかじる。

「ご主人」

「なに？」

「申し訳ないにあ。僕が先にばててしまつて」

「僕の方が体が大きいんだから当たり前じゃないか。それに、コジロウには十分世話になつてるよ」

マキリが教わった農業の基礎はほとんどがコジロウから与えられたものだ。コジロウがこの村に来たのは二年前だったが、それ以前にも別の場所で農業をしていたらしい。はつきり言ってコジロウの農業の知識は卓越していた。

しかし、コジロウにはその自覚がないらしく、首が取れそうな勢いで頭を横に振った。

「そんなことないにや。僕が居たところにはもっと凄いアイルーが居たにや。僕はまだまだ未熟にや」

あくまでもコジロウは未熟者というスタンスを崩さない。何がそんなにも彼を頑なにさせるのかはわからないが、何か事情でもあるのだろう。マキリはそう思っあまり深く訊こうとはしない。

ホイレンだったなら根こそぎ聞きたがるだろうが、と、マキリはぼんやりと予想する。

「・・・ホイレンはどうしてあんなに僕のことを気にするんだろうな」「ご主人が前任ハンターだからじゃないですかにや？」

「いや、それにしても干渉しすぎな気がするんだよね」

場合によっては、怒っても良いような、というか少しだけ腹立たしい質問をすることもある。しかし、ホイレンの独特の雰囲気があるのか、不躰な質問でもすらりと答えてしまいくらいになる。ああいった雰囲気をつたった人間は今までマキリの周りには存在しなかった。

「都会の人はあなのかな」

「あの人は特別だと思っにや。僕も猫バアに連れられてミナガルデに行ったことがあつたけど、あそこまで積極的な人は珍しいにや」

コジロウは意外にも様々な場所を回っている。大陸を回ったり、時には飛び出したり、本人にも予想がつかない場所に行くことがあるという。猫バア曰く、生粋の巻き込まれ体質なのだそうだ。

マキリのもとに居る時が最も平穏な時だ。と、先日コジロウが漏らしているのを聞いた。

しかし、マキリにとつてもコジロウという時間が最も平穏な時だった。

特に、ここ数日を振り返ってみるとそれは明らかだ。

「・・・こんなに忙しい日はそこまでなかったなあ」

いつも通り、トマリに言われて狩りに行ったことが始まりだった。そこで雪獅子とその配下に追われ、その雪獅子を轟竜が食ったかと

思えば、今度は自分が食べられそうになる。

そこをハンターに助けられて無事にお勤め終了かと思いきや、翌日に雪山散策。しかも普段は使わない大剣を持たされてギアノスたちと戦闘。その後も雪山散策をして、村に帰ってきたのは夕方だ。

「・・・我ながら、濃い二日間を送ってしまった」

しかし、今日はそんなことはしなくてもいい。

何故ならば、ホイレンの歓迎会があるからだ。

歓迎会を開く以上、ホイレンが居なければ話にならない。ホイレンが居ないと出来ないということはつまり、今日は狩場にはいかないということ。それは自動的にマキリの休みをも意味する。

「休みだよ。コジロウ。やっと休みだ」

「ご主人の場合、休みでも農場に来てるじゃにやいですか」

「そりやそうさ。農業は心の癒しなんだ」

モンスターとの戦闘でささくれた心癒してくれる存在。マキリにとってはそれが農業であり、コジロウだった。

「別に農業が癒しでも良いんだけど、ちよつと顔貸してくれる？」

例えば、いま聞こえた声の主とは違って。

マキリは思わず空を仰ぎ、自分の後ろに立つ少女の姿を思い浮かべた。

恐らくは腰に手を当てて、その美しい金髪を風に流しているのだろうなあ、それもちよつとおつかない顔で。

何度か似たようなことがあったために、もう驚くようなことはない。いい。

「ちよつと、早くこつち向きなさいよ」

ぐりん、という音と共に回されたマキリの顔は後ろに向けられ、声の主、トマリの姿を捉えた。

「・・・どうしたの、トマリ」

若干痛む首を抑えながら、マキリはトマリと相對した。トマリはいつも通りのマフモフを纏い、板についた冷たい表情でマキリを見下ろしていた。

「オババが呼んでる」

「オババが？」

トマリの言葉に、トマリは真っ先にハンターの仕事か、と考えた。しかし、すぐに頭の中で否定した。何故なら既に新たなハンターは来ているのだ。百歩譲って今日がホイレンの歓迎会だから、という理由でマキリにお鉢が回ってくる可能性もある。

「でも、オババはそんなに鬼じゃないもんな……」

マキリの心情を無視して命令をするような人物ではない。マキリが頭の中で疑問を反芻していると、呆れたような声音が彼の耳に届いた。

「何考えてるんだか知らないけど、ちやつちやと行って来て」

トマリはマキリにそう言い放つと、目の前の畑を見据えて片目を瞑った。

「また畑の手入れやってたの？コジロウも一緒に？」

「そうだよ。僕の日課みたいなもんだからね」

「僕もそうですよ」

二人の度重なる日課宣言に、トマリは複雑そうな顔でため息を吐く。

「……仮にもハンターのやることじゃないわね。まあ、もうそろそろ終わりみたいだけど」

「そうだよ。もうそろそろ終わりなんだ」

マキリがそう答えると、トマリは少しだけ眉を潜める。その表情は何かを思い悩んでいるように見え、マキリはその表情の変化を、怪訝そうにして見ていた。

しかし、トマリの表情が元の氷像のような、路傍の石を見るようなものに変わり、マキリはほっとする。

トマリがマキリの前で悩んでいる。という光景は珍しかったが、それゆえにどこか落ち着かなかった。

「まだ、あんたはハンター。それは変わらない。しっかりしなさい」

「……はい。わかりました」

トマリのピリピリとした、緊張を促す声音を聞いて、マキリの背筋がぴんと伸びる。

何故か敬語で返事をしてしまったマキリを見て、トマリは口元に笑みを浮かべる。

「今回のことはハンターとしての仕事じゃないと思うわよ」

「じゃあ、なんだろう」

「この村で指折りの力持ちで、いま手が余ってるのがあんた。こういうばわかる？」

「力仕事かあ」

マキリは十五歳だ。既に大人の体つきになりつつある。それに加えてハンターと言う仕事をやっていただけあり、その肉体は並大抵の大人よりも屈強になっている。時には二十キロ以上ある卵を運ぶような運搬クエストを受けなくてはならないのだから、当たり前前だ。

しかし、そういった仕事であれば全く問題ない。

何故なら、命が掛かっていないのだ。

命が掛かっていなければマキリの体力はそうそう尽きるものではない。ドドブランゴを相手にあと一步で逃げ切れるところまで全力疾走を続けたその体力は伊達ではないのだ。ちよつとやそつとの労働で尽きはしない。

「よし、それじゃあ行ってくるよ。あ、コジロウごめんね？手伝い途中なのに」

「問題ないにや。元々はぼくひとりでやるつもりだったにや」

「私が手伝うわよ」

唐突に発せられたトマリの言葉に、マキリは目を丸くする。

「え、大丈夫なの？」

「別に良いわよ。仕事なら夜にやれば終わるんだから」

トマリは自信ありげに言った。自分の仕事に対してはかなりの自信があるのだろう。実際、一時期睡眠時間を削る勢いで猛勉強していたのをマキリは知っている。

最も、何の仕事をしているのかは知らないし、全く教えてくれないのだが。

しかし、いま話しているのはそのことではない。

「そつちじゃなくて、体力の方だよ。意外と力使うけど、大丈夫？」

マキリがそういえば、トマリは頬を引き攣らせた。その表情が意味するところが怒りなのか、それとも体力を使うという言葉に対する恐れなのかは分からない。

「いくらなんでも草むしりくらいでばてないわよ。馬鹿にし過ぎ」

「いや、本当に、割と力使うんだよ。腰への負担も結構ひどいからさ」
実際、マキリの腰も普段はあまりとらない体勢をとったおかげで少しだけ不調を訴えている。普段からあまり体を使っていないトマリがこれをやればどうなるのか、マキリには容易に想像できる。

しかし、トマリはやはりというべきか、強情な態度を崩さない。

「出来るったら出来るわよ。なんだったらこれを使ってもいいし」

トマリがそう言って取り出したのは二つの瓶だった。どちらも一つの掌に乗るようなサイズ。茶色の容器に入れられているため中身を見ることは出来ないが、今の話の流れからマキリは何となく察していた。

「鬼人薬と強走薬？」

鬼人薬は一時的に鬼神のごとき力を発揮できるという触れ込みの薬だ。強走薬も、いくら走っても疲れることがないという触れ込みの薬。どちらも効果は確かな薬で、ハンターの良いお供だ。もつとも、マキリは強走薬しか使ったことがないが、どちらも強力な薬だ。

「そうよ。これがあれば少しはましになるでしょ」

「・・・もしかして、わざわざ持ってきたの？」

「違うわよ。常備してるの。いつ力が必要になるかわからないでしょ」

こっちはあんたみたいなの馬鹿力なんてないの、そう言い放つトマリに、マキリは啞然としてしまう。

ハンターでもないのに鬼人薬と強走薬を持っている人間など聞いたことがない。いや、マキリが知らないだけで他にもいるのかもしれないが、なんにしても常識外れだ。

効果だとか市場にあまり出回らないだとか、そういったことではない。

「それ、不味いよね」

「良薬口に苦し。苦い薬を敬遠するなんて子供のすることよ」

トマリはそう言つて薬をウエストポーチに仕舞う。しかし、マキリの言いたいことはそれだけではない。単純に、薬には副作用が付き物なのだ。

しかし、マキリの言いたいことはわかっている、とでも言いたげにトマリは手で制した。

「大丈夫よ。普通のハンターが使うものに比べたら千倍に薄めてあるから」

「・・・なら、良いけど」

こうなつたときのトマリは頑固だ。この状態になつたトマリをマキリが止められてことは一度としてない。

「さつさと行つてきなさい。コジロウも居るんだから大丈夫よ」

ね、と同意を求められたコジロウは鷹揚に頷いた。その仕草は芝居がかつており、マキリは苦笑した。

「わかつたよ。コジロウ、よろしくね」
「任せるにゃー！」

胸を叩いて了承したコジロウを見てから頷いて、マキリは農場を後にする。

その姿が見えなくなつてから、トマリはコジロウに向き直つた。

「ねえ、コジロウ」

「なんにゃ？」

コジロウは返事をしながらも、若干、鳥肌が立つのを感じていた。

それは、トマリがマキリの前では決して浮かべないような満面の笑みを浮かべていたことが原因だろう。しかし、トマリはコジロウの様子には気が付かない。否、気がついても止まりはしないだろう。

「ちよつとだけ、モフモフしてもいい？」

「にゃ？」

その数秒後。

コジロウの喉からはゴロゴロという音がなつていた。

※

「オババ。来たよ」

「うん。よく来たね。それじゃあ早速で悪いけど、竜車を直してくれんかね」

オババと焚火を挟んで座ったマキリは、オババの話を聞いて首を傾げる。

「別に良いけど、どうして僕？」

「変なところで抜けてるねえ。ウタリは今、怪我をしてるだろう？」

「ああ、そうだった」

ウタリ、というのは大工の親父だ。そもそもマキリが一昨日雪山に行く原因になった人物である。

確かに、薬草を使ったからと言って一日や二日で怪我が治ると思えない。ウタリにも息子は居るが、その息子はまだ五歳。大工と呼ぶには幼すぎるのは言うまでもないだろう。

「でも、僕も大工のまねごとなんて出来ないよ？」

「ウタリに監督させるから大丈夫さ。要するにいま必要なのは力があつて、それなりに器用な人間だからね」

「あれ？療養してなくて大丈夫なの？」

確かウタリは屋根から落ちて腰を痛めた。本当ならば動くのも辛はずだ。実際、薬草を届けに行つたときはベッドに寝たきりになっていた。

しかし、オババは何が可笑しいのかほっほ、と柔和に笑った。

「あの子も気にしてるのさ。屋根から落ちるなんてへまをやつて、誰かに仕事の代わりをされて、ずっと寝てられるほど凶太くないんだよ」

そう言われて、やっと納得する。

確かに、マキリが体調不良になつて、どうしても誰か、別の人間が狩りに行かなくてはならなくなったとき、流石について行くこともできないうが、黙って寝ているということも出来そうにない。狩りに行きたくない自分ですらそれなのだから、大工仕事に誇りを持っているウタリならばなおさらだろう。

「竜車はどこに置いてあるの？あと、ウタリを迎えに行った方が良い？」

「竜車はほら、水車の近くに置いてあるよ。ウタリは大丈夫じゃないかねえ。確かホイレンさんが会いに行くとか言ってたから」

たぶん、竜車のところまで運んでくれるんじゃないかい。と、オババは行った。マキリもそれには同意見だ。出会って間もないが、あの男はそれなりにおせっかいな男だとも思っている。

だが、疑問はある。

「ホイレンが？どうしてウタリのところに行くの？」

「さあねえ、私にはわからないよ」

オババはほわほわとした笑みで言うと、瞬時に鼻提灯を付け始めた。どうやら眠りに落ちたらしい。

「・・・うん、じゃあ行くか」

オババの寝つきの良さは昔からよく見てきたため、今更驚くことはない。

驚くことはないが、それでも会話が途中で終わってしまうとどうしても妙な違和感がある。

ホイレンがウタリに会いに行く理由。恐らく、というか十中八九村の人へのあいさつだろう。今日、歓迎会があるのだから気にしなくてもいいと思うが、ホイレンにはホイレンの考えがあるのだろうか。マキリは少し考えながら歩いていたが、考えてもわかるものではない。すぐに思考を打ち切って、ポツケ村の水車へと向かった。

※

「おお、マキリ、昨日ぶりだな」

「こんにちは、ホイレン、ウタリ」

ポツケ村の入り口からほど近い場所にある水車。その傍らに置いてある竜車の前には二人の男が居た。

一人はホイレン。マキリたちと同じようにマフモフシリーズに身を包み、愛用の大剣も持つていないため、若干いつもよりも存在感が

薄い。

「ようマキリ。この間は世話になったな」

もう一人は、茶色のくせ毛が特徴的な男だった。

背丈自体はホイレンよりもありそうだが、腰を悪くしているため立ち上がることが出来ず、手ごろな岩に腰掛けている。顔だち自体は優しそうだが、その実、加工屋に負けないほどの頑固者である。

マキリはウタリに気にしないでくれ。と声をかけてから、ホイレンに目を向ける。

「ところで、ホイレンはウタリに何の用だったの？」

「あ？普通に挨拶だよ挨拶。歓迎会であいさつ回りばかりしてるっつても面白くないからな。やるべきことは先にやっちまおうってわけよ。どうだ？賢いだろ」

「自分で賢いって言わなければ賢かったかもね」

マキリの返しに、ウタリは膝を叩いて笑った。

「ちげえねえ。能ある鷹は爪を隠すってな」

「おいおい、自己評価をきつちりするのも大切だぜ？そういう謙遜をしてると周りも自分のことをわかってくれなくなっただな」

「はいはい。そういうことは後で聞くよ。で、ウタリ、僕はどうすればいいの？」

ホイレンの言を無視して、マキリはウタリに話の矛先を向ける。ホイレンは不満そうな顔を見せ、その顔を見てウタリは再び笑った。

「はっはっは！お前ら会ってから三日しかたつてねえとか思えねえな！息がぴったりだ」

「ホイレンが接しやすいからね。多分そこだと思っよう」

「まあな。俺ほど接しやすい人間もこの世にはいねえだろうさ」

「調子に乗るとウザいけど」

「ひでえなおい！」

二人のやり取りにウタリは笑い声を絶やさない。笑いのツボが極めて浅いのだ。マキリがウタリと会話をしている、ウタリが笑わなかったことなど数えるほどしかない。

やがて笑いつかれたウタリが息をついて自分の復活を伝えると、

やっこのことで作業が始まった。

竜車というのはアプトノスやポポと言った草食獣に引かせる車で、商人や旅人、そしてハンターたちの足となるものだ。一応頑丈には作られているが、大抵の場合は軽くない重量がかかるため、どうしてもガタが来る。

実際、今回ガタが来ていたのも最も負荷がかかる車軸の部分だった。若干ではあるが歪んでいる。車軸が歪むと車体全体の揺れに繋がりがり、その揺れはさらなるゆがみを産む。そういった連鎖を起こすため、出来る限り早い修復が望まれる。

今回はその車軸の交換だ。一度竜車の車輪を取り外して車軸も取り出すのだが、この際歪んだ車軸をすんなりと取ることは出来ないため、途中で切断する。そして、新たな車軸を挿入する。

言ってしまうえばガタが来た部分を取り換える。それだけのことでしかない。

逆に言えば、それだけのことでしかないからこそマキリが呼ばれたということもできる。

作業自体は一時間程度で終わる。

「なるほどな。確かにこれならマキリでも出来るわなあ」

「あたぼーよ。これくらいできて貰わなくちやな。きちんと大人になつたならよ」

マキリが真剣に作業をしている横で、ホイレンとウタリは二人で話を続けていた。二人とも本質的にお喋りなのだろう。会話が途切れる様子は一向にない。

「大工仕事って言うと、ここら辺は大変じゃねえか？雪で色々壊れるだろ」

「まあな、毎年のように屋根は修繕するし、道を慣らすのも俺の仕事だからな。けど、遣り甲斐はあるぜ？」

ホイレンとウタリは気が合うのか、始終話し続けていた。マキリはひたすらに修理に集中し、所々ホイレンたちに支えてもらいながら、修理を一時間で終わらせた。

「・・・こんなもんかな」

「うし、初めてにしては上等だ。お疲れさん」

ウタリからの労いを受けて、マキリは少しだけ疲れた笑みを見せる。慣れない作業は肉体的にはともかく、精神的な疲労が大きい。

マキリは首を回して体を解してから立ち上がり、手ごろな岩に腰掛けた。ホイレンとウタリも同じように腰掛けており、三人で向かい合うような形になる。

「ほらよ。飲みな」

ウタリの声と共に渡された木のカップを見て少し顔をほころばせながら、マキリはそれに口をつける。

そして、その体がホカホカとするような辛味に顔を歪めた。

「・・・これ、トウガラシが入れているね」

「はっはっは！体が温まるだろ？まあ、お前はあんまりホットドリンク飲まねえからな。苦手かもしれねえが」

雪山で活動する際、一般のハンターが忘れてはいけないものの一つがホットドリンクだ。

ホットドリンクとは飲むことで人間の体を温める効果を持つアイテムだ。

通常の雪山はほとんどの場合氷点下だ。厚着をしなければ人間などあつという間に凍死してしまう。

しかし、厚着をしていればその分機動性も下がり、モンスターを相手にしているときにそんな恰好では簡単に死を招く。だからこそ、ハンターは自分の防具で思うような活動をするためにホットドリンクを飲み、身体を温めるのだ。

最も、マキリの普段着用しているマフモフシリーズであればその弱点を克服し、ホットドリンクを節約することが出来るのでマキリがお世話になったことはあまりない。

そのホットドリンクにはトウガラシが入っている。マキリはあまり辛い物が好きではないので苦手だが、確かに身体は温まる。

「そういうえば、お前マフモフシリーズ以外の防具を着たことってあるのか？」

「ないよ。生まれたときからマフモフ一筋だね」

ホイレンの疑問に、マキリはあつさりと答える。しかし、ホイレンは怪訝な顔を見せる。

「お前が前任者の言葉守るのは良いんだけどよ。そんなに臆病なら防具も変えた方が良いんじゃないか？」

ホイレンの言葉に、マキリは難しそうな顔を見せる。どういったものか、といった表情だ。

「……んー、僕にとってはどっちもどっちなんだよ。マフモフシリーズは防寒対策がしっかりしてるから、いきなり吹雪いても水と最小限の食料があれば生き残れる。けど、普通の防具とかだとそうはいかないでしょ？ ホットドリンクも結構ポーチを圧迫するし、その分水も携帯食料も入らなくなる」

「……けどなあ、やっぱり俺にとってはモンスターの攻撃の方が厄介だと思うんだが」

二人のやり取りを見て、ウタリは笑った。彼からしてみれば控えめに、ほかのものから見れば盛大に。

「ははは！ ホイレン。そいつの臆病具合をなめちやいけねえよ。そいつは正式にこの村のハンターになってから二年間。痣はともかくかすり傷一つ負わなかった男だぜ」

ま、その分戦果も大したことねえけどな。そう呟くウタリに、マキリは恨みがまし気な目を向ける。本人もそう思っているが、他人に言われるのでは違うのだろう。

一方、ホイレンは目を丸くして驚いていた。

「……かすり傷一つなし？ マジか。マキリが恥に想って隠しているとかじゃなく？」

「基本的にガウシカとかポポとか、珍しくてドスファンゴ、ドスギアノスクらいしか相手してないからね」

「ああ、それに、こいつ、毎日温泉に入ってるから、隠すのは無理だ」マキリはホットドリンクもどきを喉に流し込みながら補足説明を加える。そうでなければ、何かホイレンが自分に対して変な期待を失てしまいそうだと思ったからだ。

しかし、幸いというべきか、生憎というべきか、ホイレンの関心は

既にそこにはなかった。

「・・・温泉？ここには温泉があるのか!？」

ホイレンは岩から立ち上がり、目を爛々と輝かせて目の前の二人に詰め寄った。突然の豹変に、マキリは若干身体をひき、ウタリは一瞬キョトンとしたもののすぐに大笑いし始めた。

「はっはっはっは！なんだ、知らなかったのかホイレン。そいつは損したなあ!！」

「マキリ！なぜ伝えなかった!！」

ホイレンは瞳に怒りの炎を燃やし、マキリを睨み付ける。しかし、マキリからしてみれば知ったことではない。

「逆になんて知らないのさ。ポツケ村の湯治って言えば結構有名なのに」

「知るか！そんなもん。ドンドルマジヤポツケ村って名称を知ってるのも雪山を狩場にするハンターか、じゃなけりや行商人くらいなもんだ!！」

「ひどいな。この村の知名度」

マキリも二年間、誰もハンターが来なかったことから知名度がないことは薄々感じていたが、まさかそこまでのものだとは思わなかった。それでは誰も来ないはずだ。

マキリが自分の村の知名度のなさを嘆いている間にも、ホイレンは己の迂闊さを嘆いていた。

「くそ、マジか。そういえば確かに、うつすらと、頭の片隅に温泉があるって聞いたことがある気がする・・・いや、あれはユクモ村だったか？頭がこんがらがってきた」

ホイレンは頭を抱えてぶつぶつと呟いていたが、やがて吹っ切ったようにため息を吐くと、マキリと目を合わせた。その表情はなぜか鬼気迫っており、マキリは苦笑いを浮かべざるを得なかった。

「マキリ。あとで案内しろ、いや、いま案内しろ。今すぐに、だ。良いな」

「・・・はい。了解です」

マキリは渋い顔で頷く。

ウタリはどうやらツボに入ってしまったらしく、岩を叩いて笑い続けている。そのうち過呼吸になるのではないか、と思えるほどの笑い方で、周りの村人たちの心配するような視線が見受けられる。

でも、まあ。

マキリは苦笑の裏で考える。

村人の視線にはよそ者に対する忌避の視線はなく、むしろ、馬鹿をやっている村の男たちを見る、親し気なものだった。きっとこれはホイレンの人柄もそうであるし、村人たちの温厚な気性もいい方向に働いたのだろう。

うまく溶け込めたようで良かった。

マキリはひとまず、安堵して、目の前のホイレンを落ち着かせることに専念した。

その後、結局マキリが強引に温泉に入れられたことは言うまでもない。

第5話

「では、新たな村のハンター。ホイレンの就任を祝って、乾杯！」
道具屋のアイの声に呼応して、そこに集まった人々の「乾杯」が重なった。

木製の床、テーブル、椅子と、橙色のランタンが照らす会場は心地よい雰囲気に含まれていた。

集会所の広間を使って行われた歓迎会は、夕刻に始まった。

家々から食料や酒が持ち出され、テーブルには溢れんばかりの食材が載せられている。雪に囲まれた場所で用意できるとは思えないほどの量に、誰もが感嘆し、料理の山に見惚れていた。

「お、この肉うめえな！ポポか？ん、こつちの野菜もうめえ！なんだこりや、あちでも食ったことねえもんばっかだ！」

そんな中、ホイレンは食材を実に楽し気に頬張っていた。その姿に遠慮も緊張の文字もなく、その豪胆さは驚嘆の一言に尽きる。

ホイレンは当然宴の中心にいた。

ただし、本来ならば村人たちに歓迎され、酒を飲まされまくるはずのホイレンは逆に村人たちに酒を飲ませていた。逃げようとする村人を捕まえている姿は実にハンターらしかったが、マキリの理想とするハンターとは似ても似つかない。

そのマキリはと言えば、席の端にオババと共に陣取っている。

オババはあまりこういった宴の席で仕切るような性格ではないし、マキリもそうだった。加えて、二人ともどちらかというとお喋りなほうではない。二人揃ってひっそりのご飯に舌鼓を打っていた。

「マキリ、とりあえずお疲れさん」

オババは野菜をモグモグと咀嚼し終えてから、ぽつりとつぶやいた。マキリは頷く。

「僕が死ぬ前に来てくれてよかったよ」

「あんたが死ぬってことはないと思うが、それなりにストレスだっただろう？」

「まあね。でも、終わり良ければ総て良しって言うし、もう大丈夫だ

よ」

実際のところは、まだ雪山で案内し終わっていないところがあるため終わりではないのだが、ホイレンが既に村に溶け込み、この村のハンターとなった以上マキリの役割は終わったも同然だろう。

ただ、このまま終わって何も思うところがないか、と思うと、ないと言い切れる自信もなかった。

「……そういえば、トマリが来てないが、どうしたんだらうね」

オババの声を受けて、マキリは少し体をビクつかせてから、周囲を見渡す。

言われてみれば確かに、村の全員が集まっていそうな賑わいだというのにトマリの姿はなかった。

どうしたのだろう。マキリが首を傾げれば、横からオババではない声が聞こえた。

「トマリなら家にいるわよ。今は仕事をしてるんじゃないかしら」

振り返れば、そこにいたのは金の髪を一つに束ねた女性だった。トマリの母親のカリンである。トマリをそのまま大人にしたような、とまでは行かないまでも、親子と一目でわかる。どこがとは言えないが、眼や鼻の形、髪色などがよく似ているのだろう。

「……仕事、か。じゃあ僕は行かない方が良いね」

「あら、そんなことないわ。マキリが迎えに行ったらトマリもきつと来るわよ?」

「トマリは僕に仕事を知られたくないみたいだから」

以前、何度か聞いてみても一向に答えてはくれなかった。「あなたには関係ない」の一言で終わらせられてしまい、マキリはそれ以上言い募る気にもならなかったのだ。言い訳をすれば、その時は時期も悪かったしトマリの機嫌も悪かった。いや、トマリの機嫌は年中悪いが、その中でもその時期は特に機嫌が悪かった。

「あらー、まあ、あの子だったらそうかもねー」

カリンは喉を鳴らしながら酒を飲む。その姿はまさに酒豪というにふさわしく、下戸なマキリを戦慄させた。人の母というものは何故こんなにも強く見えるのだろうか。マキリは腕つぶしはともかくと

して、人としては一生勝てる気がしなかった。

そんなマキリの心情を推し量ることも出来ず、またするつもりもなく、カリンはマキリに笑いかけた。

「うん、でもまあ。行ってきなさい」

「・・・あれ？さつきまでの話聞いてました？」

「うん。だから行ってきなさい」

「もしかして酔ってる？」

「失礼ね。私を酔わせたかったら竜酒のタルを持ってきなさい」

「いや、死ぬから」

竜酒とは竜を酔わせたと言われる酒だ。その逸話の真偽はともかくとして度数の高さが半端ではなく、一瓶飲んだだけでも急性アルコール中毒になりかねない。

しかし、目の前のカリンを見てるとそれすらも一息に飲んでしまいうような雰囲気がある。いったいどうすればこんなにも強い女性が育つのだろうか。マキリはぼんやりと考えるが、目の前のカリンは確かに、酔っては居なさそうだった。

「・・・えっと、たぶん行ったらトマリに怒られるんだけど」

「男がうじうじ言わないの。大体あの子に怒られるって言ったって裏拳で骨が折られて肺に刺さるわけじゃないんだから」

「いや、なんで微妙に「デイテール細かいの」

視界の端で、トマリのお父さんが震えていた。まるで何かを思い出しているような様子だ。マキリはそれ以上お父さんを見ることを辞めた。触らぬ神に祟りなし。自ら人の恐ろしいエピソードを聞きに行く度胸はマキリにはなかった。

「とにかく、行ってきなさい。別にあの子だって怒らないわよ。なんか疲れてたし。今がチャンス」

「何のチャンスだ」

恐らく草むしりで体力を消耗したのだろう。元々あまり身体が強くないというのに無茶をする。

と、そこでマキリは脳裏に恐ろしい想像をしてしまう。

『・・・あんだ、私が草むしりしてる時に温泉入ってたってこと？』

『いや、違う。これはホイレンに無理矢理』

『・・・』

『ごめんなさい許してください』

ごみを見るような目で見降ろされる未来が、石を上放ったときに落ちてくるといふ自然法則と同じくらい確かさを予測が出来る。

「・・・裏拳で骨が折られて肺に刺さるかもしれない」

もしくは、それに準じるほどの精神的なダメージを負うかもしれない。

「ちよつと、うちの娘に何したのよ」

「いや、何かしたわけじゃなくて」

この場合、悪いのはたぶんホイレンのだが、それにホイホイとついて行ってしまったマキリにも責任はある、と言えるかもしれない。いや、トマリならば必ず言うだろう。

「・・・ちよつと行ってくる。帰ってこなかったら明日の朝くらいに探しに来て」

「大丈夫よ。あの子もそんなに怒らないから。何やったのか知らないけど」

カリンは笑いながら言うが、マキリにはとてもそうは思えなかった。

謝らなければ、たとえそれが地雷であろうと、あとで知れるよりは百倍マシだ。

マキリは周りから怪しまれない程度には急いで、集会場から飛び出した。

※

トマリの家は村の中でも中心近くにある。何か特別な理由があるわけでもなく。ただ単に代々その土地に住んでいたというだけの話だ。マキリの家も同じような理由で村の外縁に位置している。

ともかくとして、集会所からトマリの家までは割と近い。集会所が比較的村の中心に位置しているからだ。

マキリは集会所から出るまでは急いで、そこから先は出来るだけゆつくりと歩いた。

何故か。

言い訳を考えるためだ。

「なんて言えばいい。すっかり忘れて温泉入ってました？無理、やばい。嫌われるどころじゃない。じゃあ、ホイレンに無理矢理？意志が弱いとか言われるにきまつてる。いや、でもそれならいつも言われているからいいのか？いや、良いわけあるか。ダメだダメ」

マキリは困っていた。具体的に言うとう酒の席で「なんか面白い話してよー」と話を振られたとき並みに困っていた。

どういえばいいのか全く分からない。何を言えば正解なのかが分からない。頭にストレスばかりが溜まり、堂々巡りを起こし、凄まじい抵抗を与えた電気回路の如く頭がどんどん鈍くなっていく。

「・・・一周周って、許せ、とかはどうだろうか」

言ってみて、マキリは戦慄した。

こんなことを言えばどうなるのだろうか。想像もつかない。

普段から嫌がるマキリを引っ張ってクエストへと駆り立てるトマリ。防具が破損すれば下手くそとこき下ろすトマリ。クエストから帰ってきたときに心底どうでもよさそうな顔で迎えるトマリ。そのすべてが頭の中で統合され、野放図な未来予想が頭の中に描かれては消えていく。

「・・・素直に謝ろうか」

自分で言って、マキリは頷いた。

そうこうしているうちに、トマリの家の前についた。

ほかの家と同じように合掌造りの建物で、特に変わりはない。昔は遊びに来たこともあったが最近ほとんど縁がなく、来たのが久しぶりなことに少しだけ驚く。

「そっか、結構長い間来てなかったしな」

小さく呟きながら、マキリは扉をノックする。家の中からは明かりが漏れているので、中にいることは確かだろう。

少し待てば、「はい」という間延びした声と共に、扉にトマリが近

づいてくる気配が感じられる。

そして、扉は開かれた。

「どちら様でしょうー」

か、という音を待たずに、扉が開く途中で急転換、閉められた。しかし、扉の隙間から見えた金髪は間違いなくトマリのものだ。

何故か若干髪が煤けていたような気がするが。

マキリは一瞬何が起きたのかが分からず、目を丸くした。

「・・・あれ？ちよ、トマリ？どうして閉めるの？」

「・・・なんであんたがここにいるの」

不機嫌さと、何故か少しだけ緊張したような声がある。しかし、マキリとしても余裕がない。そんなことに気付いた様子はなかった。

「歓迎会に来てないから呼びに来たんだよ。おいしい料理もあるし、みんな来てるから」

「・・・あと少ししたら行こうと思ってたの。良いから先に行ってなさい」

マキリはじゃあ、そうさせてもらおうかな。と一瞬思ったが、その前にやるべきことがあった。

「いや、ちよつと謝りたいことがあって・・・」

「・・・何？もしかして雑草抜きのこと？だったら余計なお世話」

「そうじゃなくて」

実際に言えばそのことなのだが、トマリが言っているのとマキリが言っているところが意味する場所が違う。

しかし、それをどう説明したものか、とマキリが悩んでいるうちに、トマリは呆れたようにため息を吐いた。

「分かった。じゃあ少し待ってて、十分くらい」

「じゅ、十分？仕事が終わってないの？」

「仕事は終わった。支度するから十分待って」

十分、という時間の長さにマキリは首を傾げる。

マキリならば長くて三分程度で外出の準備は整うのだが、やはり女性が出出するためにはいろいろと必要なのだろうか。マキリは自分の母親を思い出そうとしたが、母親はあまり家から出る人ではなかつ

たので参考にはならない。

しかし、十分なら待てないことはない。マキリは家の壁に寄り掛かり、上空の星を見上げて時間を潰すことにした。

そして、三十分後、トマリはいつも通りの格好をして現れた。

※

「いや、本当にごめんなさい」

「温泉かあ、私も入りたかったなあ」

「ごめんなさい」

「ねえ、どうせなら私も誘ってくればよかったんじゃないの？忘れてた？」

「・・・忘れてました。すいません」

予定の三倍の時間を寒天の下で過ごしたマキリだったが、謝罪の話が出てしまえばもはや文句を言う権利などなかった。

星空と雪に包まれた夜の中を二人は歩く。

最も、大した距離でもない。肩を並べた二人が共に歩く時間は一瞬だ。

しかし、マキリはどこことなく不思議な感覚だった。

いつもはトマリが先行して、マキリがその後ろを渋々ついて行くという形をとる。トマリがマキリに関わるのは大体が何か用があるときで、そのようというのは基本的にマキリが嫌がることだからだ。

それが今日は違う。二人で並んで歩いている。

昔は同じ目線にあったトマリの顔は、いまとなつてはマキリの肩の部分まで落ち込んでいた。正確にはマキリの身長が伸びたのだが、マキリにとってそこは大したことではない。

変なところで身体の成長を感じる。

「・・・あんな、背は伸びたくせに臆病なままね」

トマリの言葉に、マキリは反射的に頷いた。マキリも考えていたことだ。

「体の成長に心が追いついてないみたいだね」

マキリの困ったような言葉に、トマリはため息を吐く。

「追いついてないんじゃないやなくて置いて行かれてるんでしょ。二年前から変わってないもの」

マキリは思わず息を呑む。

二年前から変わってはいない。ということとは、やはりトマリの感情も、昔から変わってはいないのだろうか。

少しの沈黙、既に集会所は見えている。

この時間もあと少しで終わる。そう思うと、どうにも、マキリには辛抱できなかった。気持ちのタイミングとしても、単純に物理的なタイミングとしても、ここしかない、そう思ったからだ。

「・・・臆病者は嫌い？」

二年前と同じ問いを投げた。

再び、少しの沈黙があつた。トマリの顔を見る勇氣はなく、マキリはただ、目の前だけを見つめていた。

「嫌い。死ねばいいと思ってる」

囁くような返事。

乾いた笑みが出る。

軋んだ心がもう少しだけ、捻じれて、拉げたような気がした。

「じゃあ」

マキリの言葉はそこで止まった。

トマリに睨み付けられたから。

その顔には明らかな苛立ちがあつたから。

何も言うな。確かにそう言っていたようにマキリには思えた。それを言えば、ただじゃ置かない。そんな風を感じられた。

マキリの勘違いかもしれない。何せマキリは、人の心を察するのが苦手だ。

トマリはマキリの顔から眼を外すと、先ほどのマキリと同じように集会所に目を向けた。

既に目的地は目の前だ。

マキリはトマリが歩き出して、少したってから後を追った。

『じゃあ、僕のことばっ』

吐き出されなかつた問と得られなかつた答えはしこりになる。
そして、過去の答えが蘇る。

『私にできないことが出来る癖に、臆病な人間なんて大嫌い』
少しだけ変わった関係。

けれど変わらない習慣。

心だけが置いて行かれている。体も時間も過ぎていく。

「……くそつたれ」

小さく悪態をつく。

『弱みでも握られてんの?』

弱みなんかじゃない。

幼馴染に知られて恥じることなど何もない。臆病ではあつても卑怯なことをしたことなどない。失敗があろうとそれを恥には思わない。
い。

これは弱みなんかじゃない。

ただ、誰かに嫌われたくないだけだ。

「くそつたれ」

マキリは再び悪態をつく。今度は先ほどよりも強く。

トマリに対するものではなく、ホイレンに対するものでもない。

他の誰のものでもなく、彼の糾弾は、彼にしか届かない。

マキリはいつも通りに、トマリの背中を追いかける。

唇を噛めば、少しだけ、血の味がした。

「おーマキリ！見ろよ！オツカイの上半身やべえぞ！」

「見えてるよ。ていうかあんたら酔ってるな」

集会所に戻れば、既に酔いも回った男衆が完全に調子に乗っていた。いつの間にもやら楽器を持ち出して民謡を歌いだしているし、傍らではタルを土台にして腕相撲をしている奴らもいる。

「あいつ毎回毎回本当に服汚くしてくるもんだから嫌になっちゃうよ。洗うこっちの身にも成れってんだ！」

「食事も勝手に出てくるもんだと思ってるしね！骨折ってやろうかと何度思ったことか」

女子衆は女子衆で、普段溜まっているらしき鬱憤を晴らしまくっている。会話の調子が凄まじく怖い。そしてもつと怖いのはタルから直接酒を飲んでいけるカリンだ。マキリはまさか竜酒じゃないだろうな、と疑いの目を向け、トマリもまた若干青い顔をしている。流石に心配なのだろう。しかし、当のカリンは飄々として次なる酒を求める。酒飲みここに極まれり。

マキリは流石に女子衆の中に入り込む勇氣はなく、またトマリの近くによる凶太さもなく、むさ苦しい男衆の中に入り込んだ。

「おうマキリ。これ食べ、うめえぞ」

ホイレンは上半身裸のオツカイ、酔いつぶれたらしきウタリを抱えて登場し、ポポの肉を差し出した。

しかし、マキリは渋い顔をして首を横に振る。

「・・・いや、今はそんな気分じゃ」

「良いから食べ！ほら！」

その声と共に、マキリの口に肉が押し込まれた。

熱い肉汁が目飛び散り、マキリは肉に塞がれた口でうめき声をあげる。

しかし、ホイレンは酔っているのかそれに気づかず、ぐいぐいとマキリの口に肉を詰め込む。

そして、マキリは自分の脳内でぶちり、という音がするのが聞こえた。

落ち込んでいるところにいきなりの狼藉、この落差にマキリは耐えられなかったのだろう。頭に血が上るのを感じながら、マキリはそれを止めるつもりはなかった。

怒涛の勢いで口を動かし、肉を咀嚼する。

ホイレンは最初こそその食べっぷりを微笑みながら見ていたが、マキリの据わった眼を見た瞬間、顔が青褪めた。

「良い度胸だ。ホイレン」

「・・・マキリ？お前、なんか雰囲気か」

「四の五のぬかすな」

ホイレンのみならず、いつもとは違うマキリの様子に、男衆女子衆

ともに息を呑む。しかし、今のマキリにはそんなものを気にするつもりはなかった。

マキリは腕相撲をしているタルの方に顎を動かすと、普段は見せないような獰猛な笑みを浮かべる。

「ぶっ潰す」

ハンター二人の腕相撲は、その日一番の盛り上がりを見せた。

第6話

「っ！」

迫ってくる巨大な牙を、余裕をもって回避する。紙一重を狙うにはその牙の圧迫感はあまりにも大きい。

転がって攻撃を避けた後に、敵の側面に回り込む。

敵は重量級だ。その突進を受けてだけでも命にかかわる。

しかし、それだけの重量を持てば、当然停止するにも時間がかかる。

「よっ！」

つまり、いま、この瞬間において、側面に回り込んだマキリの攻撃は相手にとってみれば、敵に無防備な腹を晒していることと変わらない。

マキリのアギトは斜め横からその獣の肌を切り裂き、肉を引きちぎり、骨を叩き折る。鮮血が舞い、マキリの顔に降り注ぐが、マキリの顔にはいまだ安堵の表情はない。

事実、目の前の獣はよろめきはしたものの未だに生氣は途絶えていない。

古今東西言われているように、手負いの獣ほど恐ろしい存在は居ない。命の危険にさらされた獣は時に己の体をも傷つけるような捨て身の攻撃に打って出る。非力な人間がそれを受ければ手傷を負うは必至。

であればこそ、マキリは常に油断しない。

敵の命が尽きるその一瞬まで、否、狩りが終わるその瞬間まで、マキリの警戒は解けることがない。

目の前の獣はマキリの方向をむく。

そして、その巨大な牙は再びマキリへと接近した。しかし、そこに先ほどもまでの圧迫感はない。

マキリはまたしても余裕を持って回避し、再び側面へと回り込む。

と、そのとき、獣は急激に方向を転換した。

あまりにも唐突なその動きは、間違いなく獣の足にある程度の負荷をかけていることだろう。それは間違いがない。

しかし、それこそが手負いの獣の真骨頂。予測の出来ない動き、それはハンターにとって最も恐れること。獣の牙は横薙ぎにされた大剣の如く、ハンターに向かつていく。

「・・・危なかった」

マキリが相手でなければ、その行動は実を結んでいたであろう。

先ほどと同じ行動に違和感を感じたマキリは、前回よりも一步下が
り、獣の行動を観察していた。

獣は賭けに負け、結果的にその頭をマキリの前に差し出した。

足は動かない。急激な方向転換はその重量に比例した負荷をかけ、
咄嗟の動きに対処できない。

マキリは迷わない。千載一遇の好機を逃さない。

しかして大剣は振り下ろされ、獣の頭は粉碎された。

「お前、ポポ相手に警戒し過ぎじゃねえの?」

「・・・ほっといてくれ」

いったい何があつたのか、やけに好戦的なポポを討伐したマキリと
ホイレンは大剣を背負いなおす。死体は四体。うち三体はホイレン
が狩り、残りの一体をマキリが受け持った。三体担当していたホイレ
ンの方が早く終わっていたことから、マキリとホイレンの技量の違
いが見て取れる。

やはりというべきか、ホイレンの大剣の扱いには無駄がなかった。
ポポの行動パターンをよく把握しているのか、攻撃を一度も食らうこ
となく、一分足らずでポポ三体を葬り去った。マキリも攻撃を食らわ
なかったという点では同じだが、いったいを討伐するのに一分を少し
過ぎた。様に何が足りないというわけではなく、総合力が足りてい
ないのだろう。マキリは心中でため息を吐きながらそう分析した。

マキリは自分の手で狩ったばかりのポポから剥ぎ取りを終え、その
魂の安寧を祈ってから再び歩き出した。

探索二日目。

ホイレンの歓迎会が無事終わり、村の一員として迎えられた次の
日、二人は再び雪山へと足を運んでいた。

天気は良好。多少曇ってはいるものの風も弱く、雪も降っていない。長年の勘から、天気が崩れることもないだろうとマキリは判断した。

マキリは天気が良いうちに雪山の探索を終わらせたいと考え、今日は山頂から中腹までの範囲を重点的に攻めようと考えていた。天気が悪い時期の雪山の入るなどということは山の素人でもやらない。命をどぶに捨てるようなものだ。

そういった理由があり、二人はモンスターが入ってこれないエリア5、大型モンスターの現れないエリア4という洞窟タイプのエリアを経由し、エリア6へと至った。

相変わらず地表は雪に覆われているが、雪は降っていない。気温は変わらず低いため中途半端に雪が解けて雪崩が起きる心配もない。理想的な気候条件だった。

「さて、今日はどうするんだ？」

「今日はここら辺にあるクレバスとかを教えるよ。嵌ると冗談抜きで死ぬからね」

マキリはエリア6からエリア8に向かう途中にあるクレバスに向かう。

エリアの中だけで狩りをするのであれば必要のない知識だが、敵が予想以上に強靱な個体であったり、執拗に追跡してくるような個体だった場合はエリア内だけで逃げ続けるには限界がある。

したがって、大型モンスターに会えば逃げの姿勢を貫くマキリにとっては重要な情報だった。

マキリはしばらく歩くと踏み固められた道を外れて雪の中を進んでいく。ホイレンはマキリが踏み固めた雪の上を歩き、万が一にも雪の中にはまらないように細心の注意を払う。

その状態でおよそ十メートル歩いた場所で、マキリは立ち止まった。

「今から雪を退けるから、少し見てて」

マキリはポーチから拳大の子タル爆弾を取り出し、それをひよい、と目の前に向けて投げた。

きちんと導火線に火もついており、地面に着く直前に爆発した。火薬の量が少ないこともあったが、子タル爆弾は必要最低限の場所だけを削り取った。

そこから見える光景には、ホイレンも言葉を失った。雪が退けられた場所には亀裂があった。幅一メートル。長さほどの程度か分からないものの、長いことは間違いないだろう。

しあし、ホイレンが驚いたのはその在り来たりなクレバスにではない。

むしろ、そのクレバスの中にあつた空間だ。

「・・・なんだこりゃ」

クレバスの中には洞窟があつた。

幅一メートルの亀裂からの光景だけしか見ることが出来ないため全容の把握は難しいが、少なくとも直径十メートル以上の空間がその氷の中にはあつた。中から見れば、トンネルの最も高い場所がちやうど亀裂になっているかのように見えるだろう。クレバスというよりは地下水道と呼んだ方が良さそうな場所だつた。

マキリはホイレンの反応に苦笑いを浮かべる。自分も前任者に連れてこられた時には同じような反応をした覚えがあつた。

「このクレバスはね、長い時間をかけて削られてきたらしいんだ。最初は何の変哲もない亀裂だつただけど、水で削られたのか、風で削られたのか、とにかく長い時間をかけてここまで大きくなつたんだつて、ここは溶けた雪が水になって流れてる場所なんだ」

「こんな寒い場所でも水になるのか？」

「夏場はね。冬場でも溶けるけど。まあ少ないかな」

とにかく、とマキリは言葉を区切つた。

「ここには近づかない方がよいよ。今は冬場だから、いいかもしれないけど、夏になると雪も柔らかくなって最悪僕たちの体重でも雪が耐え切れなくなつて下に落ちるかもしれない。そうなつたら、ちよつと厳しい」

「・・・まあ、そうだろうな」

ただでさえ寒いこの雪山の中で水の中に入るなど想像するだけで

ぞつとする。水である分温度は高いかもしれないが、それでも0度近くであることは間違いないだろう。その中に身を置けば、体温が危険な域まで下がっていくことは容易に想像がつく。

しかも、雪解け水では塩分も少なく、身体が浮かびにくい。そうではなくとも装備を持つていれば浮かぶのも中々難しい。

「まあ、近づかなければいい話なんだけど、時々ここで亡くなる人もいるから」

その中には雪山のベテランと呼ばれる人間もいた。そんな人間でも、ふとした油断であっさりと死んでしまう。実際、死因はモンスタ―に襲われることよりもこういった自然の脅威によるものの方が多い。

もちろん、モンスタ―に襲われた後に自然の脅威にやられるという二段構えでやられることも多い。

ホイレンもそれは重々わかっている。小さく、しかし胸に刻むようにして領いた。

「わかった。気を付ける。それにしても、こんなにやばい場所ばかりなのか？山頂の近くってのは」

「・・・そうでもないかな。あってもあと二つか三つだね」

マキリは海から吹き付ける風によって形成された雪庇や、それに伴う雪崩が起きやすいエリアを思い出しながら言ったが、ホイレンは首を振った。

「多いわ」

「・・・そうなんだ」

「砂漠とか密林も暑さとか、流砂とか面倒なことは多いからどっこいどっこいだけだな。まあ、危険が目で確認できる分マシか」

密林も毒を持つ虫や感染症を媒介する虫、暑さがあり、砂漠の環境は言わずもがなではあるが、やはり狩猟区というのはどこもかしこも楽ではない。

ホイレンは雪山もその例に漏れず、かなりの危険を持つということが実感できた。

「よし、じゃあ次頼むぜ」

実感したはずなのだが、ホイレンの様子に怖気づいた雰囲気は見られない。マキリはその腹の据わり具合に感心し、改めてハンターという職につくものの精神力の強さを垣間見た気がした。

その姿がどこか眩しく、少しだけ目を細めた。

しかし、いくら眩しく感じたところで、もはやマキリにとって意味などない。

「・・・よし、それじゃあ次に行こうか」

「おう」

二人は普段の経路に戻り、別の危険地帯へと向かう。

白い雪の中で忽然と存在する黒い穴は、不気味な存在感を放っていた。

※

「・・・運が悪いな」

「本当にね」

ぐしゃ、ぐしゃ、という血と肉の咀嚼音が鳴り響く雪原で、マキリとホイレンは岩の陰に身を隠していた。

場所はエリア7。あれからいくつかの危険地帯を巡り、そろそろ麓に降りようか、という相談をしていたところだった。

岩を挟んだ場所にいる二人の肌ですらピリピリと響く轟音が鳴り響いたのだ。

ホイレンは仕方がなさそうな顔をして、マキリは表情を一気に強張らせた。

「・・・さて、どうするマキリ。ここで狩猟と行くか？」

「冗談言わないでよ。今日は戦闘用じゃなくて探索用の道具が主なんだから」

「意見が合致してよかった」

二人と岩を挟んだ場所で捕食行動を行っている轟竜は食事に夢中で他の生物を気に掛けている様子はない。いまならば簡単に不意打ちが出来るだろうが、捕食行動を邪魔された轟竜が激昂することは想

像に難くない。

怒った轟竜と戦うのはいかにホイレンと言えど遠慮したいところだった。

「ちなみに、何を持ってきてる？」

「閃光玉一つ、子タル爆弾一つ、回復薬五つ、携帯食料、ホットドリク二つ、あとは遭難したとき用の水」

「なるほど、まあ妥当なチョイスだ」

けど、それじゃあ不安だな。ホイレンは呟いて、後ろの轟竜に意識を向けて、すぐに逸らした。

ホイレンはマキリの持ち物を聞いて顎に手を当てると、何やら考え出した。マキリはどこことなく嫌な予感がしたが、それでもこの状況で物音を出すわけにもいかず、そのままじつと、ホイレンの考え事が終わるのを待った。

そして、捕食音が終わり、轟竜がエリア7を徘徊し始めたあたりで、ホイレンは小さく頷いて考え事を辞めた。

「・・・マキリ、雪山の探索はいつ終わる？」

「順調に行けばあと一日で終わるよ。面倒な場所は今日一日で周れたから」

「それじゃあ、それが終わったら狩るか」

マキリは一瞬、思考が停止した。目を瞬かせて、ホイレンの横顔を見る。

そして、すぐにホイレンに考えが追いついた。

「・・・軽くない？轟竜を狩るにしては」

「覚悟はしても困ることはないが、気負っちゃあ意味がねえからな。それに、これ以上待っていると生態系に悪影響が出るような気がする」「なんかすごく曖昧なんだけど」

「だってよ、流石にあの光景見たらそう思うだろ」

ホイレンは岩の陰から轟竜の徘徊する方向に目をやり、マキリもまた別の方向からその惨状を見つめる。

そこにあつたのは、血に染まった雪原だった。

三体ものポポが腸を食いちぎられ、捨てられている光景は異常の一

言に尽きる。

いくら轟竜と言えども、ポポ一体を食えばそれで食事は終わりのはずだ。少なくとも、一日動くには十分な食料になる。

しかし、目の間にいる轟竜はポポのうちの一体を殺しただけでなく、次から次へとそこにいたポポに襲い掛かっていった。繁殖期というわけでもないし、轟竜はポポが好物ではあるが雪山で子育てはしない。

これらのことから考えて、あの轟竜は、ただ己の食欲を満たすためだけに三体ものポポを必要としているということだ。

「あいつは大食いだ。早く狩猟しなきゃいけないえ」

呟くホイレンの姿は、昨日の夜村人に交じって大騒ぎしていたときの面影は全くなく、マキリのよく知るハンター、自然の調和を保つ者だった。

ふと、マキリは自分の手が痛いほどに握られていることに気付いた。そして、すぐに顔を歪めてその手を開いた。

恐怖を感じているのだろうか、普通よりも遥かに強大な脅威に対して、直接対決するわけでもないのに一丁前に恐怖を抱いているのだろうか。

やはり、自分は『腰抜け』らしい。ふと、自嘲の笑みが浮かぶのを自覚する。

と、そこで、視界の端で白い何かが動いたことに気が付いた。

「……ごめんホイレン。天気、見誤ったみたいだ」

「あ？」

ホイレンはどういう意味か、という意図を込めてマキリの方に目を向けるが、すぐにその意味を悟った。

「雪か」

二人はほぼ同時に空を見上げる。

どす黒く分厚い雲が、蓋をするようにして雪山を覆っていた。

※

「いやあ、温泉ってのは良いなあ、マキリ」

「・・・そうだね」

夕方の温泉に、マキリとホイレンは浸かっていた。

夕方とはいっても、周囲は雲に覆われ、風は強く、さながら台風でも上陸したような天気だ。そんな中で温泉に入るという選択肢を取った人間は他にはおらず、温泉に入っていたのは二人だけだった。

マキリの予想を裏切り、雪山には雪が降り、さらに風も少しづつ強くなっていた。その中で探索を続けるという選択肢をとることは出せず、マキリは帰還を決断した。

途中、一気に風が強くなったときは強硬に帰還するべきか、それとも洞窟の中で待つかという二択に悩まされたが、結局のところホイレンの勧めもあり、強い風の中を突っ切った。

その結果、冷え切った体を温めるためにも温泉に行こう、とホイレンが提案したのだ。これがなくても言っていたらうことは容易に想像できる。

ホイレンはその鍛えられた肉体を湯船に吐けて、咆哮ともため息ともつかないような声を上げた。マキリもそれほどではないにしても、少し息を吐きながら湯船につかる。生憎天気は良くないが、温泉の心地よさは変わらず無類である。

「しかし、まさかあそこまで天気が崩れるとはなあ。雪山ってのはいつもああなのかな？」

「・・・いや、あんなのは僕も初めてだけど」

「そうなのか。いや、まあ山の天気は変わりやすいって言うからな。仕方ねえさ。気にすんな」

「・・・わかってるんだけどさ、五歳のころから山の天気は外したことがなかったのに」

二人が麓に降りたとき、マキリは雪山を見て愕然とした。

山の影も見えないほどの吹雪が山頂を覆っていたのだ。

マキリが今までに見た天候の中で最も荒々しいと言っても過言ではなく、密かに自信を持っていた天候予想が完膚なきまでに否定され

てしまったことが哀しくてならなかった。

「調子、狂ってるのかなあ」

マキリの脳裏を過るのは昨夜のトマリとの一件だが、流石にそれほどの衝撃を受けているとは思えなかった。

「ま、良いじゃねえか。無事に帰ってこれたんだからゆっくりしよ。ぜ。あんまり気にし過ぎると禿げるぞ」

「いや、そこまで気にしてるわけじゃないけど」

流石に、気にし過ぎて禿げる。というほど悩んでいるつもりはない。

確かに足掛け十五年間、片時も離れることなく過ごしてきた土地ではあるが、考えてみれば十年間も何事もなく天気を予想出来ていたのがおかしかったのだ。一度や二度の失敗でそこまで落ち込む必要はない。マキリは割り切ろうと思えば割り切れた。

しかし、ホイレンの意味するところは別のところにあった。

「そっちだけじゃなくて、嬢ちゃんのこともな」

マキリの思考は止まる。それと同時に、頭のどこかで『どれだけホイレンの言葉に動揺すれば気が済むのだ』と、己をせせら笑う声が聞こえてきた。ホイレンが単刀直入過ぎるのが原因だ、と誰に反論しているのか分からないことを考えて、マキリは現実を意識を向ける。

ホイレンはマキリと目線を合わせずに、ただ目の前のみを見据えていた。

ずっと人の横顔を見ている趣味はない。マキリも前に目を向けて、息をついて呼吸を落ち着かせる。

「・・・なんでわかったの？」

「嬢ちゃんとかあったんだろ？昨日いきなりキレるし、今日も妙に気負ったような表情してるし、元々本調子だとは思わなかった」

「キレたのは単純にウザかったからだけど」

「え？マジで？」

マキリの顔は強張るのを乗り越して、徐々に緩んでいく。さながら案件が積もりすぎて処理能力を超えると全てがどうでもよくなるように。

それなりに鋭い男だとは思っていたのだが、それでも過小評価だったらしい。ここまで見透かされては、隠そうという気も起こらない、むしろ、この状況を楽しもうとしている自分すらいる。

「前にも聞いたが、なんか弱みでも握られてんのか？」

「・・・そんなんじゃないよ」

「じゃあ、なんだ？」

沈黙が下りる。

お湯が温泉に注がれる音だけが耳に届き、極めて静かな、落ち着いた場所が出来上がり、時折ホイレンスが息を吐く音だけが奇妙に浮かび上がっていた。

どうしたものか。

まだ、マキリは自分のことを話す気にはなれなかった。だからと言つて、ここで一方的に話を打ち切る気分でもない。

ならば、この際だ。気になっていたので聞いてしまおう。半ばやけっぱちな思考だったが、案外、良い考えなのではないだろうか。マキリは少しだけ空を見上げ、ため息を吐く。

「・・・どうして、そんなに聞きたがるの？」

ただの好奇心と片付けてもいいが、それにしてもマキリの内面に踏み込み過ぎていた。前々から思っていたことを単刀直入に言い放つ。そして、それに対するホイレンの答えも簡潔だった。

「大した理由じゃねえよ。単に俺の興味と、お前の父親に頼まれたことをやってる。それだけだ」

マキリは少しだけ驚き、同時に納得していた。

ホイレンがこの村に来たことが、ずっと疑問だったのだ。

この村の出身というわけではない。話を聞くに、ドンドルマでもハントーとしてはそれなりにやれていたようだ。まだ引退するような年齢にも見えないし、田舎の暮らしに憧れたという風でもない。

それなのに、なぜこの村に来たのか。

答えは、父親にあったのだ。

「だから、この村に来たの？」

それでは、この村に来たのは単に、父親の頼みを訊くためなのだろう

うか。もしもそうだとしたら、それが終わったとき、ホイレンは変わらずこの村のハンターをし続けるのか。

そんな意味を込めた問いに対して、またしてもホイレンは簡潔に、素っ気なく答える。

「それだけじゃねえよ。ギルドマスターの爺に言いくるめられたってこともあるし、タイミングもあつた、色んなことが重なってここに来ることになった。あいつのことはほとんど無関係に、俺はここに腰を据えるつもりだ。そもそも、あいつとの約束なんて守る気はなかったしな」

ホイレンはぶつきらぼうに吐き捨てるが、その横顔には少しの寂寥感があるように思う。そもそもそのような、どこか憂いのある表情を浮かべるといふ行為がホイレンには似合っていない。だから、いや応なくその表情は印象に残る。

父親のことを思い出しているのだろうか。もしそうであるのなら、普段は見せない表情を引き出した父親という存在はホイレンにとつてどのような存在だったのだろうか。

聞いてみたい気もするが、マキリの心の中でその欲求は小さかった。

代わりに、別の質問をした。

「いい人だった？」

「良いハンターだったよ。想定外の事態が起こっても冷静に対処して依頼を遂行する。討伐対象に入っていないモンスターは基本的に見逃し、生態系の維持に努める。無茶な依頼でも率先して受けて、色んな奴らに感謝されてた。ポツケ村のハンターなんて肩書よりも、よっぽど仰々しい肩書をつけられてたやつだ。『雷光』とか『稲妻』とか。色んな奴があいつに憧れてた。それでも天狗にならねえ。それどころか他人が無茶なことをするのを諫めたりもする。ギルドマスターに何度も感謝状を贈らっていたし、誰もそれに文句を言わなかった。間違いなく、トップハンターの一人だったろうよ」

ホイレンが言っている情報には、マキリも知らないものが多く含まれていた。

例えば、父親に肩書が付けられているとか、無茶な依頼でも率先して受ける、とか。ギルドマスターに何度も感謝されていた、とか。そういう情報だ。

当然だろう。マキリはそれを、他ならぬ父親から聞いたのだ。天狗にならないようにと気をつけていた厳格な父が、そのようなことを息子に話すとは思えない。

「・・・そっか」

しかし、マキリにとっては意外ではなかった。

今では家にはないが、昔家に置いてあつた武具類はどれもこれも一級品だった。フルフルの装備を愛用していたようだが、ほかにも多くの防具、武器が置いてあり、子供心にもそれらの武器が輝かしく見え、持ってワクワクとしたことを覚えている。

それだけでも、父親が何か、途轍もない存在なのだということはおわかっていた。

「・・・じゃあ、僕を見て驚いた？」

「そりゃあそうだ。轟竜から悲鳴を上げて逃げてるっただけでもあの男の息子とは思えねえよ。まあ、あいつよりはお前の方が好きだが」
嬉しいか？嬉しいだろ？そう訊いてくるホイレンの脇に肘鉄を食らわせ、口を閉じさせる。こんな空気でも自重しないあたり、やはり大物だ。マキリは鼻で笑いながらそんなことを考える。

しかし、そう笑ってばかりもいられない。

マキリにとっては父親は偉大な前任者であると同時に、自分の父親なのだ。当然、そこに付随する感情もある。そして、それらは決して良いものばかりではない。

出来るのなら、語らずに済ませたい。

だが、ホイレンはそのような事情など顧みない。そもそも知らないから顧みようがない、といつてもいい。

「まあ、お前が頑なにあいつのことを前任者、とか言つて隠そうとしてた理由は知らねえし、別に興味もねえ。あいつは一年のほとんどを狩場で過ごすような奴だったからな。なんとなく察しもつく。ただ、お前と嬢ちゃんの話は別だ」

「どうして?」

「俺もこの村に住むからだ」

ホイレンの言葉に、マキリは怪訝な表情を浮かべる。意味が分からなかった。なぜホイレンが住むからと言って、マキリとトマリの事情を知っておく必要があるのか。

マキリの困惑した表情を見て、ホイレンは少しだけ口角を上げて笑った。

「自分の村で、なんかギクシヤクしてる奴が居るのは面白くねえだろう?」

冗談めかした口調で、今までの懐かしむ感情が嘘のように、ホイレンは言った。

マキリは呆気にとられたように口を開けて、そのまま息を吐き出した。込められた感情は呆れ一色。

「・・・要するに、自分の都合ってこと?」

「当たり前だ。俺はお節介からは最も遠いところに居る男だぜ。ましてや男を相手にそんなことするもんかよ」

その言いぐさは紛うことなきクズの発言だったが、マキリは少しだけ安心した。

マキリの為を思つて、などと言われてもマキリは釈然としなかっただろう。何せ会つてからまだ三日しか経っていないのだ。いきなり何々の為だ云々言われるよりは、自分が迷惑だから、としっかりと言われた方が気持ち良い。

「・・・とりあえず、風呂から上がらない?」

「ああ、今回は保留か?」

「話すから上がるんだよ。ここで話したら人が来るかもしれないし、結構長くなるし」

「へえ、意外だな」

「何が?」

マキリとホイレンは風呂から立ち上がり、二人して脱衣所に向かう。

『僕の過去を話せるほど仲良くなった覚えはない』とか言われるかと

思ってた」

「そう言おうかと思っただけど、僕にもメリットがありそうだからね。あと声真似、死ぬほど似てない」

「嘘つけ。自信作だぞ、俺の」

ホイレンはマキリに反論してから、ん？と首を傾げる。

「メリットってなんだ？ 黒歴史晒すとか罰ゲーム以外の何者でもなさそうなんだが」

「それも含めてあとで話すよ」

脱衣所で普段着に着替え、通用口から出る。

天気が悪いせいか気温はいつもよりも低く。夕日も見えず、風は強い。そんな中を二人は進み、温泉から比較的近いホイレンの家で話をすることに決めた。

村人たちは皆家の中に入っているらしく、村はいつもより一段と静かだった。もちろん、静かというのは人の気配がしないという意味であって、風の音は甲高く響いている。

「せっかく温まったのにこれじゃすぐ冷えちゃうな」

「家に帰ったら囲炉裏で温まれば良いだろ」

「わかってねえな。温泉と囲炉裏はちげえんだよ。なんつうか、身体の内側が温められる感じが違う。お前はわかってねえ」

「知らないよそんなこだわり」

無駄口を叩きあいながら、二人はホイレンの家へと入った。

中は一人が暮らす分には十分な広さだ。二人で話す分にも、スペースに困ることはないだろう。

マキリとホイレンは上着を脱いで、囲炉裏の火を強くした。

そして、囲炉裏を中心に据えて、お互いが斜めに見えるように座る。火の赤が家の中をほんのりと照らし、ゆつくりと温めていく。外を吹き荒れる風の音が、逆に室内の静寂を強調していた。空間の印影が強調され、水墨画のような素朴な形が浮かび上がる。

不思議な雰囲気だ。マキリは思う。

このような天気は珍しいものの、体験したことはある。二年に一度ほどの頻度で、フラヒヤ山脈からの強い吹きおろしは起こる。

静寂に支配された空間を経験するのも一度や二度ではない。しかし、いつもとは何かが違う。

それはこれから話そうとする事柄がそうさせるのか、それとも単純に慣れない男と共にいるからなのか、マキリには分からない。

しかし、不思議と、この空間でなら、すらすらと言える気がした。

「・・・じゃあ、話そうか。長くなるけど、まあ、我慢して聞いてね」「こつちから聞いたんだ。文句なんか言わねえよ」

ホイレンの返答を聞き、マキリは鷹揚に頷く。

そして、考える。

さて、何から話そうか。

村の人に話すのであれば、二年ちよつと前からで良い。マキリとトマリの関係は知っているし、違和感なく話に入ってこれる。

しかし、ホイレンは村外の人間だ。こちらの事情には全くかわっていない。途中から話を始めても分からないことだらけだろう。

ならば、初めから話そう。

マキリは囲炉裏の火を見つめながら、過去に思いを馳せるように目を閉じる。

「僕はね」

聞くに堪えない話かもしれない。ただ、自分の無様を晒す結果になるだけかもしれない。

けれど、それでいい。

きつと、こうしなければ前には進めないのだ。

ハンターを辞めるといふ節目の時、マキリは自分の道を、今一度探さなければならぬ。

客観的な視点を通して、知らなければならぬ。

自分のこれまでと、これからを。

「昔から臆病者なわけじゃなかったんだ」

第7話

風が雪を載せて吹き付ける雪山の中腹。

ハンターたちの言葉で言えばエリア7と言われる場所。

そこには八体のギアノスを引き連れた、ひと際大きなギアノスの姿があった。

頭についた大きなトサカはリーダーの証。そうでなくとも、周囲の個体よりも二倍の大きさを誇るその体軀を見れば群れのリーダーが誰かは一目瞭然だ。

腕と足についた鋭い爪、口から垣間見える獠猛な牙。身体の手すべてが肉を狩るために最適化されている。

そのモンスターの名はドスギアノス。単体での強さはそこまででもないが、ギアノスの群れと行動するため単純な強さよりも狩猟難度は高めの、初級モンスターだ。

八体のギアノスと一体のドスギアノスは得物を探していた。集団で獲物に飛びつき、殺し、食らう。それがギアノスたちの狩りの方法だ。その狩りの方法で主にはポポなどの大型草食竜を、あるいは人のキャラバンを襲う。もっとも、後者は少数派だが。

なにはともあれ、そのギアノスたちは、ポツンと九つ置いてある生肉を発見した。

ちやうど仲間全員分だ。当然、最初はリーダーであるドスギアノスが食べるべきだが、ドスギアノスは何故か食らいつく様子を見せない。それをチャンスと見たギアノスたちは我先にと生肉に飛びつき、食らっていき、命を散らした。

生肉を食べたギアノスたちは次から次へと倒れていき、苦しみ、何かを嘆くような断末魔を上げながら、その目の光を失っていった。残ったのは一体のドスギアノスと、食らいつくのが遅れたギアノス一体だけだ。

これならば、僕でも殺れる。

知らず知らずのうちに、自分の顔に笑みが浮かぶことを自覚して、すぐに顔を引き締める。

「油断するな。戦いを楽しむな。観察を絶やすな。隙を見逃すな。リスクを取るな。状況を整理しろ。と、仲間を守れ、は別に良いか」
今は仲間居ないし、そんなことを呟きながら、父に言われた言葉を暗唱し、少年は走り出す。

岩陰から飛び出して、ドスギアノスとギアノスの死角から、一気に距離を詰める。

それに最初に気が付いたのはギアノスだった。

ギアノスは声を挙げて、自分の群れ、いまとなってはリーダー一人だが、に警戒を促す。

「よし、まず一匹」

そんな声と共に、少年は腰からボーンククリを抜き放ち、その勢いのままギアノスの首を斬りつける。

しかし、ボーンククリの切れ味が悪いのか、はたまた少年の腕が未熟なのか、切り付けたはずのギアノスの首は鱗が数枚剥がれただけで、致命傷には程遠かった。それは少年も了承済みだ。

だからこそ、ボーンククリを打ち付けた勢いのまま、少年は体を小さく、素早く一回転させる。

ギアノスは首を叩かれた衝撃で怯んでおり、少年の動きに対応できない。

そして少年のボーンククリは、遠心力と共にギアノスの、鱗が剥がれた場所に寸分たがわず突き立てられる。二度目の一撃はギアノスの首の骨を貫き、その中にある延髄を断ち切り、命をも絶った。

戦闘開始から一秒。少年の初戦果だった。

「よし、次は親玉つと」

少年がギアノスの命を刈り取ったのとほぼ同時に、ドスギアノスは少年の方向を向いた。

『ギアア、ギアア!!』

普通のギアノスよりも野太い、威圧的な声がドスギアノスの口から放たれる。普通の人間ならば体が硬直してしまうようなその迫力を、少年は少し笑みを浮かべながら受け止める。

「よし、やろうか」

硬直するどころか、少年はボーンククリを持ってドスギアノスに向かって行く。

しかし、それを簡単に許すほどドスギアノスも馬鹿ではない。身体を回転させ、その長い尻尾を円を描くようにして振り回す。少年はその尻尾を転がりながら避け、その転がっている途中にドスギアノスの足を斬りつける。もちろん、ギアノスの首すら落とせなかったボーンククリ、しかも苦し紛れの一撃では、よほど柔らかい場所に当たらなければ敵に傷を覆わせることなどできはしない。

だから、少年は関節の裏側を斬りつけた。

関節は生き物が体を動かすために必要な場所だ。その肉質が柔らかくなければ体を動かすことなどできないのだから当然だろう。そこならば大した苦労もなく、それなりの力で切り裂くことが出来る。足の関節の裏側を斬りつけられたドスギアノスは、少年に怒りを込めた視線を向けるが、その時、少年は既に動き出している。

少年はドスギアノスが稼働させている部位を観察し、柔らかい部位を看破する。その一連の動きは少年が父親に最も口酸つぱく言われた部分であり、最も自信を持つ能力でもある。

ドスギアノスの傷は既に修復されていた。圧倒的な回復能力を持つモンスターには生半可な傷をいくつか付けたところで意味はない。だからこそ、生半可だろうとなんだだろうと傷を無数に付けて、体内の血液を、エネルギーを使い果たす。それがハンターの戦い方だった。それはモンスターとハンターの体力勝負であり、ハンターに勝ち目はないように思える。

しかし、少年は心配など微塵もしていなかった。

何故なら、自分は己の体の何倍も大きいモンスターを狩る父親を知っているのだ。ハンターに勝ち目がないなどということはない。その戯言の反例を、自分の父親という存在を知っている。

そして、自分もそうなるのだと、固く信じて疑わなかった。

「要するに、技量で勝つてれば良いんだ」

少年はボーンククリを構え、再びドスギアノスに攻撃する。

ドスギアノスの威嚇する声を意にも介さず、片手剣は一閃された。

ポツケ村の少年、マキリ。十歳の頃だった。

※

村に帰ったのは夕方だった。狩りを始めたのが朝方だということを考えて、随分と長い間戦闘していたということになる。マキリは自分の未熟さを感じながら、そして確かな達成感を感じながら、村の入り口にたどり着いた。

「マキリ!?大丈夫!?!」

「大丈夫だよ。大げさだな」

「でも、頭から血が出てるよ!」

「ああ、ちよつと爪が掠ったんだよ。大したことじゃない」

「大したことだから!下手したら死んでるから!」

マキリが村に帰るなり、入り口で待っていた金髪の少女は駆け寄ってくる。その表情は心配だ、と全力で訴えていたが、戦いを終えたばかりの高揚感に身を投じていたマキリがそんなことを気にすることはなかった。

「おやおや、帰ったかい。お疲れさん」

焚火の傍で眠っていたオババは、マキリとトマリのやり取りで目を覚ました。その姿は五年ごと変わらぬ温和だった。

「オババ。ほらこれ!ちゃんと狩ったよ!」

マキリはそう言ってポーチからドスギアノスのトサカを取り出すと、オババの目の前に突き付ける。それを見てオババはふむふむと頷き、顔をにこりと綻ばせた。

「頑張ったみたいだねえ。とりあえず、家に帰って手当をしてもらいなさい」

オババはそう言って、マキリの格好を見る。

まだ小さいマキリの体に合わせた防具は所々爪痕が残り、右腕部分と左足部分には食いちぎられたような跡があった。

マキリの小さな体では、モンスターを殺すまでにかかなりの時間がかかる。当然時間が長くなるなら相手から攻撃を食らうことも多くなり、マキリの小さな体ではまともな一撃を食らえばそれだけでも命が

危うい。

しかし、マキリは敵の一撃を出来る限り紙一重で躲し、相手の懐に入り込む戦法を好んだ。

というより、そうしなければ時間内にモンスターを狩猟することが出来ないのだ。

トマリはマキリがけがを負ってくるたびに大慌てし、見ている方が困ってしまうほどにマキリを心配していた。

「マキリ、こんなことやめなよ。せめて大人になるまではハンターお休みしようよ。ね？」

「仕方ないだろ。僕以外にやれる人間が居ないんだから。僕がやるしかないじゃないか」

マキリの表情は仕方がない。と言いながらも目が輝いており、たとえ代わりの人間が居たとしてもやめようとしなないことは明白だった。そして、トマリは死中に活を求めるとい言葉を地で行くマキリを見ていて気が気でない。

「もし本当にハンターが必要だったらおじさんに帰ってきてもらえばいいじゃない。マキリが態々やる必要なんてないよ」

「父さんは父さんで忙しいんだ。砂漠に行ったり、樹海に行ったり、凄い時には別の大陸にだって行くんだよ？そんな父さんをいちいち呼び出すわけにはいかないだろ」

マキリの父は、一年のほとんどを狩場で過ごしていた。雪山に古龍が現れたり、相当たちが悪いモンスターが現れれば話は別だが、そういった緊急事態を除いて、マキリの父は常に狩場に身を置いていた。

しかし、モンスターを狩る必要があるか、と言われるとそうでもない。

父親が呼び戻されないということは、つまり緊急事態ではないのだ。そのころの雪山は比較的安定していたし、せいぜいがドスギアノスが群れを率いて居るので不安。ドスファンゴが農村に侵入する。といった案件だけだった。

それでもマキリは狩りを辞めなかった。ただ単に、速く、父親に追いつきたかった。その一心だ。

だが、トマリにしてみればそれは危険極まりなく、マキリが狩りに行くたびに迎えをして、いつもマキリを諭すのだ。

「どうしてわざわざ危険なところに行くの？そんなことしなくてもいいのに。ハンターになりたいんだったら訓練場で武器を振ってたらいいじゃない」

「それじゃあモンスターと戦えないだろ。経験しないとうまく動けないんだよ」

「死んじゃうかもよ？」

「死なないさ。それに、ちよつと間違えたら死ぬのがハンターだもん。これくらいが丁度いいんだ」

マキリの譲らない姿勢に、流石のトマリも口を引き結んで押し黙る。

しかし、やはりトマリが諦めることはない。

「本当に死んじゃったら終わりじゃない。おばさんだって悲しむよ」

おばさんが悲しむ。と言っておきながら、トマリの表情はまるつきり自分が悲しんでいた。しかし、トマリはその表情を読まないばかりかその言葉すらまともに聞かなかった。

「あ、そうだ！母さんに無事だって報告しないと。じゃあねトマリ！また明日！」

「え、違う！そうじゃなくて！マキリ!？」

マキリはぼろぼろの防具を纏ったまま家へと一直線に掛けていく。その後姿を見ながら、トマリは眉尻を下げる。

「……もう」

オババはそんな二人を見て、ふう、と息を吐き出す。

「……ふむふむ」

そのよぼよぼとした瞳が何を写しているのかは、誰も知らない。

※

「母さん！ただいま！」

家の中では、一人の女性が料理をしている最中だった。

「マキリ。おかえり」

女性は頬を緩めて微笑んだ。

銀の長髪を一つに束ね、白いというより青白いというべき顔色をした女性は、名をキノと言った、生まれ育ちはポツケ村。そしてポツケ村から出たことがない女性だった。

マキリはキノの目の前に走り、そして慌てたようにして急停止した。まるで幼子のような突拍子もない行動に、キノは目を丸くする。

マキリはその『訳が分からない』と言った表情を見て顔に笑みを浮かべると、ポーチから水色のトサカを取り出した。

「見てこれ！僕が狩ってきた！」

キノはトサカを見ると、首を傾げる。それを見て、マキリもまた首を傾げる。親子なだけあって全く同じ仕草だった。

「・・・ギアノスのトサカ、かしら？」

キノが出した答えはしばしマキリを呆然とさせ、その後憤慨させた。

「違うよ！ギアノスはギアノスでもドスギアノスだよ！一番強いギアノス狩ってきたの！」

「あ、ごめんなさい。私あまりモンスターのことって詳しくなくて」

「・・・大丈夫だよ。母さんがちよつと世間知らずなのは知ってるから」

キノは心から申し訳なさそうな顔をして、眉根を下げた。

マキリは自分の母に一抹の不安を感じながらも、仕方がない、とため息を吐いた。自分の母親が何やらずれていることは、生まれたときから見てきたマキリが一番よく知っている。

だから、もうこれがどれだけ凄いかどうかを説明するのは諦めた。

その代わりと言っては何だが、マキリは自分が狩りから帰ってきたときの恒例行事を要求する。

笑顔を浮かべ、母親の前で防具を脱ぎ捨てる。

「母さん、手当して下さい！」

嬉しそうに怪我を見せつけるマキリを、キノはしようがない、とでも言いたげな笑みを浮かべて見つめた。

マキリは、キノのその優しい笑顔を見るのが、何よりも好きだった。

「またこんなに怪我をして、あまり母さんを心配させないでね?」

「うん。わかってる」

マキリは元気に、それはもう元気に返事をした。絶対にわかっていないと断言できるくらいに元気よく。

キノはそんなマキリの手当てをしながらため息を吐き、マキリの身体を見やる。

数々の擦り傷、内出血、裂傷、その他もろもろの傷がマキリの身体には残っていた。その多くはモンスターによってつけられた傷だが、訓練でついた傷も少なくない。

「・・・はあ、あの人もあの人ね」

「父さんのこと?」

眩くほどだったキノの言葉を拾い、マキリはキノに顔を向ける。キノは頷く。

「どうして帰ってきたと思ったたらすぐに狩場に行くか、あなたと訓練をするのかしら。もうちよつとハンターの比率を減らすことってできないの?」

「でも、父さんが家に居たら僕違和感があるよ?」

マキリが頭の中に浮かべている光景を、キノもまた頭に浮かべる。

しかし、どう頑張ってもマキリの言った『夫が家にいる光景』を浮かべることが出来ない。代わりに浮かぶのは、家の中で武器を研いでいる夫の姿だ。

「・・・それもそうね。でも、やっぱりもう少し帰ってきてほしいかな」

キノは哀しそうに微笑みながら、マキリの体に包帯を巻き終える。

その出来栄えを見て満足そうに頷くと、キノはマキリの頭を撫でた。マキリは擦ったそうに身をよじるが、決してその手から逃げようとはしない。その仕草がキノは堪らなく愛おしく、頭を自分の胸元に抱きかかえた。

「とにかく、無理はしないこと。お願いね?」

キノの言葉に、マキリは笑顔を浮かべて頷いた。

「うん。でも大丈夫だよ。僕は父さんの息子だから!」

マキリがそういうと、キノはやはり、優し気に微笑むのだった。

※

「母さんはいつも優しくかった。僕は怒られたことなんてなかったし、無理をするな、とは言われたけど子供の頃の僕に何が無茶かなんてわからなかった」

その時のマキリにとっては、ドスファンゴやドスギアノスは十分狩れる相手だったし、飛竜に合えば何もせず、ただ隠れて逃げてた。だから狩場で無茶をしたことなどない、と、マキリは自信をもつていうことが出来た。

しかし、とマキリは思う。

「後から考えてみても思うよ。十歳で狩りをしてたってだけでも、僕はいつても、無茶な狩りを続けてた」

「そりやそうだ。普通、ハンターなんて早くても十二歳くらいからだからな。むしろ、なんで周りの人間が止めなかったのか不思議だ。いや、嬢ちゃんは止めたみたいだが、というか、嬢ちゃんが止めたつてのが一番驚きだ。お前嘘言つてないよな？適当に嘘言つて煙に巻こうとしてないよな？疑つてるわけじゃないんだが」

「ぼつちり疑ってるし。トマリが僕に狩りを辞めろって言ったのは一度や二度じゃないよ。それこそ毎日一回は必ず、多いときは五回くらい」

マキリはホイレンの発言にツツコミを入れつつ、ため息を吐いた。「…まあ、僕が単純に不甲斐なくなつたから、今はああいう風になつたつてだけの話だと思うけど」

マキリにも本当のところは分からない。それをホイレンに話すことで見つけ出そうとしているのだ。

トマリがいったい何を考え、マキリに厳しく接するようになったのか。他の誰かの視点も踏まえて、考えたい気分だった。

『臆病者は嫌い』

その結果がああ言葉だとすれば、もはや自分になすすべはないのだが。

マキリは自分の頭にこびり付いた嫌な想像を頭を振ることで振り

払い、話を戻す。

「で、みんながなんで止めなかったのか不思議、だっけ？」

「あ？あー、そんなこと言ったな。それだそれ」

言われるまで忘れてた、と言いたげなホイレンに、マキリは呆れた視線を向ける。「さつき自分で言ったばかりだろ」と呟くようなトーンで言い放ち、言葉を続ける。

「みんなが止めなかったのは単純に、父さんが僕の狩りを認めてたからだよ。一線級のハンターが認めてれば、誰かが文句を言うなんて出ない」

「・・・ああ、なんとなく納得は出来た。お前、ハンターに好かれやすいもんな」

「え？どこが？」

「好かれやすいもんは好かれやすいんだよ。良いから続き話せ」

マキリは釈然としなかったが、確かに今はマキリが話をしている最中だ。咳払いをして気を取り直す。

「とにかく、まあ僕は昔は結構狩りに行ってたんだ。トマリはむしろそれを止めてた。それは確かだよ。僕はそんなこと気にしなかったけど、確かにそうだった」

願わくば、そのまま置いてほしかった、とは口には出さない。

むしろ、送り出されたおかげで戦えていたという面も確かにあるのだから。

「でも、僕がフルフルとかの飛竜を相手にする前に、僕は戦えなくなっ
た」

「・・・二年前か？」

「そう。でも、たぶんホイレンが考えてるのは違う理由だよ」

マキリは当時に思いを馳せる。

毎日のように狩場に向かっていった日々、恐れなど知らずにひたすら前だけを向いていた。

それが一瞬にして崩れ落ちた日のことを。

※

きつかけは、父親の死という報告だった。

ドンドルマに迫った老山龍との戦いで、その巨体に踏みつぶされて命を落とした。

あまりにも呆気なく、また、死体も原形をとどめておらず、それを家族に見せるのも酷だという理由でドンドルマで火葬された。村に届けられたのは父が愛用していたフルフル装備の残骸と、折れて使い物にならなくなった武器だけだった。

そのドンドルマ防衛戦は、老山龍を撃退こそしたものの砦の一部は完全に崩壊し、何十人という人間が命を落としたという。マキリの父親が死んでも、何も不思議ではなかった。

呆気なく人は死ぬ。人の親などということとは関係なく。実力も関係なく。死ぬときはあっさりと思死ぬ。マキリが本当の意味でそれを知ったのは、恐らくはその時だろう。

そして、両親の絆というものを本当の意味で知ったのも、その時が最初で、最後だった。

「……母さん。大丈夫？」

マキリは、父が死んだショックで寝込んだキノを毎日のように見舞っていた。

キノは元々体が強くなく、よく体調を崩していた。けれど、その時の体調の崩し具合はどこか、マキリには違ったものに見えたのだ。

「……大丈夫よ。ごめんなさい」

キノは無理矢理に作ったことがありありとわかるような笑みで、マキリの頭を優しく撫でた。

ただ、自分の頭を撫でる強さが段々と弱くなっていくことが感じられ、マキリは悲しくて仕方がなかった。

父の死という報告を聞いてから、キノはどんどんやつれていった。村の人々は代わる代わるに見舞いに来たが、それでもキノの体調は良くならなかった。

そして、きつと村人たちもわかっていたのだろう。

一番ひどいのは身体の負担ではなく、心の負担だということ。

村人たちの心配の通り、キノの体調はどんどん悪くなり、やがては日中、起きている時間もほとんどなくなっていた。

それでも、時々起きてはマキリを見て、キノは悲しそうに笑うのだ。「ごめんなさい」

そう言つて、薬を飲めばすぐに眠る。それを繰り返した。

そんな生活を続ける母を置いて、マキリは狩りには行けなかった。

幸い、その間は珍しくハンターたちが雪山を拠点に狩りをしており、マキリの手は必要なかった。

だからマキリはほとんど四六時中、キノの傍につき、出来る限りのことをした。

キノが朝に食べたものをすぐに吐き出してしまふ光景を見た。シーツを洗うマキリに「ごめんなさい」と呟いた。

時折父の名を呼びながら、枕を涙で濡らしていた姿を見た。目を覚ました時、心配そうなマキリを見て、何度も「ごめんなさい」と言い続けた。

直、何も喉を通らなくなった母を見た。それでも、母の「ごめんなさい」が途切れることはなかった。

マキリがその時思ったのは、母に対する哀れみでもなく、心配でもない。

父に対する怒りだった。

何故、母さんがこんなになつていくというのに村に居ない。何故、家族を置いて簡単に死んだ。何故もつと頻繁に帰つてこなかった。

父が生きているころには全く考えなかったことを、マキリは考えるようになった。

それはただ単に現実から目を逸らしたかっただけなのかもしれない。目の前の、どう考えても、どんなに自分が努力しても、目の前の人を救うことが出来ないという無力感から逃げたかっただけなのかもしれない。

けれど、その考えは確かに、マキリの中では筋の通つたものだった。父親に対する、どこか複雑な感情が出来たのはその時からだ。

ハンターとしては尊敬していた。危険な場所に行くことも顧みず、

誰かのために自分を犠牲にできる。そんな強い人間で、自分もそうになりたいと、確かにそう考えていた。

しかし、同時に、キノというものがありながらリスクを取り、自分を犠牲にして、拳句の果てには死体すら残らない死に方をする。そんな人間にはなりたくない、そう考え始めてもいた。

マキリは段々と弱っていくキノを見て、どこか諦観めいたものを抱いていた。

ああ、この人にはきつと、父さんが必要だったんだ。

そして、自分だけではきつと足りなかったのだ。

母の「ごめんなさい」を聞く度に、マキリはそんなことを考えて、見たくないものを見ないように、目を瞑った。

そして、母の口が、ついに「ごめんなさい」を紡ぐことはなくなつた。

父が死んだという知らせが入ってから、一か月後のことだ。

「マキリ、大丈夫？」

キノを土の下に埋めたとき、トマリに聞かれた言葉も、返した言葉も覚えていない。

「大丈夫だよ」

なぜ覚えているのか、それは、その時の自分の心境があまりにも醜悪だったからだ。

マキリは思っていた。

『これでもう、「ごめんなさい」を聞かなくても済む』

大好きだった母のために、一カ月、ひたすらに快方に向かうように頑張った。

しかし、いくら汗を拭いても、いくら気を遣っても、母の体調が良くなることはない。終わりがなく、帰ってくる言葉はひたすらに謝罪だけ。

何に對しての謝罪なのか、マキリには分からなかった。

分からなかったから、苦痛だった。

自分は何も悪いことなどされていないのに、なぜ母は謝っているのだろうか。それとも、自分が知らないだけで、母は自分に謝るようなことをしていたのだろうか。

しかし、母の虚ろな、何も映っていない目を見たとき、マキリは一つの疑問を持った。

母は、本当に自分のことを見ているのだろうか、と。

母の眼が映しているのは、今ここにはいない、ただ一人なのではないか。

いつしか、母と接することが苦痛になっていた自分に、マキリはどことなく気付いていた。大した親不孝者だ。そんな自嘲すら出るところはない。

もう、どうでもよかった。

一カ月という時間は、両親の死というものを受け入れるには長すぎたのだろう。マキリは母の遺体を前にしても、涙一つ流すことがなかった。

一カ月という間に、両親を亡くしたマキリのことを、村人たちはとても気遣ってくれた。

その気遣いが鬱陶しかった。

僕は大丈夫だ。気にしてなんかいない。そう叫びたかったが、そのこと自体、追い詰められていると宣伝するようでマキリには耐えがたかった。

だから、マキリは打ち破ろうとしたのだ。

自分は憐れむべき存在ではないと、周りに、行動で分からせようとしたのだ。

自分が最も自信を持つもので、すなわち狩りの技術で、それを分かってやると。

しかし、その願いは叶わなかった。

※

「身体が動かなくなっただよ」

「・・・」

マキリの話に無駄口を叩くことなく、ホイレンは耳を傾ける。そんなホイレンの様子に安心しながら、マキリは続ける。

「相手はドスファンゴだった。別に難しい相手じゃない。鱗もないし動きも直線的だ。落ち着いて戦えば負けるわけがない。僕はそう思っただけで、ただ単に、普通に、いつも通りにやろうとしたんだ」

けれど、出来なかった。

久しぶりのモンスターを目の前にして、マキリの身体は動かなくなっただけだ。

はじめはただ、困惑するだけだった。今までにない感覚だったのだ。

体に痛みはない、違和感はない。ならば動ける。

その大前提が崩されたのだ。混乱するなという方が無理な話だろう。

「・・・話を聞いてると、桁違いに強いモンスターと戦った後のハンターみたいな症状だな」

「僕もそう思ったんだ。けど、僕は強いモンスターに出会ったことなんてなかったし、モンスターに恐怖心なんて感じた事はなかった。だから不思議なんだ。今でもね」

マキリはその時のことを思い出すたびに、顔を顰めてしまう。

自分は大丈夫だと、そう息巻いて、歩いて村を出た。

帰りは昼くらいになるだろう。マキリはそう思っていた。その時はもう十三歳で、マキリの身体もそれなりに出来上がりつつあったからだ。ドスファンゴ程度、さっさと終わる。

しかし、予想に反して狩りは夕方まで続いた。

「身体は動かなかったけど、回避だけは問題なくできたからね。でも、攻撃をしようと思うと身体が固まった。その隙を突かれて何度も、何度も何度も何度も突き飛ばされて、気が付いたら村に着いてた」

限界まで粘って、限界まで回避した。

そして、アイルーの荷車に乗せられて、村の入り口に放り投げられ、村に戻される。

初めての経験だった。呆然とした。村人たちの心配する視線が憎らしかった。

しかし、それと同時にこうも思った。

今日は調子が悪かったただけだ。明日行けばまた違う。

「怪我は大したことがなかった。だからとりあえず、次の日も行った。でもダメだった」

次の日に行っても、その次の日に行っても、その次の日も、次の日も、次の日も。

どんなに自分を鼓舞しても、マキリの身体が以前のように動くことはなかった。

どうしようもなかった。原因がわかっていたら、マキリにも対策の仕様はあった。

けれど、なにが悪いのかが分からない。

両親の死が響いているのか、そう思ってみたこともあったが、父に対する怒りは心の中に依然として残ってはいたものの、心の中に悲しさはなく、ただ、母の優しさと、父への憧れが残っているだけだ。

やがて、雪山を拠点にしていたハンターたちも元の街に帰ってきて、ハンターはマキリ一人になった。

そして、一人になって、それでも変わらない自分の体に、マキリはいい加減認めざるを得なかった。

自分は、臆病者なのだ。と。

「父さんは居なくなっただから、とりあえず村専属のハンターを呼ぶことになった。でも」

「そのハンターは中々来なかった。か？」

ホイレンの言葉に、マキリは頷く。

「僕の評判かなんかがあったのかもしれないね。一応、十歳から狩りをやってたし、無事だったし、そのおかげで緊急性がない、とか思われたのかもしれない」

そうでなければ、二年という歳月は長すぎる。

「・・・しかし、お前、今は普通に戦えてるじゃねえか。なんでだ？」
「うん、まあ、そこで最初の話に戻ってくるんだけど。トマリなんだよね」

マキリは、専属ハンターの話が出るときには既に、農作業に移っていた。

自分が臆病者だと、何度も事実を突きつけられて、マキリの脆弱な心はぼつきりと折られてしまった。

その時ちようど村に来たコジロウと共に、農作業に精を出し、ハンターという仕事からはきっぱりと手をひこう。その頃にはそう考えていたのだ。

オババは一度だけ、マキリにやってみるかと言いついては見たものの、一度断れば何も言わなくなった。村人たちに至っては、マキリにハンターの話題を出すことすらなくなった。

それでよかった。例え腫物のような扱いを受けても、その時のマキリは、その扱いに一種の安らぎすら感じていた。

自分が役立たずになったと、何もできない無能だと突きつけられるよりは、何も言われない方がはるかにましだったのだ。自分の無力感に苛まれることがあっても、コジロウとの農業はそんな心をどこかに吹き飛ばしてくれた。やがて、鍬の振り方もわかってきて、そのうちマキリは、人並みに畑に慣れていった。

そんな時、トマリが農場に現れたのだ。

太陽の光を存分に受けた金色の髪を風に乗せて、後ろ髪を紐で一本に纏めたトマリが、仁王立ちをして立っていた。

マキリはいつもと違うトマリの様子に、首を傾げた。しかし、トマリはそんなマキリの様子など意にも介さず、単刀直入に、一直線にマキリに切り込んだ。

「専属ハンターになりなさい」

トマリの言葉に、マキリは困惑した。

今の自分が専属ハンターになってもどうにもならない。マキリはその説明をトマリにした。自分の身体が動かないことも、全て説明した。それでも、トマリは仁王立ちを辞めず、正面から言い放った。

「良いから行きなさい。今はあんたしか、やる人間が居ないの。だから、あんたが行くの」

なんだそりや、大体、いま一番狩りが出来ないのは自分だろう。マキリのそんな抗議も、トマリは一笑に付した。

「何が？ただ単に、怯えてるだけでしょ？前は普通に出来たのに、出来なくなったの？」

トマリの唐突な暴言に、マキリは二の句が継げなかった。今まで、トマリがそんなことを言うことはなかったのだ。

マキリを心配する声を上げることはあっても、マキリを蔑むような言葉を言ったことは一度としてなかった。しかし、今日の前で、確かにトマリはマキリの前に立ちはだかつていた。

そこに今まで感じていた好意は感じられず、ただ、痛いほどの敵意が感じられた。

「どうして、突然そんなことを言うの？」

「あんたがいつまでも煮え切らないからよ」

敵意は薄まらない。

「しようがないじゃないか。こうなったんだから」

むしろ、強まっていく。

「言い訳しないで、この臆病者」

だからマキリは訊いたのだ。

「臆病者は嫌い？」

「嫌い」

即答だった。

マキリは、自分がどんな顔をしていたのか覚えていない。そんなことを気にする余裕もなかった。

「じゃあ、僕のこととは？」

その言葉に、トマリは少しだけ返事を躊躇ったように思う。

けれど、その逡巡も一瞬だった。トマリはマキリの眼を見て、顔には冷たい表情を浮かべて、言い放つ。

「…私の身体は弱いから、ハンターなんてどう頑張っても出来ない。ガンナーにだってなれない。それがわかってても、あんたは楽しそう

に狩場に行った。憎らしかった。羨ましかった。私のことを全然考
えてなくて、あんたが傷だらけで帰ってくるたびにくそつたれ、つて
心の中で呟いてた」

本当は私だってモンスターを相手に戦いたかった。村のみんなに
必要とされたかった。トマリの言う言葉に、マキリは耳を塞ぎたく
なった。

心配していたと思っていたものが、全とうそだったという言葉な
ど、信じたくなかった。

しかし、塞げなかった。目の前の、トマリの気迫がそれを許してく
れなかった。

「あんたが嫌いだった。何でもないような顔をして武器振って、モン
スターを倒してくるのが気に食わなかった」

目の前の、悪意をぶつける存在が恐ろしかった。

しかし、それよりも、何よりも、トマリがそんなことを思っていた
と気付けなかった自分が許せなくて、そのうえトマリの言葉からも逃
げるようなことは、いくら心が折れていても許せるものではなかつ
た。

例え、さらに心が軋む音が聞こえたとしても。それはマキリの意地
だった。

「でも、今のあんたはもつと嫌い」

自分がどんな表情をしていたのかはなおもわからない。それでも
相手の表情はよくわかった。

トマリは少しだけ目を閉じて、それから間もなくして、マキリの眼
を睨み付けた。

薄く開けられた目から、確かに漏れ出る敵意は隠しようがなく、マ
キリは遂に気圧された。

「私に出来ないことが出来る癖に、臆病な人間なんて大嫌い。今のあ
んたを見てるとムカついて仕方がない」

トマリは唇を噛み、まるで本当に苦しんでいるように顔を歪める。
恐らく、マキリの顔も負けず劣らず歪んでいたのだろう。

二人の間には、今まではなかったぎすぎすとした、お互いにお互い

を刃物で傷つけあっているような、そんな空気が漂っていた。

その時、二人とも同時に感じたのだろう。

今までの関係性が、一気に、音を立てて崩れていく感覚だ。

トマリはマキリに背を向けて、小さく舌打ちをした。

「……とにかく、オババに言っ来て、自分がやりますって。じゃないと、この村に居られなくしてやるから」

その言葉に、いったいどれほどの効果があったのかはわからない。常識的に考えて、トマリがマキリを村から追い出すなんてことが出来るとは思えなかった。

それでも、その日のうちに、マキリはオババにハンターになる旨を伝えた。

そうしなければならぬという危機感があつたのだ。

どういう危機感か、と言われれば分からない。ただ、一つ。これ以上間違えれば、取り返せない、そう感じたのだ。

そして、マキリが久方ぶりの狩りに挑む日。

見送りに来たのは、オババとトマリの二人だった。

いつも通りと言えども通りだが、最近では村人たちが総出で出迎えていたな、とぼんやりと思いつ返した。

「……今日はガウシカの角を持ってきておくれ。無理だったら戻ってきてもいい」

寄りにもよってガウシカの角か、と、マキリは自嘲の笑みを浮かべた。それと共に、今の自分には相応しい相手だ、とも。

そして、トマリに目を向けると、昔の心配するような視線はなく、ただ冷たい、路傍の石を見るような目が合った。

「……さっさと行きなさい。あんた、ハンターなんだから」

トマリはそう言っ来て、マキリに背を向けて、自分の家へと帰っていった。

マキリとオババはその背中を見送っ来て、マキリは少しだけ視線を落とす。腹の奥底に、取り除きようもない鉛の玉が沈んでいるような、そんな重苦しい気分だった。

しかし、狩場に行くというのにそんな心境ではまずい、マキリは気

を取り直して、息を吐いた。

「・・・じゃあ、オババ。行ってくるよ」

「ああ、行ってらっしゃい」

オババに挨拶をして、マキリは狩りに出掛けた。

早朝、村人たちが起きるころに。

そして、マキリは帰ってきた。

夕方に、防具を土色に染めながら。顔に大きな疲労と、少しだけの安堵を滲ませた。

たった一本の、ガウシカの角を携えて。

第8話

「……こんなところかな」

ひと段落したところで、マキリはふつと息を吐いた。

肩の荷が下りた気分だが、今の自分の状態が一層自覚されて、むしろ気は重くなった。

数年かけて、元の状態まで、ドスファンゴ程度を狩れる程度までは実力を戻し、最低限の活動を出来るようになった。

しかし、身体が成長したにも拘らず狩猟にかかる時間は昔とどっこいどっこいだ。安心して狩れるのは、この二年間一度も怪我をせずに狩ることが出来ていたガウシカくらいなもので、他のモンスターを相手にするときには心臓の鼓動数は急激に跳ね上がる。

そして、それは二年たったところで収まることはなかった。

限界まで身体を稼働させ、敵の攻撃範囲から逃げ、僅かなスキを突く。変わったのは紙一重で躲していたものを確実に躲せるように間合いを取る習慣がついたことくらい。

「……なるほど。あー、一応聞くが、あれだよな。今は両親のことは「二年も経てば折り合いもつくよ」

「だな。じゃあ、特にそこらへんは気にせずに行くぞ」

ホイレンはごほん、と下手な咳払いをして仕切り直す。

マキリもまた茶々を入れずに言葉を待つ。

「……ま、お前が臆病者じゃなかったってのは実のところ、意外じゃなかった」

「え？…なんで？」

マキリが尋ねれば、ホイレンは面倒くさそうに説明する。

「だってお前、明らかに行動と態度があつてねえし。轟竜にやられそうになった時も一応、冷静は冷静だっただろ。じゃなけりや肥し玉使うなんてことはできねえよ」

死にそうなときに冷静な臆病者とか、わけわかんねえしな。ホイレンはそう呟きながら、頭をガシガシと乱暴に掻いた。

「……まあ、お前が戦いたがらない理由も、嬢ちゃんに従ってる理由

もわかった。わかったが」

ホイレンはそこで言葉を区切り、ため息交じりに、マキリから目を逸らしてそっぽを向いた。

「あれだな。弱みは弱みでも惚れた弱みだったな。悪い」

「・・・あの、そう言われると急に恥ずかしくなってくるんだけど」

「聞いているこっちはもつと恥ずかしい。何が悲しくて十代の赤裸々な恋愛事情を語られにやあならんのか」

「待った。ちよつと待った」

「お前結局格好つきたいだけか。いや、良いんだぜ、別に。ただハンターって女の子受けは良いけど大人の女にはあんまり好まれなくてだな」

「話の重要なところはそこじゃねえだろ！」

マキリは顔をこの上なく赤くさせて、ホイレンに怒鳴り散らす。ただ、ホイレンの顔には底意地の悪い笑みが張り付いていた。

「いやあ、本当に悪いなあ。そんなつもりじゃなかったんだよ。お前が何か弱み握られてるんだったら俺が何とかしてやろうと思ってたんだがな？そんな事情だったら首を突っ込むのも野暮つてもんだよなあ。馬に蹴られて死んじまうよ」

「・・・」

赤い顔は恥ずかしさか、それとも憤りからか、それは分からないものの、マキリは顔を下に向けて肩を震わせていた。どうやら、よほど効いたらしい。

「・・・くそ、話すんじゃないかった」

引かれることも反応に困られることも覚悟していたが、まさか一転攻勢をかけられるとは思っても居なかった。

つくづく、この男は自分の予想を超えていく。

「・・・ま、でも確かに、お前にとつては結構絶望的な状況つてわけだ」
ホイレンは瞬時に表情を真剣なものへと切り替えると、本題を切り出した。

「トマリの嬢ちゃん言葉をまともに受け取れば、まあお前自身が嫌いだしハンターも嫌いだし、でもハンターをやつてないお前を見るの

はもつと嫌いってな論法だな。どこをどう直せばいいのやら全く分かんねえって感じた。正直役満だな。あきらめた方が吉だ」

ホイレンが肩を竦めるのを見て、マキリは肩を落とす。

「・・・だよね」

マキリも二年間。ずっとそう考えてきたが、打開策が見いだせずだった。この話を聞いたばかりのホイレンに解決できるなどという考えは甘すぎるのだろうか。

露骨に落ち込んだマキリを見て、ホイレンは珍しく苦笑いを浮かべる。

「ああ、だが、慰めるわけじゃないが世の中わかんないことの方が多い。可愛さ余って憎さ百倍って言葉があるだろ？」

「・・・追い打ち？」

「ちげえよ。憎さ余って可愛さ百倍ってこともあり得るんだよ。実例がある」

「・・・え？マジで？」

「マジマジ。俺が知ってるやつはハンターの夫婦で、昔は会えば毒殺撲殺斬殺となんでもござれだったが、今は周りがうんざりするくらいのおしどり夫婦だよ。二人揃うと会話が成立しなくてイライラする・・・つと、今はどうでもいいな」

ホイレンは言葉を区切ったが、マキリは地味にその夫婦が気になる。一体何が起こればそんな事態が起こりうるのだろうか。ご教授願いたい。

「あのさ、その夫婦ってどうやってそこまで持って行ったの？」

「二人して古龍の夫婦に遭遇して命辛々逃げ延びた。そしたらいつの間にか好きになったらしい」

「・・・そうですか」

ホイレンはなんてこともなさそうに言うが、マキリからしてみれば何を言っているのか理解が出来ない。

古龍の夫婦？遭遇して逃げ延びた？いつの間にか好きになった？なんじゃそりゃ。

理解不能にもほどがあつた。マキリが遭遇したなら一体だけでも

逃げ切るのは不可能だ。

どうやら自分には適応できそうもない。マキリはそう結論付けて、今の話を頭の片隅に押しつける。

「しかし、アイさんはそんなこと感じさせなかったけど、知らないのか？」

「トマリから聞いてるのかもしれないけど、僕は知らない。それに、みんなは僕たちの雰囲気が変わっても態度が全然変わらなかつたんだ。だから、僕たちに干渉しないようにっていう暗黙の了解でもあるんじゃないかな」

マキリが臆病になってから村人たちの話題にマキリとトマリに関するからかいがなくなったことが何よりの証拠だ。明らかに触れようとはしていない。気を遣われている感覚がひしひしとして、マキリとしてはあまり好きではない。が、気を遣われている以上それを無下にするのも気が咎める。どうにも面倒な状況だった。

「・・・ま、そりゃそうか」

ホイレンは静かに呟き、顎に手を当てて、少しだけ唸った。ホイレンが考え事をするときは、大抵このような格好をする。マキリは考え事が終わるまで待つことにした。

と、気が付けば、外に響いていた風の音が消えていた。どうやら天気が回復したらしい。

明日雪山に行けるかどうかは雪山の様子を見なくてはならないが、今年是比较的天候が良い。どうにかなるだろう。マキリは勘と少しの願望を込めて予想した。

考えているうちに、ホイレンは姿勢を戻していた。考え事が終わったらしい。マキリもまた姿勢を戻し、ホイレンに向き合う。

ホイレンはうん、と一度頷いて、マキリに向かって笑いかける。

「明日、稽古するか」

「・・・はっ。」

※

「あれ？なんでオツカイが居るの？」

翌日の朝、マキリがホイレンとの稽古のため訓練場に行くと、そこにホイレンはおらず、代わりにオツカイがいくつかの武器が置かれた木箱の前で仁王立ちしていた。

オツカイは目を閉じ、そつと息を吐き出した。呆れているような仕草だ。

「・・・今日の朝、ホイレンに來いと言われてな。武器を使うから調整しろと」

「え、それで来たの？わざわざ？」

「ああ、あいつは遠慮というものを知らんのか。殴ってやろうかと思っただ」

「じゃあ、なんで来たの？断ればよかったじゃない」

マキリがそういえば、オツカイはマキリの顔を見て、再びため息を吐いた。

「・・・協力するといった手前、そういうことも出来んだ」

「協力？何に？」

「お前は知る必要のないことだ。それよりも、早くこつちに来い」

オツカイはそう言って会話を打ち切る。そして、マキリを手招きして木箱の前に立たせた。マキリは首を傾げたが、知る必要のないことというのであれば必要ないのだろう。そう思い、疑問ごと頭の中から消去した。

そこにあつたのは大剣をはじめ、太刀、ランス、ガンランス、ハンマー、双剣、片手剣と言った遠距離武器を除いたほとんどの武器だった。全て初心者用と呼んで差し支えないものではあるが、持つてくるのはそれなりに大変だっただろう。

「これからこいつらをお前用に調整する。少しこいつを握れ」

オツカイはそう言いながら、マキリに粘土のようなダンベルのようなものを渡した。何とも言い難い難い形状をしたその道具は、マキリの手の大きさを図るためのものだ。

「・・・今更、これ必要なの？」

「一応だ。万が一があるなど俺が許せん」

流石、職人氣質。マキリは心の中で呟くと、その道具を握り、オツカイに渡した。

それをもとにオツカイはあつという間に柄の太さを調整していく。調整の仕方は布を巻くといった簡素なものだが、それでも他人の手の大きさに合わせるにはそれなりの経験が必要だ。

「お、やってるやってる」

その調整が終わるころ、ホイレンはやってきた。

その恰好を見て、マキリは呆れる。

「・・・寒くないの？ホイレン」

「ホットドリンクを飲んできた。それに、マフモフってモフモフしてるから動きにくいんだよ」

ホイレンの格好は、上下にインナーを着ただけの姿だった。正直、ハンターでなかったなら不審者として通報されてもおかしくない。

ホイレンは背中に大剣を背負っていた。間違っても狩りをする姿ではないが、武器を振るだけならばそれでもいいだろう。

つまり、今日は武器を振るだけということらしい。

「・・・あのさホイレン。なんで、稽古なんてするの？」

「もやもやしたもんを吹き飛ばすには運動するのが一番だ。そうだろう？」

「・・・まあ、否定はしないけど」

「だったら、とりあえず運動して気晴らしするに限る。というわけで稽古すんぞ」

理屈が通っているような通っていないような、マキリは納得しかねていたが、納得しようとしなからうとホイレンには関係ないということに気付くと考えるのを辞めた。

「で、稽古って何をやるのさ」

「単純にお前が武器を振って、俺が動きの悪い点を指摘するくらいだな。まあ、今日は気晴らしが主な目的だからそんなに口うるさくするつもりはねえさ。あ、俺もちゃんと振るぞ。たまには別の武器も振ってみねえとな」

マキリはふと思う。これは、普通にハンターのやることではないだろうか、と。

僕はこれからハンターをやるつもりはないのに、こんなことをやる必要はないのではないか、と。

「……あの、気晴らしだったら農場に」

「俺が気晴らし出来ねえから却下」

極めて自分勝手な理由だった。しかし、マキリが農場を提案した理由も自分勝手なので反論する気にはならない。

「じゃ、まずは大剣から行ってみるか。まあ、問題ねえと思うけどな」

「そういうの、プレッシャーになるからやめてくれないかな」

マキリは並び立つ武器を見て、そつと、誰にも聞かれない程度に呟く。

「……手を抜くの、好きじゃないんだけど」

※

トマリは窓から外を見て、ほつと息を吐いた。

窓枠からはフラヒヤ山脈が一望できる。昨日の嵐の名残らしき黒雲が遠くに見えるが、山の美しさに水を差すほどではない。

薄汚れた自分の部屋から目を外すには、遠くにある山は絶好の的だった。

「……今日は、どうしようかな」

仕事は昨晚終わらせた。アイに頼まれた分も、オツカイに頼まれた分も、既に作ってあるしここから一週間ほどは急ぎの仕事もない。

要するに、トマリは暇だった。

ちらり、と自分の本棚に目を向けるが、そこにあるのは表紙が擦り切れるほどに読み込んだ参考書だけ、間違っても娯楽本など置いていない。

そういったものは、昔すべて処分してしまった。

「・・・どうしよう」

道具屋にでも行って、何か面白いものでもないか見てこようかな。それとも、ポツケ農場に行ってゴジロウと遊ぼうかな。

でも、今日は狩りに行かないみたいだし、たぶんマキリも居るだろうな。

そう思うと、ポツケ農場に行くという選択肢は自然と消える。

「うん、道具屋かな。やっぱり」

もしかしたら新しい参考書も入荷しているかもしれない。そんな期待と共に、トマリは椅子から立ち上がった。

「トマリ？起きてる？」

そこに、母、カリンの声が聞こえてきて、トマリは出鼻が挫かれたように感じられた。わざわざ自分を呼ぶということは、何かしら用事があるのだろう。

途端に憂鬱になった。例えるなら、自分から勉強しようと思っていたときに母親に勉強しろ、と言われるときと同じような感覚だった。今まで暇で何もしていなかったのだから何かをすることは構わないはずなのに、決心してからすぐに別の用事を言い渡されると、なんとなく、やる気がうせる。

「起きてるよ」

だからと言って返事をしないわけにもいかず、トマリは元気に、けれど少しだけ不満を混ぜて返事をした。しかし、カリンはそんな微妙なニュアンスを気にした様子はなく、部屋に入ってきた。

「トマリ、ちよつと料理手伝って。ってあんた、もうちよつと掃除しなよ」

「これはみんな必要なの。しつちやかめつちやかに見えるかもしれないけど」

「まさしくそれね。ま、必要ならいいわ。さっさときて」

カリンはサバサバと会話を打ち切ると、キッチンへと向かっていった。自分の母親ながら、その自由奔放なふるまいには辟易させられる。

自分も、あれくらい自由に振る舞えたらなあ。

トマリは、密かに父親似の性格を疎ましく思いながら、ため息を吐く。

「・・・マキリ、多分、農業やってるんだろうな」

その光景は、容易に頭の中に像を結ぶ。

真剣な表情で、コジロウと共に農業に勤しむマキリ。釣りをして、大物を釣り上げたときに仄かな微笑を浮かべるマキリ。ピツケルを使って岩肌を削り、石ころしか出なかった時の落ち込むマキリ。

そのすべては、長い年月を共に過ごしてきただけあって確かなリアリティをもつて再現できる。

そして、その行為をするたびに、トマリは自分の心の中に言いようもない苛立ちを感じるのだ。

「あーあー、ダメだダメ」

トマリは自分の頭をぶんぶんと振り回し、頭の中の像を振り払う。

自分の頭の中に浮かんだ黒い、沈んだ感情を踏みつぶし、粉碎し、息と共に吐き出す。

「しつかりしなきゃ」

トマリは自分に喝を入れて、カリンの後を追った。

だから、窓から見える雪山が再び暗雲に覆われるのを、トマリが見ることはなかった。

※

砲撃音が訓練場に轟いた。

煙を出しながら次弾を装填するガンランスの挙動はそれなりに素早く、リロードした後の攻撃もそれなりに鋭かった。

「へえ、やっぱり様になるな」

「ああ。だが、やはり所々に挙動の乱れがある」

「基本は抑えてるんだがな」

ホイレンとオツカイはマキリの挙動を見て、それぞれの意見を出す。その意見は程度の差こそあれ、マキリがそれなりの動きを出来て

いるという一点においては一致していた。一方では、普通のハンターの域を出ない、とも言っていたが。

ガンランスは武器の中でも特に扱いが難しいものの一つだ。その理由は、第一に構造が複雑なこと、第二に重いこと、第三に弾薬の扱いも考えなくてはならないこと。おもな理由はその三つだ。

ボウガンとランスを合体させたような武器である以上仕方がないともいえるが、それにしても複雑な挙動をする。慣れていなければスムーズに動くことは出来ない。

今のマキリが良い例だった。

実は、マキリがガンランスを持ったのはこれで二度目だ。

大剣や太刀、ランスと言った武器は、小さな子供の体に合わせれば振れないことはない。もちろん、幼い身体に掛かる負担は相応のものだ。

しかし、ガンランスは違う。砲撃の反作用を体で支えられるほどの力がなくてはならない。間違っても子供に扱わせるようなものではない。

同年代に比べて体格の良いマキリがガンランスを扱える年齢になったのですら十三歳。それも一度触っただけだ。そのすぐ後には両親の死があり、マキリ自身も戦えなくなった。ガンランスの練習などする気もなく、今この時まで触ることすらなかった。

そんなマキリが慣れる等ということが出来るはずもない。マキリは今手探りで、ガンランスの操作を確認している最中だった。

「・・・ま、それにしても大したもんだ」

「満足したか？」

「ああ、ま、不満なところもあるけどな」

ホイレンは少しだけ口角を上げると、まだガンランスを振るっているマキリに声をかける。

「おい！マキリ！」

「ちよっと待った。あと少し」

ホイレンは目を丸くして、マキリを見る。傍らのオツカイは驚いている気配はなく、むしろ懐かしそうにその光景を見ていた。

そんなホイレンの様子に気付くことなく、マキリは真剣な面持ちでガンランスの挙動を確認していく。バックステップ、突き、突き上げ、砲撃、竜撃砲は先ほど撃つたため使うことが出来ないが、その他の動きを確認すると、マキリはやっと一息ついた。

「お待たせ。何？」

ホイレンはガンランスを背中に畳んだマキリを見て、怪訝そうな表情をする。

「・・・お前、妙な奴だなあ。ほんと」

「はあ？」

マキリは訳が分からない、と言いたげに聞き返すが、ホイレンはため息を吐くばかりで答えようとはしない。オツカイに目を向けるが、そちらも肩を竦めるばかりだ。

「・・・なに、いったい」

「なんでもねえよ。とにかく、これで全部の武器を振る作業が終わったわけだが、感想は？」

「別に？まあ、久しぶりに色々と触れたから楽しかったけど」

特に、今回は普通の、初心者用の武器がそろっていたから何の気兼ねもなく使うことが出来た。もしもアギトのような上級武器だったなら、前任者の教えを気にしてうまく振るえなかっただろう。

それを聞くと、ホイレンは「そいつはよかったな」と言つて、オツカイに目を向けた。

「オツカイ、あんたから何か言うことは？」

「ない。まあ、片手剣は上達していたな。というくらいだ」

「そりゃあ、二年間はほとんど片手剣しかやってないからね」

マキリは苦笑いを浮かべながらそう返した。

しかし、ホイレンは腰に手を当てて、再びため息を吐く。

「・・・何でもかんでもうまく行くもんじゃねえなあ」

ホイレンのつぶやきを聞いて、マキリはオツカイに目を向ける。オツカイは再び肩を竦めたが、その仕草でマキリはすべてを察した。

いったい、何故くだらないことを探っているのだろうか。この男は。

行動原理がいまいちわからない。マキリとトマリの関係に干渉するということもそうだが、武器の熟練度を調べるなどなんの利点があるのか全く分からない。

しかし、マキリもホイレンにすべてを曝け出す気などない。そこまです時間も重ねていないし、これこそ何のメリットもない。

「……んー、よし、それじゃあ偶然、すべての武器の熟練度が大体同じくらいだったってことで、今日の鍛錬はお開きにするかね」

ホイレンはそう言って、背筋を伸ばす。その表情にあった不満の色は徐々に薄れ、いつも通りの軽い笑みが浮かんできた。

「で、今は昼時だが、お前ら一緒に飯食いに行こうぜ」

「良いよ。オツカイは？」

「俺も行こう。とはいっても、俺は弁当だが」

マキリとホイレンがオツカイの荷物に目を向けると、確かにそこには布にくるまれた弁当らしきものがあった。

「愛されてるね」

「いい奥さんが居て幸せもんだな、お前は」

二人に立て続けに妻を褒められ、オツカイは少しだけ耳を赤くしながらそっぽを向く。

「さっさと行くぞ」

二人より先行するオツカイを見て、ホイレンは笑いながら、マキリは苦笑いを浮かべながら、ゆったりと歩いていく。

三人が雪山に起こっている異常事態を知ったのは、それから数時間後になる。

第9話

「・・・今、なんていった？」

マキリは頬を引き攣らせながら、目の前のオババに聞き返す。隣に立つホイレンも、その表情を厳しくしている。

オババの顔も、いつもとは比べ物にならないほど真剣だった。

「今、雪山の麓には大型モンスター、中型モンスター問わず、多くのモンスターが集まっているみたいだね。内訳はフルフル二体、ドスギアノス一体、ドスファンゴ三体、ドドブランゴ一体。とりあえず確認できたのはそれくらいだけど、実際はもっと多いかもしれない」

「というか、たぶん多いだろうねえ。オババがそう付け加えるのを聞いて、マキリは眉を潜め、雪山の方向を見る。

雪山は、再び暗雲に覆われていた。

とはいっても、今回は山頂付近に集中している。麓に雲がかかっている様子はなかった。モンスターは、暗雲から逃げてきたのだろうか。

しかし、とマキリは思う。

いくら悪天候だろうと、モンスターがここまで麓に降りてくることが果たしてあり得るだろうか。

「いいや、あり得ない。」

マキリは断言出来た。

そして、雪山には何かがある、何かが居る。そう確信する。

「・・・マキリ、お前は今の現象、どう見る？」

「雪山に何かが居る。と思う」

「同感だ。オババ。他に情報はないのか」

ホイレンもまた同じように感じていたらしく、理由を聞かれることはなく話は進んだ。

オババはふむ、と少し焚火に目を向けて考える。記憶を探っているのだろうか。

「・・・そうだね。こういう事態は聞かないわけじゃない。例えば狂暴な外来種、イビルジョーなんかが見れるとモンスターたちは住処を追

われて別の場所に集合する。それは古龍も同じだね」

マキリは、先日見た轟竜を思い出した。

あの大食いのティガレックス。あれが発端になっているのだろうか。

あり得ない話ではない。

大食いということは脅威だ。多くの肉を必要とするということは、それだけ代謝が良く、強靱な肉体を持っているということでもある。実際、あの轟竜は通常の個体よりも一回り身体が大きかった。

フルフルに例えるなら、それがネックになっってくるのだろう。

フルフルは暗闇を好み、洞窟の中で獲物を待ち構えて捕食する。だから洞窟に得物がやってこないような状況、つまり、そこに草食竜がやってこないような状況でない限りは麓に降りてくることはない。

逆に言えば、草食竜が縄張りにやってこないような状況ならば、麓に降りてくることもある、ということだ。

恐らく草食竜が大食いの轟竜に恐れをなして、麓に固まっているのだろう。さらに、ドスファンゴ、ドスギアノス、ドドブランゴに至っては轟竜に食われるのを阻止するため、そして獲物を確保するために降りてきている。そう考えると自然なように思えた。

ここまで考えて、マキリは唇を噛んだ。

そこまでの脅威だとは思わなかった。マキリは自分の見通しの甘さに苛立ちを覚えるとともに、方策を考える。

「・・・ホイレン。あのティガレックス、一人で狩れるよね」

「もちろん。正直、ここまでの脅威だとは思わなかったけどな」

マキリと同じ感想を抱いたらしいホイレンは、ため息を吐く。

そして、その先に考えていたことも大体はマキリと同じだった。

「とにかく、あいつが原因なら、ぶっ殺しちまえば問題ねえってことだ。もう一つの問題は、その間麓の連中が大人しく、麓で過ごしてるかどうかってことだな」

マキリは頷く。

モンスターは通常、人里を嫌う。

そのため、何もなければ人里が襲われることはない。ただ、今回の

異常事態は文字通り異常であって通常ではない。

村が襲われるという可能性は、捨てきれなかった。

「今からそいつらを狩りに行くっていう手もある。が、俺も轟竜を相手にするってのに中型、大型モンスターを相手にするのは御免被る。ましてや、あの轟竜は間違いなくG級案件だ」

マキリはそれを聞いて、目を見開く。

ハンターの受けるクエストには、大きく分けて三つのランクがある。

下位、上位、そしてG級だ。

下位と上位の意味は文字通り。下位のクエストは容易で、上位のクエストは難しい。単純に強靱な個体の狩猟であれば上位であったり、逆に、数が多くても幼体ばかりだった場合は下位になることもある。

上位のクエストを熟すことが出来るハンターは一流と呼ばれ、経験を得たハンターは大体がこの上位ハンターに分類される。

ただ、G級ともなると、少し意味合いが違ってくる。

「・・・ホイレン、G級ハンターなの？」

「何度か受けたことはある。もちろん、苦戦したはしたがな」

だから、G級ハンターかと言われると微妙だ。ホイレンはそういうが、マキリにとって驚くべきことであることに変わりはない。

G級ハンターとは、言うなれば人外だ。

ハンター自体が人外、と呼ばれることもあるが。その人外の中でもひと際頭の飛びぬけた人外だった。

ハンターズギルドに実力を認められた猛者。数年に一人現れるか否かの逸材。

ただの一流ハンターとは訳が違う。

「・・・一応言っとくが、お前の親父もG級だったんだぞ？」

「そりゃ知ってるよ。けど、他のG級ハンターなんて見たことなかったし」

それほどに珍しいのだ。

世界を見渡しても、恐らくその数は百に満たない。

マキリはしばし、ホイレンの予想外の肩書に固まっていたが、すぐ

に表情を引き締める。

そのホイレンがG級と判断したのだ。今雪山に居る轟竜は、間違ってもマキリの手に負える存在ではないし、疲れのたまったホイレンが相手できるような個体でもない。

そうなる、選択肢は一つしか残っていない。

「・・・僕が、やるか」

「やれるのか？」

「いや、やるしかないでしょ」

やれる、やれないではない。

やるしかないのだ。この場合は。

やれなければ、この村が襲われるかもしれない。

この村が襲われれば、当然、この村の人々は少なからず死ぬだろう。そして生き残ったとしても、路頭に迷う頃は想像に難くない。

そんな苦行を彼女に味合わせるために、ハンターをやっているわけではない。

「・・・ま、あの話聞いた直後にお問い合わせのもちよつと都合がよすぎるが、頼むわ。この状況、一人じゃどうにもならん」

「わかってる。ただ、フルフルは狩れるかどうかわからないから」

単体ですらきついというのに、今回は複数体居る。しかも、数の全容把握すらままならない。

覚悟せざるを得ない。

自分の命がここで散る。その覚悟を。

「俺のアギトと防具・・・は、無理か。お前、マフモフで行けるのか？」

「大丈夫だよ。どうせ攻撃なんて食らわないから」

「言うねえ。お前も」

マキリが冗談交じりに言えば、ホイレンは鼻で笑う。

しかし、次の瞬間にはすぐに真面目な顔に戻る。

「良いか。今回やるべきことは時間稼ぎだ。あいつらが麓の草食竜を食いつくす前に、あいつら自体の数を減らす。それが目的だからな。間違っても追いつめて、村の方にモンスターを誘導したりはするな。目的と手段を間違えるなよ」

「わかった。気を付ける」

二人は真剣な顔で頷きあうと、オババに向き合った。

「オババ。略式でやるぞ、クエスト内容の確認だ。俺は轟竜一体の狩猟。マキリは出来る限りの中型、大型モンスターの排除。それで構わないか」

「ああ、受けてくれるかい？」

「当たり前だ」

ホイレンの言葉に、マキリも追従して頷く。オババはここにきて、やっといつもの柔らかな笑みを浮かべた。

「頼んだよ」

二人は共にオババに背を向けて歩き出す。

その途中、ホイレンは呟いた。

「来て早々、こんな事態になるとは、俺の不運も大したもんだ」

「僕にとっては幸運だったよ」

「だろうな。この状況をお前ひとりでどうにかしろって言われても、絶対に無理だった」

「でも、何もしないわけにもいかないしね」

結局狩りに行くことにはなっただろう。それがハンターの仕事である以上は。

その結果がどうなるかは置いておくとしても。

「ああ、マキリ。お前、嬢ちゃんに喝入れてもらうの忘れんなよ。死ぬぞ」

「・・・自分から頼みに行くのも、変な話だけどね」

いつもは、何も言わないうちにトマリが喝を入れてくれた。それが圧力になって、マキリの身体を動かしていた。

だから、今回もやってもらわなくては困る。

困るのだが、何の葛藤もなしに、ただ『行ってこい』と言われるのもまた、マキリとしては複雑な気分だった。

心配してほしいような、欲しくないような。

我ながら面倒くさい。

マキリは自分のため息を吐きながら、ホイレンと別れ、自分の家に

向かった。

※

マキリは自分の装備を着こんでいた。

いつも通りのマフモフシリーズに、最近はよく使うようになったホイレンのアギト。正直、慣れていない武器を使うのは不安だった。不安だったが、それよりも攻撃力のない武器を使うことの方が不安だった。

『己の分にあつたものを使い、さもなければ簡単に死ぬ』

「なら、僕は簡単に死ぬのかな、父さん」

自分でも驚いた。

何も意識せずに発した言葉だった。

しかし、それはどうにも、真実のように思えた。

達人は武器を選ばない。という言葉がある。その道の達人はたとえ棒切れのようなものであつても、それを武器として戦うことが出来る、という話だ。

言うまでもなく、戯言である。

達人であればあるほど、武器には拘らなければならない。飛竜の鱗は厚く、強靱だ。そんなものに枝をぶつけたところで何になろう。

しかし、逆に武器が実力を超えたものであると、これもまた危ない。その武器はあるいは、何かのモンスターに相性が良く、そのモンスターを簡単に討伐できてしまうかもしれない。そして、そのモンスターが世間一般から見ると強いと分類されるものだったとする。

そうなったとき、自分が強いと、そう錯覚してしまうことは想像に難くない。

マキリはその典型だった。

昔狩ることが出来たから今も狩れる。楽勝だったから次も楽勝だ。そう思う心の内の驕りを、マキリは取り去ることが出来ない。それはおそらく己の魂がそのような形をしているのだろう。

心の内はそうなっていると、そう自覚できている。

だというのに、自分は何故、トマリに激励してもらわなければ動くことすらままならないのか。

自分の心を、理解し切れていない。

一方では、この程度のモンスターに負けるわけがないと思っっている。

他方では、その程度のモンスターを相手に身体が動かない。

心と体が嘔みあわない。気色の悪い感覚。

驕るよりは良い。

しかし、マキリにとっては苦痛そのものだ。

臆病者になどなりたくない。しかし、自分は間違いなく臆病者だ。

あるいは、それが今までマキリを生かしてきたのかもしれない。

臆病でなかったなら、無謀な挑戦をして、いつか命を落としていたのかもしれない。

ただ、マキリは今回、臆病者でありながら無謀な挑戦をしようとしている。

「・・・この結果は、何を生むのかな」

マキリは自分の手の中にあるアギトに目を向けて、無理矢理口角を釣り上げた。

※

作戦はこうだ。

とにかく、マキリは一足先に狩場に行き、出来る限りモンスターの数を減らす。

ホイレンは万全の準備を整えたうえで、轟竜狩猟に赴く。

そのため、マキリは出来る限り早く出発する必要がある。

準備はすぐに終わり、マキリはその日のうちに出発する。

そして、その前にマキリはトマリを訪ねなければならない。

「・・・はあ」

マキリはため息を吐きながら、トマリの家の前で立ち止まっていた。

どうしたもんか。

ここまで来ておきながら、マキリは狩りに行く勇気が振り絞れずにいた。

行くしかないと理解している。

しかし、再び自分の情けない姿を見るのは、マキリにとっても苦痛だった。

それに、今までトマリは自発的にマキリを狩場に送り出していたのだ。自分から頼みに行くというのはどうにも、据わりが悪かった。

普段しない行為をするとき、どうにも最初の一步を踏み出すのが難しい。

「・・・ま、どうとでもなるかな」

面倒なことには目を瞑る。それもまた一つの方法。

マキリは深く考えずにドアをノックした。

やはり、程なくして人が近づく気配がする。

「はい、どちらさまでしょうか。って、マキリ？」

戸口に立ったのは、カリンだった。

マキリは少しほっとして、ほっとした自分を嗤う。

なんでほっとしてるんだ。訳が分からん。

「あの、トマリいますか？」

「いるけど・・・なに？狩りに行くの？今から？」

「はい。ちよっと急な用なので」

少し言葉をぼかす。

理由はと言えば、まあくだらないが、『私に伺い建ててる場合か！』と言われながら追い立てられるのはマキリも避けたいからだった。なにせ村の緊急事態なのだ。

カリンは少しだけ首を傾げるが、家の中にトマリを呼びに行った。

そして、程なくしてエプロン姿のトマリが現れる。

「どうしたの？」

トマリはそう聞いて、それからマキリが狩りに行く恰好をしていることに気が付いた。

そして、そこは幼馴染らしく、察したらしい。呆れた顔をした。

「あんだね、それくらい自分で」

「・・・わかってるんだけどさ。どうしても」

マキリも自分で自分が情けなくなるが、仕方がない。もうそうなってしまうているのだ。

トマリは眉間に皺をよせていたが、自分の金髪を弄りながら呟いた。

「・・・行つてきなさい。村のために」

その声は静かだったが、マキリは少しだけ、身体の強張りが取れたことを感じた。

情けないが、仕方がない。

悲しいが、どうしようもない。

今はまだ、マキリは好意を得られてはいないのだ。

「ありがとう。行つてくる」

マキリは笑みを作つて、トマリに背を向ける。

トマリはその背中を見送つて、家の中へと入っていく。

ここに、マキリが狩場に行く準備は完了した。

※

オツカイは、加工屋の奥で腕を組んでいた。

考えているのだ。果たして、自分にできることはないか、と。

マキリやホイレンと共に、オツカイは村の異常事態を知った。しかし、オツカイはハンターではない。自分にできることなど限られているし、加工屋は武器を作ればそれで終わりだ。

あとは、ハンターに任せるしかない。

そう、武器を作るしか、ないのだ。

「・・・無駄になる、な」

マキリは既に出発している。

しかし、クエストに失敗して帰ってきたとしても、マキリは諦めたりしないだろう。

やらなければならないのだから、あいつはやる。何度失敗しても、

それこそ死ぬまで続ける。

オツカイにはその確信があつた。

一度マキリの心が折れ、農業に勤しむようになった姿を見てもなお、確信は薄れることがない。

マキリは必ず、諦めない。

そして、その諦めない姿勢を少しでも、成功へとつなげる手助けができるのなら。

オツカイはそう考え、立ち上がる。

鍛冶場へと移動し、道具をそろえ、鍛冶場の温度を上げていく。そこにいるだけでも汗を掻くような熱さまで、武器を鍛えることが出来る状況まで。

室内が赤い光で満たされると、オツカイは隅に置いてあつた箱から、ガラクタとも呼べるようなくつかのものを取り出し、その中から使えそうなものを選別していく。

結果は、真つ二つに折れた武器だけだった。

「・・・故人の武器を溶かすのは、好きじゃないんだが」

武器に触れて、オツカイは呟く。

「息子の役に立つのなら、本望だろう」

第10話

ベースキャンプについたマキリが一番最初にやったことは、深呼吸だった。

心を落ち着けて、狩りに集中する。自分を客観的に見て、出来る限り最高の精神状態へと持っていく。

毎回のようになっていることだが、今日は特に念入りに、出来る限り深く、自分の意識の底へとメスを入れる。臆病者は相変わらず顔を出さないが、身体は恐らく、いまでも臆病者のための準備を着々と進めていることだろう。モンスターの前に出たとき、えいや、とマキリの身体を止めるために、悪巧みでもしているのかもしれない。

だが、今日はそれをやられると困るのだ。

なにせ、少しでも油断すれば死ぬかもしれない狩場が目の前にはある。

一ケタの年齢から通い詰めた狩場からは、感じたこともない気配が混ざり合っていた。さながら、モンスターのサラダボウルだ。否が応にも心が引き締まり、準備に気持ちが入る。

感じる。未だかつてない死地の臭い。

マキリは引き攣りそうな頬を無理やり笑みの形に変えて、背中のアギトを抜き放った。

一振り振って、確認する。自分の動きに悪いところはないか。もう一振り、今度は違う角度で振って確認する。悪いところは、もう一振り、確認、もう一振り、確認、もう一振り、確認。

何度も何度も確認して、マキリはため息を吐く。悪いところはない。

が、自分が納得するほどいい動きでもない。

「良くもなく、悪くもなく、って感じだね」

誰に聞かせるともなく、一人呟く。

そして、準備がすべて整った。

「・・・行こうか」

誰に問いかけているのか、そんなことは改めて問うまでもなかつ

た。
マキリは狩場に向けて歩き出し、濃厚な死の香りの源泉へと向かっていった。

※

現れたのは、ドスファンゴ二頭だった。

二頭とも気が立っているらしく、マキリの姿を見るなりいきなり突進してきた。二頭同時に、違う角度から。

マキリは焦らない。焦らず、冷静に、しかし急いで対処する。

この状況、横に良ければどちらかのドスファンゴの突進の餌食になり、後ろに下がれば最悪二体の突進を受けることになる。

となれば、残るは前だ。

マキリはドスファンゴたちが突進してくる間に走る。ドスファンゴたちも、当然その長い牙をマキリに向けて方向転換しようとする。しかし、二頭ともすでに走り出しており、急に止まることは出来ない。

結果、何が起こったか。

二頭は頭から激突し、しばしの間目を回す。

その隙を見逃す手はなかった。

「死ね」

いつもよりも数段低く、また殺気の込められた声と共に、マキリは大剣で一頭のドスファンゴの頭を殴打する。

しかし、流石はドスファンゴと言うべきか、ポポを一撃で屠ったアギトは頭蓋骨によって受け止められた。マキリの手には自分で振り下ろした大剣からの衝撃が反射し、少しだけ自分の手が痛むことを感じていた。

だが、マキリの動きはそれで終わりではない。

殴打したアギトを今度は横に動かす。出来る限り自分に近づけて、力のモーメントを少なくし、小さく、速く回転させる。それは幼いこ

ろ、マキリがギアノスの延髄を断ち切った一撃の予備動作によく似ていた。

目を回していたドスファンゴはまだ回復していない。マキリはそれを確認しながら、先ほど一撃を当てた場所を見据える。

「おらあ!!」

裂帛の気合と共に放たれた殴打は、寸分たがわずドスファンゴの肩を貫き、粉碎し、押し潰した。

鮮血と脳漿と骨の残骸とが混じり合い、ドスファンゴはうめき声をあげる間もなくその命を散らした。

ドスファンゴは脆いモンスターだ。硬い外皮に囲まれているとはいえ、飛竜の鱗の硬さとは比べ物にならないほど柔らかい。さらに、目を回している状況ならば目の前に立つても碌な突進など放てない。

突進のないドスファンゴなど、脅威とは言えない。

マキリは開始早々、どうにか一頭のドスファンゴを討伐できたことに安堵して、もう一頭に目を向ける。

どうやら既に目は回していないらしく、マキリをその鋭い眼光でもって睨んでいた。既に後ろ足を威嚇するように露出した土を蹴り上げる。

マキリは表情を厳しくして、ドスファンゴに相對する。ドスファンゴの眼には、手強いモンスターにみられる警戒の色が見られたような気がしたのだ。事実、マキリを目の前にして、先ほどのように我武者羅に突進してこようと言う気配は見られない。一度目が楽になってしまった分、二度目は難しくなったようだ。

二度目は先ほどのようにうまくはいかない。マキリは気を引き締め、ドスファンゴを見据える。

手に走った痛みはすぐに引くだろう。骨に異常はない。筋肉にも異常はない。痛覚だけが置き去りになっている状況だ。

問題はない。

ドスファンゴはぶるる、と籠った鳴き声を上げながら、その足で地面を蹴った。

急激な加速、そして人間には到底出せない速度。それらがドスファ

ングの身体を一回り大きく見せる。しかし、マキリにとっては慣れ親しんだものだ。先ほどは取れなかった横に避ける選択肢を取り、難なく突進を回避する。

ドスファンゴはポポほどの巨体は持たないが、それを補って余りあるほどの速度がある、そもそも、速度がある方がハンターにとっては厄介だ。だからこそ、油断はできない。

しかし、油断しないようにしようとするほど、マキリの身体は硬くなる。それをマキリは経験としてわかっていた。

だからこそ、時間がない今と言う状況においては、敢えて、心の緊張を解く。

マキリは走り出しながら、大剣を構える。自分の身体から見て右下に付けて、振り上げる予備動作を開始する。

ドスファンゴは突進をした後、その体を止める時間と次の突進を始める時間の間に若干のインターバルがある。しかし、そこでドスファンゴが方向転換する際、その大きな牙に巻き込まれて大怪我をすることも珍しくない。初心者ハンターが良く陥りやすい罠だ。

だから、普段のマキリはそこで攻撃はしない。ではどこで攻撃をするのかと言えば、ドスファンゴが疲れ果てるまで粘るのだ。同じ動作が何度も続けば、疲労は溜まってくる。そこを狙うのがマキリのセオリーだった。これは間違いなく臆病者の戦い方だ。

だが、今はそんなことをやっている余裕はない。
「うらあー」

マキリはドスファンゴが突進を終えたインターバルに攻撃を仕掛ける。右下から振り上げられた大剣は、ドスファンゴが方向転換しようとしている瞬間に合致して、大きな衝撃をその身に与えた。

ドスファンゴは小さくうめき声をあげながら、しかしマキリから目を離さず、その目には敵への殺意が宿っていた。ドスファンゴは小さく、突進ともいえない突進をする。助走が少なく、単なる加速のみによる攻撃だ。人間の攻撃で例えれば、振りかぶらずにパンチを繰り出すようなもの。それでもドスファンゴの身体は人間に比べて巨体であり、その攻撃は間違いなく脅威だ。当然、それは避けるべきものだ。

実際、マキリにはその余裕があった。

だが、一人と一頭の周囲には骨と骨がぶつかるような鈍く、空っぽい音が響いた。

マキリは大剣の腹を使って突進を受け止めたのだ。間髪入れず、その顎をブーツで蹴り上げる。

そんなもの、ドスファンゴにしてみればなんのことはない。所詮は人間の体一つで繰り出された一撃だ。いくら顎は生物の急所であるとはいえ、若干体勢を崩すだけですぐに立て直すことが出来る。

しかし、マキリが欲しかったのはその若干の隙だった。

即座に腰から剥ぎ取りナイフを抜き放ち、目の前の眼へと突き立てる。

『ヴオオオオ!!?』

ドスファンゴの悲痛な鳴き声が響く。目の水晶体が破壊され、ドスファンゴはそこらじゅうをのたうち回る。マキリは剥ぎ取りナイフをすぐに引き抜き、腰に収める。即座に距離を取り、大剣を構える。

目の前のドスファンゴを見る限り、問題なく視力を奪うことは出来たらしい。マキリは安堵して息を吐き出す。

ドスファンゴはしばらくの間その場で暴れ回っていたが、じきに落ち着きを取り戻し、残った片方の目に怒りを宿す。そして、大した威嚇行為もせず、一気に突進を繰り出した。既に相手をビビらせてやろう、だの、ここから追い出してやろう、だのとは考えていない。

殺意。ドスファンゴにあったのはそれだけだ。

しかし、マキリは殺意に染まったドスファンゴのことを、一切恐れてなどいなかった。

破壊した目の方向に少し身体をずらす。そして、大剣を構え、横をすり抜けていくドスファンゴの肌を叩き切った。

鮮血が飛び散り、ドスファンゴが重いうめき声をあげる。もちろん、この程度で死にはしない。先ほどのドスファンゴは頭部を叩き潰し、脳を破壊したからたった二回の攻撃で殺せたただけだ。モンスターの回復能力は即座に傷を回復するだろう。

しかし、目は別だ。

欠損した部位を再生できるほどの生命力は、既に生物の域を超えている。

人間が腕を失えば生きてこないように、モンスターも失ってしまえば回復できない。

片目を失ったドスファンゴは視力を完全に奪われ自暴自棄になることも出来ず、かといって相手との適切な距離感を掴むことも出来ない。

あとは、マキリが鬺り殺すだけで良い。

「ごめんね。出来るだけ早く終わらせるから」

大剣を構えて、マキリは穏やかに死刑を宣告した。

※

「じゃあオババ、行ってくるぜ」

ホイレンは、マキリが出てからすぐ準備に取り掛かった。

しかし、ホイレンもここまで急な狩りになるとは想定していなかったため、急遽道具屋で道具を調達し、その中でも必要なものと不必要なものに分けるのに思いのほか時間がかかってしまった。

結果、今は夜である。

昼から準備をしていたことを考えると、よほど念入りに準備をしたことが伺える。

オババはホイレンの格好を見ると、満足そうに頷いた。

「ふむ、行ってらっしゃい。無理をするんじゃないよ」

「ああ、オババもな。・・・というか、避難しねえの?」

ホイレンは最後の方を小声で、呟くようにオババの耳元で囁いた。すると、オババは頷く。

「あんなたちの狩りがもしも、明後日まで続くようなら避難するかね。薄情だと思ってくれても構わないよ」

「んなこと言わねえって。村長として当然だろ」

村に危険が迫ったとき、村人を率いて村を捨てるのは村長としてし

なくてはならない判断だ。それが出来なくては村長などやっていることはできない。

むしろ、いま避難していないことがホイレンには不思議だった。

実際、今はかなり危うい状況だ。雪山の大食いティガレックスに加え、大小さまざまなモンスターたちが麓に集結している。しかも、ハンターの数は二人で、そのうち一人はつい先日来たばかりの新参者。どこをどうしても、逃げない理由が見つからない。

「・・・というか、もう逃げた方が良いんじゃないか？一応ほら、マキリが抑えきれると決まったわけじゃねえんだし、あいつにだって限界ってもんがあるだろ」

「そりゃああるだろうね。ただ、もう少し待ってみようと思うんだよ」
オババはあくまでも落ち着いて、しかし訳の分からないことを言った。

ホイレンは首を傾げ、目を細めて、オババに先を促す。

オババは控えめに笑う。

「帰る場所がないと、あの子が可哀想だろう？」

ホイレンは少しの間瞬きを増やし、ため息を吐いた。ただし、その顔には笑みが浮かんでいる。

「あいつに甘いんだな。オババ」

「この村の子は全員私の子供みたいなもんさ」

オババはそう言って、静かに笑ったが、焚火に目を向けると、小さく、呟くように言った。

「本当は、これから大仕事を控えてるっていうハンターさんにこんなことを言うのはよくないと思うんだけどねえ」

弱弱しい、オババらしくもない言葉に、ホイレンは目を丸くする。

オババという存在は、泰然自若とし、どんな時でも周りに強い姿を見せる存在だと思っていたのだ。短い付き合いではあったが、村人の態度を見ているとそう思えた。

そのオババが、弱弱しく呟く。

「あの子を、よろしく頼むよ」

ホイレンは、オババを初めて、同じ土俵に立った人間だと思うこと

が出来た。

だから、笑いながら、ホイレンは返す。堂々と、オババの不安が吹き飛ぶように。

「任せとけ。きちんと無事に送り届けてやる」

ホイレンもオババも、結局のところ、マキリが心配であることは変わらなかった。

ホイレンはポポの荷車に乗って狩場へと赴いていく。その姿を見るオババの後姿は、どこか、神に祈りをささげる巫女のような厳かさがあったし、実際、彼女は祈りをささげていたのだろう。

そして、ホイレンもまた、体力を温存するため、目を閉じて休息をとる。

雪山は、まだ黒雲に覆われていた。

※

ドスギアノスの群れを、大剣で薙ぎ払う。

ギアノス十六体、ドスギアノス三体の群体は、既にドスギアノス一体とギアノス四体まで数を減らしていた。

周囲には最初に狩ったドスファンゴの死体二つ、その後殺したギアノスの群れ二十五体。そして、新たに殺したドスギアノス二体、ギアノスの死体十二体が転がっている。

マキリの身体にはギアノスの牙や爪に傷つけられ、幾つもの裂傷が刻まれていた。

二頭目のドスファンゴを狩ってから間髪入れず、ギアノスの群れに遭遇、それを殺したと思えば新たにドスギアノス三体との遭遇だった。マキリは疲労を回復する暇もなく、連戦を強いられた。

疲労はある。しかし、殺せないほどではなかった。

「っ!!」

最初こそ、臆病者が出てこれないよう、相手の気迫に押されな

うにと声を張り上げていたマキリだが、直にそれはただ単にエネルギーの無駄だと悟った。

大剣を振るう筋力はまだ残っているし、体力にも余力はある。そうではなくては困る。

殺す。それだけを考えていると、不思議と身体の痛みは気にならなかった。

身体の内からもっと動かせ、もっと殺せと自分を突き動かす声が聞こえる。

ギアノスたちがどんな動きをするのか、どんな戦術で殺せばいいのか、一瞬で判断が出来る。

要するに、弱い奴から殺して行くのだ。

強い奴を殺せば弱い奴は叶わないと思って逃げていく。それではいけない。

今のマキリの目的は殲滅なのだ。

全滅させなくてはならない。

マキリはひたすら斬りつけた。転んだギアノスが居れば大剣で頭を叩き潰し、噛み付こうとしてきたドスギアノスの頭には拳骨を叩き込む。そして、怯んだところに新たな刀傷をプレゼントする。それが瞬時に回復しても構わない。相手の動きは確実に鈍っていく。

じわりじわりと殺していく。それでいい。

それ以外を考えるのは面倒だ。

面倒くさいことは考えない。

例えば自分の身体から血が噴き出しても、止血すればどうにかなる。骨がむき出しになってもあとで肉を食ってればそのうち治る。大剣を握る皮がずり向けても死ぬわけじゃない。

やらなければならぬ。

だからやる。

気が付けば、最後のドスギアノスの頭を叩き潰したところだった。ふっと、自分の意識が浮かび上がる感覚がした。

血が自分の頬に掛かった感覚で、やっとマキリは周りの状況に目を向けることが出来た。

「……ひっつでえ匂い」

周囲はまさに死体の山と、血の海だった。

大部分はモンスターの血で、一部分は、きつと自分の血だろう。そう思えるほどに、マキリは身体から血を流していた。

ポーチから掌に乗る程度の回復薬を取り出して、口から摂取する。身体の代謝が一気に高まる感覚がして、少しだけ体温が高くなる。しかし、その甲斐あつてか、全身から流れる血は止まったように思える。

だが、流れでた血は補給しなければならぬ。

マキリは周囲を見渡して、一番状態の良い死体を探す。

しかし、周りには死体に集るハエが数えきれないほど存在していた。明日の朝になれば山ほどの蛆が湧くことになるだろう。マキリは深くため息を吐く。このあたりにある肉は食べそうにない。

ここは、一度ベースキャンプに戻るべきか。マキリがそう思ったのと同時、マキリは上から何かが羽ばたく音を聞いた。

「……ああ、来たか」

これは、あと一戦しなきゃいけないかな。

マキリは自分の身体が限界に近いことなど考えず、ただ、目の前に新たな敵が現れたことしか認識していなかった。

敵が現れたなら、殺す。この狩場に来てからの習慣は、今のマキリにとっての常識になっていた。故に、逃げるという選択肢はない。

果たして現れたのは、よくよく見なければ分からないような小さな目、そして竜とは思えないような歪なシルエットをした体、ぶよぶよの白い皮膚、グロテスクな赤い口。

ここまでそろえばわかる。マキリは前任者の防具を思い出しながら、目の前に降り立つ竜を見据えた。

前任者のお気に入り。

「フルフルか」

甲高い、耳をつんざくような、凶悪な叫びが鳴り響いた。

翼の付け根を切り裂かれたフルフルは、小さくうめき声を上げた。しかし、次の瞬間。

マキリの眼前には、赤い口が広がっていた。

「っ!!」

その赤い、剣山のような口に恐れを為す前に、マキリは動いた。

マキリは即座に大剣を自分と口の間に割り込ませると、フルフルの歯と大剣の刃とがぶつかり合った音がすると共に、腕に少くない衝撃が伝わる。

マキリはその衝撃に耐えようとはせず、利用し、地面を転がった。

「・・・やっぱり、やばい」

マキリは、乾いた唇をなめながら、目の前の敵を見据える。

フルフルは伸ばした首を元の位置に戻していた。そして、まるで犬が臭いを嗅ぐときのように首を周りに一回りさせる。敵の位置を探っているのだ。

そして、どうやらマキリの気配を察知したらしい、フルフルはマキリの方に顔を向ける。

その仕草はどうしても不気味さが先に立ち、一体何を考えているのか、次の瞬間どのような行動に出るのか、予想が出来ない。

そして、フルフルはマキリの方向に首を向けると、口をパクパクと開閉させた。

「・・・?」

マキリが、何か不気味な予感を感じて半歩、確かに後ずさった。

かぶ、という気の抜けた、何かに噛り付くような音がした。

マキリの視覚は、聴覚に比べてコンマ数秒遅れた。

気が付けば、鼻が触れてしまいそうなほどの距離に、フルフルの顔があった。

鳥肌が立つ。

顔が引き攣る。

我武者羅に後ろに飛び去り、息を整える。

一気に上がった心拍数に呼応しているのか、マキリの全身には汗が噴き出ていた。未だかつて相對したことがない脅威に対し、全身が絶

え間なく危険信号を発している。

「・・・読みにくい」

フルフルの最大の特徴は、その読みにくい攻撃だ。通常、飛竜などの生物は決まったモーションを持つ。

何故なら、生物には固有の、最も効率的な体の動きと言うものがあるからだ。

例えば、犬や猫は基本的に二足歩行はしない。それをするメリットがないからだ。

四足歩行の方が速度も出る。二足歩行が出来たところで人間のよに道具を使うことも出来ない。だから二足歩行はしない。

それは骨格や筋肉が四足歩行という生態に合致しているからでもある。非効率的な動きは往々にして淘汰され、洗練された動きをする個体だけが生存を許される。

だから、結果的に決まったモーションと言うものが生まれってくる。非力なハンターはそのモーションを熟知し、モンスターよりも一歩先を読んだ行動をしなくてはならない。

だが、フルフルは良くも悪くも普通ではない。

弛んだ皮は柔軟な動きを、収縮する筋肉は途轍もない速度の捕食を可能とする。

結果、何が起こるか。

この上なく読みにくく、油断が出来ない攻撃が完成する。

『変幻自在、フルフルの攻撃はまさにそれだ』

「・・・くそつたれ」

悪態をつく。

前任者がなぜこいつを好んでいたのか、理解に苦しむ。

マキリは再び大剣を構える。

先ほどと同じ攻撃をするのは下策だ。フルフルも馬鹿ではない。同じ動きを何度もされれば対策くらいはするだろう。しかし、待ちの姿勢をとるのも危険だ。先に言った通り、読みにくい動きを待ったところで大したカウンターをすることは出来ない。さらに、今は時間もない。

重要なのは、先手を取り続けること。

相手に対応の隙を与えないことだ。

マキリはフルフルの背後に回り込み、大剣を振り下ろす。

無論、フルフルは避けようとするが、避けようとしても避けられない位置に大剣は振り下ろされていった。浅い一撃がフルフルの肌を切り裂く。浅くてもいい。マキリに必要なのは手数だ。

フルフルの後ろに張り付き、ひたすら大剣を振り回す。

「ふっ！」

息と共に吐き出される大剣はフルフルの肌を切り裂き、赤い血が表面を流れていく。

だが、フルフルもやられるばかりではない。

尻尾を振り回し、後ろに居るマキリの頭を殴打しようとする。狙いが正確なのは、フルフルの主な感覚器官が目ではないからだろう。

だが、正確な分、マキリにとっては避けやすい。

紙一重で頭を下げ、尻尾の付け根に大剣を叩き込む。

防具の端を尻尾が撫でていく感覚が、マキリには懐かしい。ずいぶん昔は、こういった避け方をしていた。しかし郷愁に浸っている暇などない。マキリは全身に力を入れ、大剣を振るい続ける。

しかし、妙なことが起こった。

その時、フルフルの尻尾が、まるで吸盤のように膨らみ、地面に吸い付いたのだ。

いったい何をするつもりだ。

マキリは怪訝な顔をしてそれを見たが、すぐに顔を青褪めさせた。

『フルフルが尻尾を地面に着けたとき、それは体の中のエネルギーを外に放出する時だ』

記憶の中の声が、今更にして蘇る。

まずい、そう思った時には、マキリの身体はフルフルに近づきすぎている。

フルフルを見ることも、戦うことも初見だったマキリには見切れない。

ドスギアノス、ドスファンゴ、そういった、目に見える脅威とは違

が鬱陶しい。

マキリは早急に火傷のダメージを抑えようと、ポーチから回復薬を取り出そうとする。

ここまで離れば、あの電撃からは逃げられる。だから今のうちに回復を。

そう思ったマキリは、しかし、目の前のフルフルの挙動が先ほどとは違ってすることに気が付いた。

先ほどと同じように、身体を電気が走っている。それは良い。

先ほどよりもその勢いが弱い。それもいい。

だが、その口元が青白く光っているのは、一体どういうことだ？

天を仰ぐように上に口を向けたフルフルは、全身を光らせながら、その口から電気と空気のぶつかり合うバチバチという音を鳴らしている。

「ふざっけんな・・・！」

彼我の距離は目測で三メートル。直接的な攻撃であれば、避けるには十分な距離。

だが、電気の速さにとって、そんな距離などないに等しい。

マキリはポーチに入れていた手を引き抜いて、回避行動をとろうとする。

フルフルの口から電撃の弾が吐き出されたのは、それとほぼ同時だった。

※

「どうしたマキリ。これで終わりか？」

父親が、木刀を持ってマキリを見下ろしている。

場所は訓練場。久々に帰ってきた父は、帰ってくるなりマキリに稽古をつけた。

稽古と言っても、ハンターの武器を扱うわけではない。ただ、相手の動きに目をつけて行かせる訓練だ。

父親が打ち、マキリが受ける。隙あり、とマキリが思えば、マキリが攻める。

だが、マキリの攻めが父親に通ることはなかった。

「・・・まだ、やれる」

マキリは生来の負けず嫌いを発揮して、いつも粘っていた。自分の身体が動かなくなるまで、気を失うまで、骨が折れるまで、父親が終わりにする、と宣言しない限りは絶対に負けを認めたりはしない。

そのとき何歳だったのか、マキリは覚えていない。ただ、八歳の頃にはハンターの武器を持たせてもらっていたから、恐らく六歳前後だろう。

「おりゃああああああ!!!」

マキリは大声を上げながら、父親に向かって木刀を振るった。

父親の動きを真似て、身体に負担がかからないように、最短で、真つすぐに、最良の軌道を目指して。

けれど、マキリの技術がそこまで到達するにはまだ遠く、体格も違うようでは父親に一撃を与えることは出来なかった。

容易く木刀は打ち上げられ、父親の木刀がマキリの腹に突き刺さった。

「うっぐう」

思わず膝をつくマキリを見て、傍らに居たオツカイは呆れていた。

「おいギンジ。流石にやりすぎだろう。まだ子供だぞ」

「黙っている」

父親はオツカイの言葉に耳を貸そうとはせず、ただ自分の息子を見下ろしていた。

「どうしたマキリ。これで終わりか」

その声が、マキリは嫌いだった。

自分がこの程度で諦める等と毛ほども思っていないくせに。

マキリが、立てなくなるまで戦うことなど知っているくせに。

それでも馬鹿にするような口調で自分を詰る父親が、その時ばかりは嫌いだった。

「・・・終わりなわけ、ない」

オツカイの呆れたような、不憫なものを見るような目は気にならなかった。

ただ、目の前の敵から送られるその視線が。馬鹿にしたような。

悔ったような。

失望したような。

そして、どうでもいいものを見るような。

そんな視線が許せない。

子供には過ぎた自尊心が、その時のマキリを動かしていた。

目的はただ一つ、目の前の人間に認められたいがために。超えたいがために。知らしめたいがために。

マキリは木刀を握り、地面から膝を離す。

目の前を見据えて、ただ意識を相手に一撃入れること、それだけに集中する。

そうすると、見えてくるものがある。

どうすれば攻撃を掻い潜れるか。

どうすれば敵に攻撃を当てられるのか。

そして、どうすれば敵を殺せるのか。

「■■■■■■■■■■!!!」

どんな声を出したのか、自分でもわからない。

どんな行動をしたのかも、どんな攻撃を受けたのかも、どんな攻撃をしたのかも。

どうやって一撃を入れたのかも。

その時のマキリには、なにも分からなかった。

※

身体が熱い。そんな気がする。

特に、足が熱い。見てみると、ブーツが溶けていた。なぜだろう、そんな風に考えようとしても、なにやら頭に靄が掛かっていた。体が熱すぎて、どうにかなくなってしまったのだろうか。

だが、まあどうでもいい。

重要なのはきつと、目の前に居る獲物だけだ。

背中にある大剣に気が付いた。これなら、叩き潰せそうだ。

目の前の敵を見る。あれなら、殺せそうだ。

手を握って、開ける。動く。足を上げて、下す。動く。首を回す。

動く。腕を振る。動く。指を動かす、ナイフを抜く、しまう。大剣を

振る。しまう。

問題ない。出来る。

ならば、殺す。

青白い光が視界に入る。肉が焼けた匂いがする。どこからするの
だろう。気になったが、すぐに意識の外側に放り投げた。

殺す。

目の前の白い皮膚に、大剣が阻まれる。ぶよぶよの皮膚は衝撃を吸
収している。手応えがないのが良い証拠だ。

殺す。

ならば、頭を狙うか、それとも懐に入り込むか。しかし、懐に入り
込んでも大剣では思うように動けない可能性がある。

殺す。

頭しかないか。また、目玉付近を狙う。そうすれば少なからず相手
の脳にもダメージを与えられるだろう。

噛み付かれて肉が引きちぎられるかもしれないが、仕方がない。

今は、怪我を気にしている暇はないのだ。

ただ殺す。

殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。

殺すために殺す。殺しつくす。何もかもぶっ潰す。血みどろにし

て、死体を増やす。ひたすらに殺す。殺しつくす。

そのために考える。どうすれば相手に最も致命的なダメージを与
えられるか、それだけを考える。自分の怪我など知ったことではな

い。

目の前の白い何かは何度か青白い何かを放っている。肌がピリピ
リするような不思議な感覚がする。少しだけ身体が痺れる。けれど

痛みはない。だから問題ない。

身体が動けばそれでいい。

大剣を振りかぶり、振り下ろす。回転させ、翼に叩きつける。ぶよぶよの身体でも骨はあるらしく、目の前の何かは怯んだ様子を見せる。

なるほど、つまり、肉感が薄いところを狙えばいいわけだ。

そうとなれば話は早い。

相手の最も肉感の薄いところはどこか。

見渡して、一瞬で見抜く。

足だ。

このぶよぶよ、足の筋肉が薄い。もしかしたらいつも洞窟にくっついて狩りでもしているのだろうか、それとも待ち伏せ？それなら足の筋肉は必要ないし、翼があるのなら飛ぶのだろう。ますます足の筋肉は必要ない。

けれど、いま、地上で活動している以上は足がなければ移動もままならない。

つまり、足を殺せば殺せる。

殺せる。

即座に近づいて、足に大剣を叩きつける。骨が折れた音はしない、しかし、少しはダメージを与えた。ならばあとは重ねていく。攻撃さえ通れば勝てない道理はない。

上から、下から、横から、振り下ろし、打ち上げ、薙ぎ払う。身体が軽い。驚くほどによく動く。頭の片隅でそんなことを考えながらも動きは止めない。

血が飛び散る。相手の血だろうか。それとも自分の血？

骨が折れる音がする。これもどちらか分からない。

朦朧とする意識の中で、ただ敵への殺意だけが明瞭だった。

目の前のぶよぶよが倒れる。チャンスだ。

ここで、頭をかち割れば殺せる。千載一遇だ。殺さなければ、殺せば死ぬのだ。ならば殺す。

自分の中で論理を確認しながら、大剣を振り下ろす。

ガツンと、相手の骨に大剣が当たる感触がした。思わず笑みが零れる。これだ。この感触だ。これが殺せる感触だ。

大剣を大きく振り回し、余りある破壊力と共に、大剣と地面で白い頭を挟み込む。無論、今度もガツン、という感覚がする。それも、先ほどよりも強く。

これで良い、あと少しだ。

そう思い、新たなモーションへと移る。今度も先ほどと同じように身体ごと回転させる。大剣を振り回し、風切り音と共に振り下ろす。

ガツンと言う音と、バキン、という何かが折れる音がした。

これだ。

これが出れば、あと一撃だ。

白いののは起き上がりつつあるが、関係ない。あと一撃、たった一撃見舞ってやればそれで終わりだ。

と思ったが、白いののは口から青白い光をバチバチと放っていた。まるで何かをため込んでいるようだ。必殺技でも出すのだろうか。知らず知らずのうちに笑みが浮かぶ。このままいけば、先にぶつかるのは自分の大剣だ。白いののは行動は無駄だ。

大剣は音をさせ、ガツン、という音と共に停止した。そして、首を傾げる。

ガツン？ 脳を殺した音じゃない。

音の源泉を見てみれば、そこにあったのは翼だった。

翼が、自分の大剣を受け止めているのだ。その翼はどうやら今の一撃で折れたようだった。最後の一撃だから、と気合を入れていたのが良かったのだろうか。

そんなことを考えていると、目の前の口が青白い光を更に増幅していた。今にも青白い塊となって、目の前に、自分に、放たれそうだ。

これは流石に死ぬかもしれない。

見るからに熱そうだし、見るからに痺れそうだ。これを食らったらただじゃすまない。バチバチと言う音が、どこか現実離れたものに聞こえる。さながら小鳥のさえずりのようでもあり、川のせせらぎのようでもある。

ああ、綺麗だな。

青白い塊は、時折黄色の火花を散らせている。さながら金色の宝玉だった。

自分の命を奪うかもしれないその光に、しばし魅入る。その時間は一瞬のようにも、数秒のようにも感じられた。極限まで引き伸ばされた時間の中で、その黄金を見つめる。

良いかもしれない。

これに殺されるのなら、それでいいかもしれない。

殺し殺され殺す殺され殺して殺して殺して殺して殺して殺される。それで終わりちゃんちゃん終了お疲れ様だ。光は収束し、一つの大きな球となる。近づくだけで感じる熱の奔流。

これは、死ぬな。

そう思えば、ふっと頭の奥が冷えていく。

そういえば、この白いのの名前はフルフルだった。青白いのは電撃か。さつきから焦げた匂いがあるのは自分の肉だな。骨も何本か折れてるのかも。気が付けば満身創痍だ。回復薬を飲むのも忘れていた。僕が戦っていたのはハンターだからだ。

でも、ほかに何かあった気がする。

なんだっけ。

電撃の塊は程なく放たれる。けれど、その動きは途轍もなくゆつくりと見えて、正直なところどうでもよかった。

僕は何のために戦ってるんだっけ。

『あんたは毎回毎回無理をするね、気を付けなよ』

道具屋のお姉さんの声がする。確かアイさんと言ったかな。オツカイと仲が悪かった。でも違う。

『はっはっは！毎回毎回ぼろ雑巾見てえだな！ハンターならもつと楽勝に勝て！な！』

大工のウタリが笑っている。毎回毎回傷だらけの僕を見て笑うやつだ。でも傷だらけの僕を見れば薬草をくれた。

『お前の防具を直すのは誰だと思っている』

いつも嫌味を言うのはオツカイだった。けれど、防具なしで行こう

とすればすぐに怒った。わからない人だ。

『あんたは面白いくらいに怪我するねえ。キノが心配するのもわかるわ』

ギルドで働いていたカリンは笑いながら僕の頭を叩いた。面白いと言われたのはうれしかったけれど、叩かれた頭は痛かった。

『マキリほどの無鉄砲は見たことないねえ』

オババはふわふわと笑っていた。僕を止めないでいてくれたことはうれしかったけれど、何故か、オババと話す狩場に行き辛くなった。

けれど、気にしたことなんてなかった。

どうでもよかったから。

他のことに比べたら、どうでもよかった。

誰かのために戦っていた。きっと、何かの為じゃない。誰かのために。

『無理はしないこと、お願いね?』

その言葉を言ったのは誰かだった。

けれど、違う。

お前じゃない。

お前が言った言葉はわかる。自分に心配をかけさせないでほしい。そう言っていた。

けれど、心配させたくないのは、心配させたいのは、本当に心配してほしいのは、誰だ。

『大丈夫?』

母を埋葬した日、隣で静かに、真剣に、潤んだ瞳で自分を見つめる人を思い出す。

片時も手を離さないでいてくれた人を思い出す。

すとなん、と心のうちに入り込む。

そう、君だ。

瞬間、意識に光が入る。靄が掛かっていた視界が晴れ渡る。痛みは不思議と感じない。空の青と土の黒、湖の青と雪の白、フルフルの白と口の赤。

マキリには、全てが一挙に理解できる。

目の前にある状況がいかに絶望的かということも。

「っ!!!」

大剣を盾にするか？いや、間に合わない。じゃあ回避？この距離で？無理だ。じゃあどうする。どうすればいい？防具はほとんど焼かれて残っていない。ほぼ無防備な自分の身体に電撃が当たれば、最高に運が良くて気絶する。そして、気絶すればそれすなわち死ぬことと同義。

どうするどうするどうするどうするどうすればいい？

考えて、考えて考えて考えて、

そして、一つ思いついた。

『フルフルは嗅覚で周りを探っているという説がある。そして、恐らくそれは本当だ。眼が退化しているため閃光玉は効かないが、その代わりになるものがある。それはー』

即座に、ポーチの中から茶色の玉を取り出し、相手の鼻先に叩きつける。

普段から強いモンスターに会った時のために用意しているもの。

今回は置いてこようかと思って、それでもいざというときのために持ってきておいたもの。

肥し玉だ。

一気に、凄まじい勢いで耐えがたい悪臭が垂れ流される。鼻から流れ込むその臭いは、いや応なく吐き気を催させる。痛みを和らげたい興奮が一気に引いて行き、それと反比例して火傷裂傷打撲骨折その他もろもろの痛みが押し寄せる。鳥肌が立つ暇もない。思わぬ激痛に身体が呻く。

しかし、目の前のフルフルもまた、その匂いに悶え苦しんでいた。溜め込んでいた電撃を霧散させ、周囲を見渡している。自分の敵がどこに行ったのかもわからないらしい。

これはチャンスだ。今こそ、無防備な頭に一撃を加えなければ。

マキリは一步踏み出した。けれど、実際には一步も踏み出していなかった。

「・・・えっ！」

ぶわつと、鳥肌が立つ。痛みも何もかもが一瞬遠い彼方に飛んでいき、頬が引き攣る。

身体が、ピクリとも動かない。疲労ではない。疲労はあるが、動けないほどではない。この程度の満身創痍でも戦える。それでも身体が動かないなら、答えは一つしかない。

ここにきて、臆病者が出た。

「くそつたれが・・・！」

あと少しだ。あと少しのはずなんだ。

理由はわかる。今のフルフルには周りが見えていない。言ってみれば両目が潰された状態だ。そんな状態になれば四方八方に暴れまわり、敵を近づけないようにするに決まっている。近づくのは途轍もなく危険だ。予測の出来ない動きをされたならこつちに出来ることは何もない。

けれど、あと一撃なんだ。

今がチャンスなんだ。怯んでるんだ。今しかない。

しかし、いくら体に入力を入れても身体は前に進まない。それどころか、後ずさりしようとしているようにも思える。危険だというのだろう。周りが見えていないフルフルはブレスを、電撃をまき散らす。それにあたってしまえば一巻の終わりだと言っているのだろう。

マキリは既に悟っていた。この状態になった自分は動けない。どんなに言い訳をしても、一度出てきた臆病者を殺すことは出来ない。臆病者は自分なのだから。

けれど、マキリは思う。

この状態で、この満身創痍の状態のフルフルを放置することは出来ない。

傷を負ったモンスターほど怖いものはない。周囲に当たり散らすこともあるし、自分を傷つけた人間に対して憎悪を抱くこともあるかもしれない。それが原因で、人を食うモンスターになってしまうことだってあり得る。

それは最悪だ。

ハンターがクエストに失敗してはいけないのは、そういう理由もある。

だからここでマキリはハンターとして、目の前の敵を殺さなければならぬ。

殺す、殺す、殺す殺す殺す殺す。

ただひたすら、それだけを考えて、思考を尖らせていく。感情をそぎ落とし、ひたすらにひたすらに、鋭く、殺すことだけを考える。

『大丈夫？』

霧が掛かりかけた思考が、クリアになった。

「・・・大丈夫だから、もう一度！」

もう一度、殺すことだけを

『大丈夫？』

心配した顔が頭を過る。

思考が途切れる。

どんなに振り払おうとしても振り払えない。

というよりは、振り払おうという気になれない。

惚れた弱み？アホか。こんな時に色惚けてる場合か。しかし、出来ないものは出来ない。マキリは自分の頭に嫌気がさしてくる。

やがて、フルフルは電撃を放ち始めた。無差別にそこら中に、マキリはその回避を始める。そして、チャンス逃したことを確信した。

まだ頭蓋骨は割れているはずだ。というか、流石にモンスターでもそこまでの回復能力はない。骨を折れば、まあ、寝ない限りは問題ない。むしろ、寝たならどうにかなりそうなところが怖いのだが。

「・・・どうする」

自分で言っておいて、マキリはわかっていた。

自分では、もうこれ以上の狩りは出来ない。

ここは一時撤退し、気持ち落ち着いてから殺した方が良い。が、そこで臆病者が出ないとも限らないのが痛い。

しかし、マキリの状態は満身創痍だ。戦えないわけではないが、あと一撃でも電撃を食らえば高確率で死ぬ。

「・・・撤退、か」

第12話

マキリは微睡の中にいた。

頭の中で再現されるのはかつての日々だ。自分が常に前を向いていた日々。輝かしい成長の日々。心も体も常に走り続けていた日々のこと。

狩りで大怪我負った影響なのか、マキリはその光景を、まるで絵本でも見るような気分で眺めていた。

父との稽古。母との食事。村人との会話。トマリとの遊び。

それらすべてがマキリにとっては過去の産物だ。失われたというには大袈裟過ぎるが、既に終わってしまった過去のことではある。

その中の一ページに、マキリは触れた。

母が死んだ時の事。

大した感慨もわかかなかったあの時のこと。全てが変わるきっかけになったあの日のこと。

「大丈夫？」

あの声を聞いたとき、マキリはただ「大丈夫だ」と、そう返した。

そう返すしかなかった。大丈夫だと思っていたから。強がりでも何でもなく、そうだと思っていたから。

でも、本当は大丈夫でも何でもなかったのかもしれない。

マキリは気付かなかったのだから。

その時のトマリの顔は確かに心配していたけれど、それ以上に、何かを恐れていたのに。

※

「おい寝坊助。起きろ」

声と共に与えられた衝撃で、マキリは目を覚ます。

ベースキャンプの硬い寝台と薄汚れた天井が目に入る。タイガの中にあるベースキャンプはどこことなく安らぎを覚えるものの、身体の痛みがそんな安らぎを完膚なきまでに叩きのめす。

まるで、身体の内側からすべての皮膚を針で刺されているような痛みだ。起き上がろうとする気力すらそぎ落とされる。

朝霧の靄が掛かった思考で考える。なぜこんなにも痛いのか。その答えはすぐに出た。昨日行った戦闘のせいだ。

そして、目の前のホイレンが居る理由も、すぐに思い出す。

「・・・おはよう。ホイレン。準備はもういいの？」

「当り前だ。こんなに時間かけて準備が出来てないようならハンターの称号返上しなくちゃならねえ」

確かに、昼過ぎから準備をして、翌日の朝に準備が整っていないというのは、聊か優柔不断が過ぎる。

「まあそうかもね」

マキリは痛みを抑えながら上体を起こす。動かそうとするたびに身体の節々が危険信号を送っているが、そんなものよりも目の前のホイレンを見る。レウスシリーズを纏っているところは変わらないが、大剣は白い、先ほどまで見ていたフルフルの色合いをした大剣だった。恐らく轟竜に合わせて属性を変えたのだろう。そういうハンターも居る。

「ホイレン。その装備は？」

「名前はフル・フルミナント。刀身に雷を纏わせて攻撃するつー武器だ。まあ、わかるとは思うがお前が狩ったフルフルの装備だ」

ホイレンの言葉に、マキリは目を丸くする。

しかし、ホイレンは呆れたように肩を竦め、エリアーの方を見て少しだけ笑った。

「見てきたぜ。派手にやったじゃねえか。ま、その代償も大きかった見てえだけだな」

マキリは自分の身体を見渡して、確かに、と納得する。

マキリの身体は、ほとんどの場所を包帯で覆われている。しかも、包帯のほとんどにはどす黒い血が滲んでいる。浅い傷では決してそうはならない。さらに、その傍らに、もはや胸と腰の部分しか残っていないようなマフモフが置いてあるのだ。どれだけマキリの身体が負担を負ったのかは想像に難くない。

マキリの身体は、凄まじいほどの怪我を負ったのだ。

それこそ、生きているのが奇跡と言えるくらいに。

「正直、あそこまでやるとは思ってたなかつたぜ。精々ドスギアノス一体で終わると思ってた」

「・・・僕も、そう思ってたんだけどね」

いつの間にか、収まりがつかなくなっていた。

頭の奥に靄がかかるような感覚と、何もかもが研ぎ澄まされた感覚が並立した不可思議な感覚。それがマキリの狩猟を助け、自己防衛本能を抑えたのだろう。気が付けば血みどろで、ベースキャンプに戻っていた。

冷静なように冷静ではなかった。マキリは自分でそう思う。

「そういや、フルフル初狩猟だな。お疲れさん」

「え？あ、ああ、そっか。そうだね」

「あ？なんだその「僕今まで忘れてました」みたいな顔」

「いや、忘れてたわけじゃないんだけど、ボーっとしてて」

フルフルと戦った記憶は確かにマキリの中にあるのだが、あれを自分で狩ったと言っているのか、マキリには疑問だった。言って仕舞えば半自動的に、何も考えずに狩りに没頭した結果がアレだ。どうにも自分で狩ったという感覚がない。終わりのフルフルが一人で倒れてしまったわけだし。

だが、今考えてみれば、頭蓋骨を割ったのだからそのままフルフルが息絶えても違和感はない。むしろ砕けた骨が血流にのればいくらモンスターと言えど全身をずたずたに切り裂かれて死ぬだろう。まあ、頭蓋骨を割られてもしばらく暴れ回ったモンスターの生命力はやはり凄まじいと言わざるを得ないのだが。

「・・・ま、お前が無茶な狩りしたってのは体見りやわかる。とりあえず、家帰れ」

「・・・え？」

「え？じゃねえよ」

何を言われているのかわからない、とでも言いたげなマキリの顔に、ホイレンは拳を押し付ける。マキリはあっさりと上体をベッドに

戻してしまおう。せつかく痛みを抑えて起き上がったのに、そう文句を言おうと上体を起こす。

しかし、その行為が出来なかった。身体が動かないのだ。臆病者の時とは違う。純粹な疲労によるもの。

「起き上がれねえだろ。そんなに疲れてるのに家帰らねえとか、アホのすることだ」

マキリはなんとか上体を起こそうとするが、それは叶わない。身体を貫く針のような痛みも、じわじわ響くような鈍痛も、マキリを打ちのめそうとはするが助けようとはしてくれない。

しかし、その言葉を受け入れる気にはなれなかった。

「・・・大丈夫だよ。あと少し寝れば治る」

「いや、無理だろ。お前の身体、怪我の見本市みたいなことになってんぞ。あと少し寝て治ったらお前のことを人間とは認めねえ」

ホイレンは頭を掻きながら言うが、マキリは眉間に皺をよせていた。

「でも、まだクエストは終わってないし」

「・・・お前、疲れてないときに疲れてるって言ったり疲れてるときに疲れてないって言うな。天邪鬼か？」

「・・・違うって」

そういえば、ホイレンと最初に、落ち着いて話をした時もこんなやり取りをしたような気がする。ほんの数日前なのに随分と昔のように感じられた。

「僕はまだクエストを終えてない。それが終わるまでは」

「自惚れんな」

いつになく厳しい言葉に、マキリは目を見開く。ホイレンの表情には遊びの要素は全くなく、ただ事実だけを伝えようとする無機質がある。知らず知らず、マキリの背筋は伸びた。

「お前はよくやった。十五歳の餓鬼に出来る仕事の範囲を完全に超えてるよ。正直、臆病者云々を抜きにしても才能の塊なんて言葉でも説明できねえ。単純に、お前は強い」

たぶん、これからも強くなるだろう。ホイレンの言葉に、マキリは

背中がむず痒くなる。G級ハンターがマキリのことを認めているのだ。それを考えれば無理からぬ話だろう。

だが、ホイレンが言いたいことは、むしろそのあとにある。

「けどな、それだけの怪我を負った奴が狩場に出てみる。一瞬でお陀仏だ。それくらいお前だつてわかつてるだろう」

「・・・っ」

声も出ない。

実際、マキリだつて思っていたはずではないか。

生きていることが奇跡と思えるほどの怪我を負っていると。

しかし、マキリはまだ納得した様子を見せない。唇を引き結び、己の言葉に説得力がないことを自覚してもなお、この場に留まることを諦めていない。

「・・・お前、なんでここに残りたがる？臆病者じゃなくなったと思つたら死にたがりになったか？」

「・・・臆病者が治つたわけでもないし、死にたがりになったわけでもない。多分、そういう問題じゃないんだ」

自分がここにおいても役立たずだということとはわかる。それこそ嫌と言うほど。普段だつたら、何のためらいもなく家に帰つてぐっすりと休むだろう。こんな硬い寝台ではなく、柔らかい布団にくるまれて、穏やかな喜びに身をゆだねる。

だが、マキリはどうしても帰りたくなかった。

本当の理由は分からない。ただ予感、あるいは、直感があるのだ。

このまま村に戻るのは不味い。何が不味いのかは分からないが、取り返しがつかないことになるような予感だ。

何の説得力もない言葉であることはマキリが一番よくわかつている。自分でも信用し切れていない言葉をどうして他人に信じさせることが出来るだろう。

ホイレンは俯いたマキリを見て、ため息を吐く。

「・・・ま、なんとなく理由はわかる。

「えっ？」

マキリはホイレンを見上げる。ホイレンは先ほどまでの真剣な表

情を崩し、いつもの軽薄とも呼べるような表情を浮かべた。軽く笑い、肩を竦める。

「今日まで、お前を結構な頻度で見してきた。観察して、まあ大体の行動原理というか、性格は掴んだ」

ホイレンはマキリの額に指をあててコツコツと叩く。その行動にどんな意味があったのかは分からないが、ホイレンの表情は出来の悪い弟を見るような、どうしようもない奴を見るものだった。

「お前の行動原理の九割は、嬢ちゃんて出来てる。お前が感情的になることがあつたら、そいつは嬢ちゃんが関係してる。だから自分で自分のことがわかんねえときは、てめえの中にいる嬢ちゃんに聞け」

きつと、納得する答えが返ってくる。ホイレンは首を掻いた。

首を傾げるマキリをよそに、立ち上がり、ベースキャンプの外に向けて歩き出す。

「俺はこれから轟竜を狩ってくる。間違っても狩場に出るな。あと、お前は一度、嬢ちゃんと話した方が良い」

そういつたきり振り返ることもせず、ホイレンはベースキャンプを出て行った。本当に、轟竜を狩りに向かったのだろうか。

「・・・」

残されたマキリは、しばしそこでキャンプの天井を見つめていた。自分の中に居るトマリ。とはどういうことだろう。本物のトマリとは違うのだろうか。

ホイレンからの、恐らくは初めてのアドバイスらしいアドバイス。

しかし、そのアドバイスは随分抽象的だった。詩的と言い換えてもいい。

「・・・でも、帰るか」

考えれば考えるほど、分からない。

一つだけ分かったことがあるとすれば『村に帰る』というホイレンが提示した選択肢は、間違いなく間違っていないということだけだ。いや、間違っていないのではなく、むしろ正しい。

このままここにいっても何の役にも立たない。ならば、村に帰ってゆると休んだ方が身体にもいいだろう。

だが、その正しいはずの言葉と裏腹に、マキリの心は沈んでいく。「・・・もしかして、怪我し過ぎてトマリに呆れられるから、沈んでるのかなあ」

だとしたら、いい加減マキリは自分の女々しさに嫌気がさすのだが。

そのどころ、どうなのでしようか。

自分に問いかけてみたものの、大した答えは返ってこない。

マキリは自分の沈んだ気持ちと、どうにも拭えない不安感を抱えながら、マキリは童車に乗り込んだ。ただし、アイルーたちの手を借って。

どこまで行っても締まらない。ため息を吐きながら、マキリは村に向かって出発した。

※

雪山の山頂は暗闇に覆われていた。

そこに吹き荒れる圧倒的な殺気は、何人たりとも近づくことを許さない。事実、そこには有象無象の生物の姿すらない。あるのはただ一つ、理解不能な何かだけ。

黒く、冷たい領域で、一体の何かは体から黒い軌跡を吐き出し続ける。

黒い身体に長い尻尾。四本足に二枚の翼。

体躯に比べて圧倒的に巨大な翼は、その並外れた飛行能力を表している。

『■■■■■■■■■■ツ!!!』

禍々しく、忌々しい、何かを威嚇するようなその咆哮が、雪山に轟いた。

第13話

雪の上を進む竜車の中、マキリはぐったりと、携帯食料を食べ、回復薬を飲みを繰り返す。

回復薬は怪我を治すアイテムだ。人間の代謝能力を一時的に高めて傷を治す。人間の回復力を当てにしているので効き目には個人差があるものの、モンスターとの戦いでは重宝する。

回復薬の効き目は体の状態によつて大きく左右される。

何故なら代謝能力を高めるということは体の中にエネルギーを高速で使っているということ。つまりは身体の中にきちんとたんぱく質やらの蓄えがなければならぬということである。つまり効果は身体の体調にも作用される。例を上げれば極限に飢えた状態で回復薬を飲んでもその効力は微々たるものだろう。

回復薬を飲むのに最適な状態と言うのは、身体にエネルギーが蓄えられたとき、すなわち食事をきちんと消化して自分の身体にエネルギーとして溜め込んだ時。

これらから導き出される結論は次の通り。

『食事をして少し経ってから回復薬を飲むというサイクルが怪我の治療には最も役立つ』

もちろん応急処置としての話であり、本来ならゆっくりと時間をかけて治す方が身体への負担も少なく済む。

ただ、マキリはそのゆっくりと時間をかけて治すという方法をとる気にならない。

俗な理由だ。

立派な、例えばいつでも狩場に戻れるようにしておこう、なんて殊勝な心掛けはマキリにはない。狩りは終えた。ならば少しは休ませてもらわなければ、出来るならずっと休んでいたい。臆病者のマキリの心情としてはそれが大多数を占めている。

では、なぜ早く傷を治すのか。

ひとえに痛いからである。

「この火傷、治るかなあ」

特に電撃によってつけられた腕の火傷や足の火傷。幸い内側まで焼かれてはいないが、表面は大層グロテスクに焼かれていた。間違はなく跡が残るだろう。まあ跡が残る分には構わない。女子ではないし、むしろ男の勲章として受け取ることが出来る。

ただ痛い。

すごく痛い。

物凄く痛い。

空気が触れるだけでも痛みが走り、どこかにぶつけようものなら勝手に涙が溢れてくる。痛いとかそういう次元を超えて身体が危険信号を発している感覚。

全身に満遍なくひどいけがを負っているマキリだったが、その火傷だけは早急に直してしまいたかった。

マキリはひたすら回復薬を飲み続ける。その姿は勝利者でありながら敗残者のようであった。

そんなマキリを心配する視線が一つ。

「ご主人。大丈夫ですかにや?」

「大丈夫だよコジロウ。・・・というか、なんで御者なんてやってるの?」

「にやー、ほかのアイルーたちの手が空いてなかったらしいにや」

「・・・そりやまた災難だったね」

「ほかにやるアイルーが居ないんだからしかたないにや」

どこかで聞いた言い回しに、頬を緩める。人間、役割を与えられるとそれを果たそうとするものらしい。目の前にいるのは人間ではないが。

と、そこで一昨日の嵐を思い出す。

「一昨日農場は大丈夫だったの?コジロウ」

「問題ないにや。布で覆ってどうにか乗り切ったにや」

「流石。あんなに急激に天候が変わったのによく対処できたね」

「ボクもあの処置は英断だったと思うにや。でも、ちよつと風に飛ばされそうになったから怖かったにや」

「はは、そつか。確かにあの風は凄かったからね」

マキリはふう、とため息を吐く。

農場の様子を聞けば、その傍らにある村にも意識を向けざるを得ない。

マキリの心の中にはいまだに村に戻ることを許さない心情がある。ある理由に心当たりはない。されど目を逸らすには大きすぎる。

「・・・コジロウ。村で何か、変わったことはない？」

「ないはずにや。あ、でも一応避難する用意はしてるって話していた気がするにや」

「そっか」

当り前のことだ。流石に生態系に異常が発生しているところに長く留まるのは無謀。早めに避難した方が良い。今回はいくら何でも異常事態が過ぎる。被害が出てからでは遅い。

だから、今回の決定に不満などないし、抗議などするはずもない。村に異常はない。それならば良い。

けれど、やはり、自分の力不足を実感してしまう。

「・・・ご主人？どうかしたにや？」

「・・・なんでもないよ。コジロウ」

そう、昔から思っていたことを、再確認しただけだ。フルフルを狩れたのも、まぐれに近い。

先に気を失っていけば、足が折れていけば、武器が握れなくなっていれば、いずれか一つがあれば容易に命を落としていた。

薄氷の上の勝利。それ以外に言葉はない。

実力が足りないがために、マキリは己が身を傷つけたのだ。

「・・・ご主人？怪我、そんなに痛いのかにや？」

「え？なにが？」

「唇が切れてるにや」

マキリは驚いて、自分の唇を触る。

そして、やっと自分が唇を噛んでいたことに気が付く。しかも、皮膚が破けるほどに強く。

「・・・またか」

ホイレンと轟竜に遭遇した時も、こんなことがあった気がする。

我ながら、どうにも諦めが悪い。

呆れて声も出ない。そんなマキリの様子に気付いたのか、コジロウはあまりその件に関して触れようとしない。

しばらくの間、携帯食料を食べてから回復薬を飲むというサイクルを再び続けているうちに、村の輪郭が見えてくる。

幾つか見えている竜車は避難のためのものだろう。それ以外のものは何も変わらずそこにあった。

何も問題はない。

しかし、それを確認しても、マキリの心は晴れなかった。

※

「・・・随分、無茶をしたみたいだねえ」

「面目ない」

「いいや、それだけ頑張ってくれたってことさ。感謝はしても責めたりするのは筋違いだねえ」

オババはそう言っつて、包帯まみれのマキリに目を向ける。

雪山方面から村に帰れば、必然的に一番出入り口に近い場所に居るオババと話す。だからマキリが無事に帰ってくる時も、無事ではないときも一番最初に見る顔はオババの顔だ。

だからなのか、オババの顔を見るとマキリの心の中には安堵が満ちる。

「・・・ふむ、マキリ、怪我を隠せるものは持つてるかい？」

オババは考え込むように言う。マキリは首を傾げ、すぐに頷いた。

「うん。一応マフモフ以外の厚着はあるけど・・・痛いんだよね」

包帯と服がすれる感覚ですら、今のマキリには拷問に等しい。回復薬で少しは楽になったとはいえ、全快には程遠かった。

しかし、オババはにっこりと笑う。

「着た方が良いねえ」

「・・・え？」

「着た方が良いよ」

「え、でも痛いんだけど」

「着なさい」

「はい」

流石に三回も言われれば、マキリも諦めがつく。いつになく強気なオババの姿は迫力満点。マキリも既に十五歳となるが、まだまだ祖母のような存在であるオババには勝てない。

マキリは大人しく竜車から上着を取り出す。単純に羽織る程度のもの。しかし寒冷地で使う以上、無駄な露出など一間としてない。

着替え終えればオババは満足そうに頷く。

「うん、それじゃあ家に帰ってゆっくり休むといい。とりあえずホイレンさんが明日中に帰ってきたら、避難は取りやめる手はずになるからねえ」

オババはゆったりとした口調でそう言うと、やはり焚火の傍で鼻提灯を付け始めた。

「・・・よし、帰るか」

もはや何も言うまい。

マキリは身体を襲う激痛に耐えながら、道を歩く。

村の中は一見していつもと変わることはない。いつも通りにそれぞれの店があり、数少ない村人が往来し、時折旅人らしき影を見ることが出来る。どことなく活気がないのは仕方のないことだ。

と、辺りを見渡していると、道具屋の店先に立っていたアイと目が合った。アイはにっとマキリに笑いながら手招きをした。マキリが近づくと、何度か首を縦に振った。

「帰ってきたのかい。よかったよかった」

「心配かけた？」

「いんや、特別心配はしてないよ」

「・・・そう」

「なんで落ち込むかね。信用されてんだよ。喜びな」

「うん、そうなんだけど」

心配されていない、と言うことになる。マキリはどうしても出発前

の喝を思い出してしまふ。とはいっても、それはそれこれこれ、信用されていると思えば決して悪いことではない。

「ちやんと狩ってきたよ。まあ、全滅させることは全然出来てないけど」

「ああ、ま、生きて帰ってきただけでも恩の字さ。とりあえず帰ってきたってことだけでも伝えて来な。なんだかんだ言っただけで心配してた奴もいたからね」

「あ、そうなんだ」

そうとなると、やっぱりうれしい。でも、心配をかけていると思うと不甲斐なくもある。

「・・・あんだ、面倒だね」

「え、いまので分かったの？」

「顔に出やすいからね、あんだ」

マキリは自分の顔に触れて、どんな表情をしているのか確かめてみたが、自分の顔はそうそうわかるものではない。大人しく手を下ろす。

アイはその様子を微笑ましく見ていたが、思い出したように声を上げる。

「そういえば、あんだトマリに会ったかい？」

「?会ってないよ。なんでトマリ？」

「あんだの分の荷物も避難用のものに入れてあるのさ。それをやったのはトマリだからね。礼は言っときな」

マキリは目を丸くして、顔を綻ばせる。

「わかった、お礼言っておくよ」

顔は赤く、喜色満面。生まれたときより見てきたアイに分からぬはずもない。

「あんだやっぱりわかりやすいねえ」

アイが呆れたように言うど、マキリは耳を赤くして頭を掻いた。途轍もなく恥ずかしそうだが、満更でもなさそうなのはトマリの親切を知ったからだろう。

マキリは下手な咳ばらいで場を均す。

「ま、まあいいじゃない。とりあえず僕は行くよ」

「ああ、頑張りな」

アイの声を背中に受け、マキリは少しの足の不自由さと共に歩いて行く。その姿は浅くない傷を負ったことを存分に感じさせるものである。

無論、アイもそのことには気づく。そして、脳裏には一つの予感があつた。

悪い予感と、良い予感。

どちらに転がっても、アイにとっては構わない。

しかし、恐らくは悪い方向に向かうだろう。アイはため息交じりに考える。

「・・・ま、どうにかなるか」

アイは肩を竦めて考えるのを辞めた。

しかし、その言葉は存外投げやりではなかった。

※

加工屋の前を通り過ぎたとき、マキリはふと疑問に思う。

日中、加工屋の前にはオツカイが、そうでなければ妻のウイが立っている。接客をするためだ。

しかし、今日は誰も加工屋の前には居なかった。マキリは首を傾げる。

「あー！マキリ！」

その時、マキリの後ろに声を上げる童女が居た。

見てみれば、そこに居たのはオツカイの娘、クーだった。父親譲りの黒髪を引き継いだ活発な子だ。幼児に付き物である好奇心をその目に映し、かなりの身長差があるマキリを見上げている。

「ねえねえマキリ！それどうしたの！？その頭の奴！」

「頭の？！包帯のことかな」

「そう！それ！」

我が意を得たり、クーはその場で飛び跳ね、マキリの周りを跳ねま

わる。子供の無邪気さに触れ、マキリは思わず相好を崩す。

見ていると癒されるなあ。この子は。

自分がクーくらいの年頃、毎日のように棒切れを振るっていたことを思い出す。実に可愛げがない子供だった。

マキリは「狩りでやられちゃった」とお道化るように口にして、肩を竦める。

クーは何がそんなに面白いのか、きやつきやつきやと喜んだ。

「やつぱり！マキリでも怪我するんだ！そうなんだ！」

「・・・うん。怪我するよ？」

なんだか自分が怪我をしたことが格好悪いように思え、マキリの笑顔は徐々に引き曇る。クーの中での自分の評価が過大評価から妥当な評価に変わった感覚。悪くはないのだが、勿体ない。

が、傷つくほどのことでもない。すぐに気を取り直し、疑問に思ったことを聞く。

「クー。お父さんとお母さんは？」

「うー？お父さんとお母さんなら、なんか打ってる」

「打ってる？武器？」

「そう！武器！」

マキリは少し驚いた。

基本的に、武器を作る作業はオツカイが一人でやる。オツカイ一人で十分だからだ。

けれど、そこにウイが入るということは、一人では出来ない工程があるということ。マキリに武器の知識はないが、今までオツカイが作った武器の中でそんなものはなかった。と思う。

となると、当然気になる。

「・・・なに作ってるんだろう。クー、知ってる？」

「教えない！」

無邪気な笑顔で、クーは元気に言い放った。

マキリは若干呆気にとられる。

「・・・ってことはなに作ってるのか知ってるの？」

「マキリには教えるなって言われた！」

「え？なんで」

「なんでも！」

なぜ自分だけ。不満が口を尖らせる。

が、ピカピカ輝くクーの顔を見て、マキリはそれ以上聞き出すのを諦めた。

なにより、人が隠そうとしていることを暴くのは好きではない。隠し事は隠しておきたいから隠し事なのだ。

「そっか。じゃあ、クーは今何してるの？」

「アニノが追いかけてっこしようって言ったから追いかけてっこ！」

「・・・追いかけてっか」

アニノ、とは大工の家の息子。つまりはウタリの息子だ。この村では唯一のクーとの同年代。

となれば、必然的に良く遊ぶことになる。小さな村だ。同じ年代に子供が居ないなんてこともよくある。

その点、マキリもクーも、恵まれているというべきなのだろう。

「でも、追いかけてっこだったらこんなどころで話してて良いの？」

「見つかっても私の方が早いから大丈夫！」

「そ、そっか」

アニノの顔を思い浮かべる。

まあ、小さい頃は女子の方が身長が伸びるのは早いので仕方がないのだが、アニノには強く生きてほしい。クーにしつかりと侮られているアニノにマキリは陰ながらエールを送る。

「でも、油断しちやダメだよ。油断しているとすぐにやられるからね」

「えー、大丈夫だよ」

「いや、そうでもないから。ほれ、僕の怪我也それだし」

本当は油断などではなく単純な実力不足なのだが、それは黙っておいた。嘘も方便である。

クーは不満そうに眉根を寄せたが、すぐに元の笑顔に戻った。

「わかったー！じゃあねマキリ！」

「うん。頑張つて」

マキリが会話を打ち切ると、クーはあつという間に走り去ってい

く。子供は風の子、そんなフレーズが頭に浮かぶ。

しかし、とマキリは頭を搔く。

「僕とトマリ、遊ぶって言うよりは稽古だったなあ・・・」

遊ぶと言えば、訓練場で木の枝を振り回していた。間違っても追いかけてこんなでしなかつたし、トマリが一番喜んでいたのは調査実験だった。それもマキリはそこまで面白くなかったので頻度としては少なめだ。

なんだかトマリの幼少期の思い出を潰してしまったようで、マキリは少し申し訳なくなってきた。

「もしかして、それが今の態度に繋がってるのか・・・？」

だとすると、自業自得。因果応報。そんな言葉が頭に浮かぶ。

これ、どうやって逆転すればいいんだ。

マキリはしばらく頭を抱えていたが、溜息と共に吐き出す。

「・・・うん、なんとかなるでしょ」

過去のことを考えてもなんにもならない。ならば重要なのは今だ。マキリは救いようのない過去から目を逸らした。

若干包帯と服が擦れる痛みにも慣れてきたマキリは、先ほどよりは自然な歩みで、帰路に就いた。

※

マキリは家に帰った。

ベッドに突っ伏したかった。

なにせマキリが昨日の晩眠ったのは硬いベースキャンプの寝台だ。出来ることなら、ふかふかの自分の布団で微睡に包まれない。身体が激痛に苛まれている今ならなおさらだ。

けれど、そういうわけにもいかなかった。

ベッドには金糸が広がっている。季節の割には薄着な、シャツを何枚か重ねた服装に、汚れても良いズボンを履いていた。家の中が発発する時よりも綺麗なので掃除をしていたのだろう。水が張られたバケツと雑巾が部屋の隅っこにちよこんと置かれている。

マキリはそれに感謝するしかない。そんなことをしてくれるとは思っていなかった分、喜びもひとしおだ。

だからこそ、起こせない。

安らかに、自分のベッドで寝息を立てているトマリを起こすことなどできるはずもない。

「・・・有り難い」

有り難い。それは複数の意味を持つ。

感謝と珍事。

親切をしてくれたことを喜ぶ一方で、なぜこんなことをしてくれたのかと言う疑問。そしてちよっぴり、邪魔だと思う自分勝手な感想。内心複雑ということばがこれ以上見合う状況もそうはない。

椅子に座り、マキリはトマリの寝顔を見る。

いつもの冷たい表情とは違う、あどけない寝顔だ。寝顔なだけあって間抜けな印象を受ける。いつもとのギャップがマキリには面白い。しかし、ずっと幼馴染の寝顔を見ているというのもどこか犯罪臭がする。マキリはトマリから目を逸らし、長らく使っていないかった包帯や塗り薬を取り出す。消費期限ってあったっけな。マキリはそんなことを思い浮かべるが、薬なら問題ないだろう。と、コートを脱ぐ。

その時、変な悪寒がした。

ここで脱いでいいのか？トマリが居るのに。

マキリは自分で考えたその言葉に、眉を寄せる。

自分が起きたら、何故か幼馴染が半裸で同じ部屋に居た。

確かに、トマリがうつかり起きたりしたら変態呼ばわりされる可能性がある。というか、絶対される。

マキリは薬をもって、隣の部屋に移った。元々は家族のために作られた家だ。それなりの広さはある。マキリは普段寝るためにしか返つてこないため滅多に使わないが、ほかにも部屋は多くある。

マキリは扉を閉めて、上着を脱ぐ。包帯を外し、その時の痛みに呻いた。

赤と黒と白のまだら模様。マキリの肌の色を表すとすればそれだった。

左の脇腹は軽く食いちぎられ、腹筋や腕の周りにも多くの裂傷が残る。手の皮は擦り剥け、足と手は火傷で赤くただれている。頭も何度か打ち付けたため血が出ているし、顔も無傷とはいかなかった。

ひどい怪我だ。そして、憂鬱だ。

これから、その場所に良く染みる薬を塗らなければならないのだから。

マキリは薬を瓶から取り出すと、指で掬い、まずは片方の腕に付ける。

「っーっー！」

声を抑え、痛みを抑える。ひりひりと体の内側に入るような痛みが走り、薬が付いた指を手から離しそうになる。しかし、それではただ時間がかかるだけだ。マキリは自然と溢れ出る涙を止めることもせず、ただゆつくりと、薬を体に塗り込んでいく。

裂傷は火傷に比べれば大したことはなかった。それでも痛いことは痛かったが、涙が出るほどではない。

しかし、これもまた自分の実力不足が招いた結果だ。連戦して疲れていたことなど言い訳にはならない。

その結果を受け止め、克服しなければ、そうしなければ先には進めない。

先？

「・・・先ってなんだ」

マキリがそんなことを考えたとき、閉めていた扉が独りでに開いた。そんなことが人の手以外で起こされるはずはなく、家の中に誰かが入ってきたような気配はない。

となれば、そこにいるのは一人しかない。

「トマリ？掃除ありがとう。助かったーっー」

振り返りながら言ったマキリの言葉は、途中で止まった。

そこには確かに、トマリが居た。

ただし、常ならぬ様子で。

トマリは膝をつき、マキリの身体を呆然と見つめていた。瞳は満身創痍の身体を見つめ、半開きになった口は小さく震え始める。その顔

はまるで親に置き去りにされた子供の用に、哀しいほど寄る辺のない表情を浮かべていた。

トマリがそのような表情を浮かべるのは初めてだ。

しかし、マキリはその表情を知っている。

動悸が激しくなる。

息が荒くなる。

怪我による痛みがすべて、意識の外側に吹き飛ばされる。

それはマキリだけではなかったらしい。

トマリもまた、息を荒くして、頭を抱え、床に伏す。

「トマリ、どうしたの？トマリ!？」

マキリは怪我のことなど忘れたまま、荒い呼吸を繰り返すトマリを起こし、抱きかかえる。

いったい何が起こっているのか分からない。

トマリに持病などなかったはずだ。少し体は弱くても、唐突に動悸が激しくなるようなことは今までなかった。

マキリがトマリを抱きかかえると、小さく、本当に小さく、トマリが呟いている言葉が耳に届く。

「……ごめんなさい」

いよいよ、マキリの身体が強張り、全身から汗が噴き出る。脳裏にしたくもない想像が次から次へと湧いて出る。

かつてこの家のベッドに横たわっていた銀髪の女性に、目の前にいる金髪の女性が重なりそうになる。

「そんなつもりじゃなかった」「怪我してほしいわけじゃない」「死んでほしくない」「ごめんなさい」「知らなかった」「そんな依頼だつて知ってたら送り出したりしなかった」「ごめんなさい」「だっていつもと同じだと思うから」「そんな怪我してくるなんて思わない」「ごめんなさい」「満足してもらえればよかった」「ごめんなさい」「私の勝手な思い込み?」「ごめんなさい」「ごめんなさい」「無茶をさせて」「ごめんなさい」「ごめんなさい」

小さく小さく小さく小さく、膨大に紡がれる絶え間ない謝罪と懺悔の言葉。

トマリの顔を見ることが出来ない。心臓が破裂しそうなほどに強く、速く打ち続ける。冷汗が止まらない。顔が強張りすぎて自分がどんな顔をしているのかわからない。それでも耳だけは正確に機能する。

ごめんなさいをひたすらに紡ぎ続ける口は休むことなく、傷だらけの上半身に水が滴る。マキリの眼から流れるものではない。ただひたすらに言葉を紡ぎ続けるトマリを抱きかかえて、マキリは歯を食いしばる。

ベッドに運んだ方が良いのかもしれない。

ダメだ。

ベッドの方がよく休める。

ダメだ。

だつて母さんもあそこで良く休んでた。

だから

ダメだつってんだろ。

マキリは動けない。

動けないまま、唯々過去の情景が頭の中を奔り続ける。

父親が死んでからの一カ月間。その悉くが一瞬のうちに頭を過り、また最初から再生される。

母親の寄る辺のない顔も、虚ろな表情も、どこか別の場所を見ている目も、訳が分からない謝罪の言葉も、マキリの大嫌いだつたものすべてが一瞬にして、何度も何度も再生される。

時間が何倍にも、何十倍にも、何百倍にも引き伸ばされたようだった。

トマリのごめんなさいを聞く回数が百回を超えたあたりで、マキリはぼんやりと、やつとのこと、頭が働く余地が出来た。

そして、なんとなく、マキリは悟った。

『大丈夫?』

何故、自分のことしか考えられなかったのだろう。

何故、訊いた本人が大丈夫なのか確かめなかったのだろう。

トマリはとても優しい子なのに。

凄腕のハンターでもあつさりと死ぬことを知って、なぜ平気だと思えてしまったのだろうか。

狩りに出るたび、心配そうな顔で送り出していたのは誰だったか。怪我を負って帰ってくるたび、泣きそうな顔で自分を家に引っ張っていったのは誰だったか。

痛々しい傷を見るたび、顔を歪めながら治療してくれたのは誰だったか。

それが頭の中にこびり付いたのではないのか。

『行かないで』

一度も言われたことのない言葉。

しかし、容易に想像できる。

二年間、絶え間なく、狩場に出るたびに、敵に相對するたびに。

それが無意識に浮かび上がっていたのではないのか。

母親のような道を辿らせてしまうのではないかと危惧したからこそ、怪我をしないようにしようと、リスクを取らなくなったのではないのか。

村に戻りたくなかったのは、この体で戻れば二年間の無傷が無駄になると思ったからではないのか。

モンスターが怖かったわけではない

『死にそうなきに冷静な臆病者とか、わけわかんねえしな』

怖いのはモンスターではない。

怖いのは、死ぬことではない。

『ごめんなさい』

怖いのは、その言葉を聞くこと。

誰かが、母のようになってしまうことだと。

何故、気付かなかったのだろうか。

第14話

雪山の頂上にほど近い場所、エリア6。

比較的広い場所だ。モンスターにとってもハンターにとっても戦いやすい場所。必然的に、ハンターはここを最終決戦の場として選ぶことが多い。

その例に漏れず、ホイレンもまたここを最終決戦の場を選んでいった。

傷はほとんどない。防具も損傷はなく、背筋が曲がっていない立ち姿からしてもまだまだ余裕があることが伺える。

その一方で、相手方の姿は悲惨だった。

右目は潰され、右前脚の骨は露出し、身体は満遍なく傷だらけ、後ろ足に至ってはほぼ引きずるような体勢となっている。

絶対強者、そう言われるモンスターの姿としては、あまりにも哀れ。そういうほかなかった。

ホイレンは喋らない。いつもは無駄口ばかり叩く彼であっても、戦場で無駄口を叩くような油断はしない。目の前の敵を見据え、次はどこを削ろうか、そう考える思考だけが彼の中にはある。

「■■■■■ッ」

小さく、少し弱弱しくなった咆哮を上げる轟竜。

それは威嚇だろうか、だとしたら随分と情けない。ホイレンは内心肩を竦めながら、轟竜に向かっていく。

大剣を体と一体化させ、エネルギーのロスを最小限に、相手の動きを観察し、回避に必要な動きだけを選択する。

轟竜は目の前から迫ってくるホイレンに対して、その強靱な顎でもって噛み砕かんと食らいつく。

ホイレンはその攻撃を大剣切っ先を下に向け、その側面で受け流し、轟竜の肌を若干削りつつそのまま大剣を振り上げた。一寸の角度のズレさえ許されないその動きを、ホイレンは呼吸をするように自然にやってのける。

振り上げられた大剣は轟竜の首筋を切り裂き、血飛沫が舞う。若干

呻く轟竜の隙を見逃すことなく、ホイレンは振りあげた大剣の勢いをそのままに身体を半回転、自分を噛むことに失敗した頭を打ちすえる。

衝撃が轟竜の頭を襲い、方向感覚を狂わせる。絵巻であればその頭の頭上にはひよこの群れが輪をなしていただろう。ホイレンは更にその隙を突く。頭を薙ぎ払い、地面と挟み撃ち、再び薙ぎ払い、挟み撃ち。

そうして頭を攻撃されていれば、轟竜の意識は上がりとしても上がることは出来ない。この状態に持ち込まれた時点で、九割九分九厘轟竜の負けだ。

しかし、それでも、野生動物のしぶとさは侮れない。

轟竜は最後の力を振り絞ったのだらう。ホイレンが薙ぎ払いの体勢になり、轟竜の攻撃をガードできない瞬間、そのわずかな隙間を見計らって、ホイレンの身体に食らいつこうと口を開いた。

「遅い」

しかし、ホイレンはその轟竜の口の前からは既にいなくなっていた。

轟竜が動き出したことに気付いたホイレンは、あえて体の踏ん張りを無くし、大剣を軸にすることによって轟竜の攻撃を避けたのだ。

何も獲物が居ない空の領域を顎が挟み込む。虚しく響いた歯がぶつかり合う音は、轟竜の命運が尽きた音でもある。

振り下ろされる大剣は、潰された目では見えなかった。

「・・・割とあっさりだったな」

頭を搔きながらホイレンは呟く。

その言葉に嘘はない。

ホイレンが轟竜と遭遇してから、およそ三時間しか経過していない。本来、二日間の日程で獲物を狩るハンターの狩猟から言えばかなり早いと言える。

ホイレンはそれがどうにも不満だった。

自分の実力がそれほどまで上がったのであれば文句はない。

それは紛れもない自信になり、狩りのモチベーションも上がる。

しかし、今回の狩りはそうではない。

「こいつ、どう考えても弱ってる」

そう、このティガレックスは間違いなく弱っていたのだ。何が原因かは分からないにしても、まるで何かと戦った後のように動きが鈍かった。

しかし、だとしても不自然だ。

何故なら、ホイレンがこの轟竜に出会った時、確かにこのモンスターは無傷だったのだから。

「・・・何かから逃げたなら、傷の一つくらいつくはずだよな」

逆に、傷一つない圧勝だったとしたなら、モンスターの回復力でさすがに気力は回復するはずだ。

目の前の轟竜は、まるで病み上がりの人間のような不自然な疲れ方をしていた。

ホイレンは頭を掻いて、ため息を吐く。

「・・・仕方ねえ。ちよつとばつかり探索してから帰るか」

ホイレンは轟竜の素材をいくつか剥ぎ取り、その場を去る。

その日の雪山は、妙に薄暗かった。

刺さる。

雪国の冬は寒いのではない。痛いのだ。身体の芯まで凍らせるよ
うな、という表現をよく見かけるが、そんな生易しいものではない。
文字通り刺さるのだ。体の芯に刺さり、全身に痛みを告げる。そんな
寒さ。

この球状の星の最北端にほど近いポツケ村は、恐らく世界有数の寒
さを持つのだろう。

そんな極寒の夜の中、マキリは一人、竿を垂らしている。

水面は揺れ、糸は垂れ、されど獲物がくる気配はない。

空は雲に覆われ、灯りと言えば傍らのランプのみ。

そんな闇の中、マキリは考えを巡らせる。

彼女の行動に想うところはあった。

例えば、何故好いても居ない相手の送り役をやるのか。余人ではな

らない理由があるのか。

あるいは、そもそも必要性の薄い専属の仕事を自分に押し付ける必要が果たしてあるのか、どうか。

この二年間平穩そのものだった雪山で、専属ハンターの仕事など微々たるもの。畑を守る、商人の安全を確保する、目的と言えばその程度。決して村の存亡に関わるような事件が起きたことなどない。

マキリがハンターをやっている意味はあるのか。

そう思わなかったと言えは嘘になる。

けれど彼女はどこからともなく仕事を見つけてくる。中型の狩猟から採取まで幅広く、どこから持ち出しているのだと切り込みたくなるほどに大量の仕事。

休む暇を与えないようにしているかのようなその様子を、マキリは己が嫌われているせいであると断じていた。その件についての思考をマキリは好まない。既に自分が嫌われている理由はトマリから語られている。考えるということはその理由をもう一度頭の中で繰り返すということにほかならず、意識的に考えることを避けていた。

だがしかし、どうにもそうではなかったらしい

『ごめんなさい』

「またも聞くことになったその文句。いや応なく心に影が差し、口から小さな舌打ちが漏れる。

「・・・謝るくらいなら、どうして」

自分の身体の傷などマキリにとっては些末なことだ。どうせ今更傷の一つや二つ増えたところで何も変わりはないのだから。

しかし、それをそこまで気にするのなら、そもそも狩場に送り出さなければいいではないか。

『マキリに満足してほしかった』

「満足できるわけじゃないじゃんか。こんな臆病者が」

吐き捨てるように呟くマキリの竿には、何も掛かることはなかった。

※

トマリが目覚めるまで、マキリは傍に着いていた。

身体のどこにもけがはなく、眠っている姿は極めて穏やかだ。だからこそ、心は波立つ。

そんな事態になることは全く想定していなかったはずなのに、マキリの身体は半自動的に、迅速に動いた。母親の看病の時の動きと全く同じなのだ。一か月間絶えず続けてきた訓練はそう簡単に抜けるものではない。

寝ている間に服を着替えさせるといふのは気が引けた為、上着を脱がすだけに留めた。

マキリは散々逡巡した挙句、トマリをベッドに乗せた。

母親が使っていたベッドではない。それは母親が死んだとき既に廃棄した。今マキリの家にあるのは元は父親のベッドだったものだ。けれどやはり、同じ家で同じような症状の人間を看病するという状況はあまりにも不快だった。

マキリがトマリの看病をしている間、フラヒヤ山脈には再び黒雲が掛かっていた。ただ、狩猟区からは少し外れている。あまりにも不自然な雲の動きだ。まるで何かを追いかけるように左右に動き回っている。マキリは流石に、父親から聞いたモンスターの姿を思い浮かべずには居られなかった。

しかし、もしもそんなモンスターが居たとしたならマキリにはどうすることも出来ず、恐らくホイレンでも厳しい戦いになるだろうことは容易に想像がつく。したがって今は頭の片隅に追いやることしかできない。

今重要なことは一つ。

「・・・マキリ？」

困惑したような、寝ぼけたような、馴染み深い、優しいアルトボイスが耳に入った。

マキリは薄目を開けて、少し眩しそうな顔をするトマリを正面から見据えた。

「・・・話をしよう。トマリ」

聞かなければならないことが、今のマキリには山ほどある。

※

「ごめんなさい」

頭を下げたトマリに対し、マキリは頭を搔いた。その表情は驚いているわけでも困っているわけでもなく、呆れていた。

「・・・謝ってほしいわけじゃなくてさ、理由が聞きたいんだ」

トマリが、マキリを狩場に送り出していた理由を。

心労で倒れてまで、そうしたその理由をマキリは知りたかった。

好奇心ではない。

これは怒りだ。

気付かなかった自分に対しても、そして黙っていたトマリに対しても。

「トマリ、どうしてそんなになってまで僕を送り出した？」

真正面から、トマリに聞いたです。

先ほどのように取り乱さないかは心配だったが、今、そういった様子は無い。落ち着いて、マキリの話に耳を傾けている。ならば、多少強気に言った方が真実を引き出しやすい。

トマリは居心地が悪そうに身を振るが、マキリから視線を外そうとはしない。

居心地が悪そうなのは何か思うところがあるからだろうか。視線を外さないのは、話すという意味表示だろうか。

マキリがそんなことを考えている間に、トマリはふう、と小さく深呼吸をした。

「・・・マキリは、さ。農業、楽しかった？」

「・・・いきなり何の話」

「ハンターやってるより、楽しかった？」

マキリは、思わず顔を顰める。

今、マキリには分かった。

トマリがなにを言いたいのかも、どうしてマキリを送り出していたのかも、そのすべてが分かった。伊達に幼馴染をやっているわけではない。思考の型はなんとなく把握している。

だからこそ、心は苛立つ。

「・・・正直に言えば、楽しいわけじゃない」

マキリの答えに、トマリはほっとした表情を見せる。しかし、ここはほっとする場面ではない。マキリからしてみればただ単に自分勝手なことをしているだけだ。

「トマリ、僕がハンターに憧れてたから、だから無理矢理にでもハンターを続けさせたの？」

その言葉に込められた怒気に、トマリは気付いたのだろう。唇を噛んで、顔を俯かせる。

それは、何よりも雄弁な肯定だった。

「・・・マキリに、満足してほしかった」

ぽつりと呟く。

冷たい表情に隠されていたものが、滾々と、器が壊れた水のように流れ出る。

「・・・マキリが、戦えなくなつてから、ずっと辛そうだった」

その通りだ。

マキリは辛かった。毎日毎日狩りに挑み、跳ね返され、村の人々には哀れみの眼で見られ、自尊心はぼろぼろになった。トマリだけが唯一、心の底から自分を心配してくれていた。

心配して、手当てをしてくれた。

その姿を見られていたのだ。分らないはずもない。

「農場でさ。マキリが働いているところ、私も好きだったよ。普通に笑って普通に泥だらけになつて、釣りをしたり、コジロウと遊んだり、久しぶりだった。マキリが笑つてるところを見たのって」

その通りだ。

あの時、マキリは楽しかった。丁度マキリの心が折れた頃にやってきたコジロウと、農場で働くのが、マキリは楽しかった。コジロウな

ら自分を心配しない、憐れんだりしない。もうボロボロだった自尊心がこれ以上傷つけられることもない。まっさらな状態から自分を見てくれる。

だからマキリはあの農場が好きだった。けれど

「でも、強引に笑ってたよね。マキリ」
一体どこで見られていたのだろうか。

マキリが思い返しても、トマリが農場に来たことなど数えるほどだ。そもそもマキリとコジロウが作業しているときに、ポツケ農場に来る人間が少なかった。元々アイルーたちだけで管理できていた訳だし、わざわざ人間が見にくる必要もない。

しかし、トマリはどこからか見ていたのだろうか。
隠れて、マキリが心にしこりを残していることを感じていたのだろうか。

「・・・だから私、諦めてほしくなくて」
「僕を送り出した？」

トマリは沈黙する。それが答えだ。

マキリは瞑目し、息を小さく吐き出す。

トマリのこととは分かった。

何がやりたいのかも、マキリにどうしてほしいのかも。よくわかった。

だからこそ、マキリには我慢できない。

「トマリ、金輪際、それは無しだ」

「・・・」

マキリの表情は、常になく厳しかった。

目を細め、頬は引き攣り、眉間には皺が寄っていた。

眼の奥で、静かな激情が暴れている。

トマリはそれを見て、息を呑んだ。

「僕は今、結構怒ってる」

見ればわかるだろうに、マキリは言わずにはいらなかった。

自分のことを思っていてくれたのは嬉しい。それはマキリにとっ

ても望んでいたことだ。

しかし、自分の心に負担をかけるなどということをするようでは本末転倒だ。特に、マキリに対してそれは一番やってはいけないことだった。

「僕のことを考えてくれたことはうれしい。お礼を言っておくよ。でも、自分の身体を粗末にするようなことをしたのは許さない」

トマリの眼が、僅かに揺れた。

涙だろうか、自分の善意が、ただの押し付けにしかなくなっていないことに気が付いたのだろうか。

後悔を、しているのだろうか。

しかし、それでもマキリは止まらない。

「もう二度と、僕の心を勝手に推し量るな。自分の心に負担をかけるな。次そんなことをしたら」

そんなことをしたら、どうするのだろうか。

マキリは自分で自分に問いかける。しかし、口は勝手に動いていた。

「・・・僕は一生、お前の言葉を信じない」

いつしかぶりの、何かが壊れる音がした。

そしてマキリには、もう二度と、その壊れたものが治る気はしなかった。

※

がごん、と、何かが叩かれる音がした。

その音の方に、オツカイは向かう。片手には酒瓶を持ち、片手には徳利を持ち、ゆっくりと歩いて行く。

そして、目的の人物を見つけた。

「・・・オツカイ、何の用」

マキリは片手で釣竿を持ち、片手は固く握りしめられていた。オツカイの方を振り向いては居ない。恐らく、足音で誰かを判断したのだ

ろう

棧橋の板も一枚割れているところから見て、マキリが殴ったらしい。先ほどまでのやり取りを思い出し、苛立ちが頂点に達した結果だ。

「ものに当たるのは感心しないな」

「・・・悪かったよ」

少し、気が立ってた。そう語るマキリの眼はいつもの比にならないほど鋭く、自他ともに目つきの悪い男と言われるオツカイですらそれに勝てる気はしなかった。

オツカイはマキリの横に座り、酒を徳利に注いだ。

「飲め」

そして差し出された酒に、マキリは首を振る。

「下戸」

「知っている。だから飲め」

マキリは一層目を鋭くするが、オツカイは動じずに別の徳利を傾けている。マキリは諦めたようにため息を吐き、それを口に運んだ。

「・・・トマリと喧嘩をしたらしいな」

「あれは喧嘩じゃないよ。僕が一方的に怒っただけだ」

妙に冷静だな。聞いた話だと、かなり怒っていたみたいだが。

オツカイは頭を搔く。その仕草を見たマキリは思わず舌打ちをした。

「誰に言われたの？僕を説得しろって」

「・・・よくわかったな」

「わかりやすすぎ」

「お前に言われるとは思わなかった」

そもそも、オツカイはこういった、人と人の中を取り持つようなこととはしない。この男が器用なのは武器に限った話であり人間関係に關しては苦手も苦手、大の苦手だ。

積極的にマキリに話しかけてきた時点で、マキリは違和感を感じていた。そこに困ったような仕草を認めれば自ずと答えは出る。

「トマリと仲直りさせろって？アイさんあたりかな」

「・・・鋭いな」

「一番やりそうなのがアイさんなんだよ」

オツカイにとってこういうった役割は最も苦手な役目だ。それを無理矢理にでもやらせることが出来るのは、思い切りが良い強引さを持つアイくらいなものだ。

オツカイはアイに追われたことを思い出して顔を顰める。

「お節介が過ぎるんだあいつは。いちいちと口うるさい」

「まあ、見てられないんだらうけどね。知っちゃった以上はさ」

竿を上下に揺らしながら、気だるげな表情を絶やさないうマキリの声には芯が抜けていた。

ただ思いついたことを喋っているだけ、頭の中で考えることをせず感じたままを言葉にしている。そんな感覚だ。例えるなら寝起きの人間を相手にしている感覚に近い。

しかし、オツカイにはこの状態から元に戻す方法を知らない。酒を使つて言葉を引き出せるかと頭をひねっても見たが、結局のところあまりうまく行くものでもない。

オツカイは面倒になり、ため息交じりに本題に入った。

「・・・マキリ、何故トマリを拒絶した」

「拒絶？」

何を大袈裟な、そんな具合に鼻で笑つたマキリを、オツカイは睨み付ける。

「お前が諦めたハンターへの道をもう一度開いたのはあいつだろう。だというのになぜあいつを叱つた」

「僕が危険に放り込まれたことを怒つたのがそんなに不満？ハンターなんて危険な仕事に何度も行かされたんだから怒って当然じゃ」

「俺は気が長い方じゃない」

一向に真面目に答えようとしないマキリに、オツカイは視線を叩きつける。風がマキリの髪を揺らし、元々不機嫌そうだった目がさらに不機嫌そうに細められる。

「・・・僕がさ、どうして臆病者になったんだと思う？」

「父親が死んだのを見て、あっさり死ぬことが怖くなつたんじゃない

のか」

「んなもんどうでもいいよ。別にあっさり死んでも、ハンターなんかからあり得ないことじゃない。そういうのはもうとつくの昔に覚悟してる」

極限状態で戦っている以上いついかなる時も死の危険はついて回るものと考えるべきだ。ましてやハンターなど自分よりも体格も大きく回復力もあり、時に火や酸を吐く様なモンスターたちと戦わなければならぬ。そんなハンターたちを自殺志願者と呼ぶ人間が居ることもマキリは知っている。

それを承知でやってきたのだ。

確かに、父親ほどのハンターでもあっさり死ぬということは衝撃だった。

しかしそれでも、マキリにとっては少しばかり覚悟の質を変えればそれで済んだ。死んでも仕方がない。その時はその時だ。だから死なないように全力を尽くせばいい。そう思えた。

けれど、母親の死はそうではない。

「僕もトマリが倒れてから気付いたよ。僕が怖がってるのは死ぬことじゃない。僕が怖がってるのは心配してくれている誰かが母さんみたいな、生きた屍になることだ」

ただ単に自分が死ぬだけならばいい。

しかし、そこに他人の死が介在してくると言う事実。それは母親という前例を見たマキリにとって余りにも重い。

「・・・よく、わからんのだが、要するにお前はトマリに心配を掛けたくなかったのか」

「そういうこと。だからさ、トマリが我慢してまで僕を送り出すとか、そういうのはさ、余計なお節介なんだよ」

今ならわかる。

トマリに送り出されれば狩場で硬直しないのは、トマリのが好きだからとかそういう理由ではない。

ただ、今のトマリなら自分が死んでも大丈夫だろう、そう思えたからだ。

好意を得られていないと、自分を心配することはないと、生きた屍になることはない、そう思えたからだ。だから戦場で無茶だつて出来た。だつて今までと変わらないから。

しかし、その言い訳はもう使えない。

「馬鹿じゃないの。馬鹿だよ。なんでそんなことするかな。確かに狩りが出来なくなつて不満だつたかもしれないけど、そんなの普通、放つておくよ。放つておいてほしかったよ。そうすれば今頃諦めだつてついたのに、普通に、農業やって、普通に暮らして、普通に、ハンターなんてやらなくてもよかつたのに」

「その諦めるのが嫌だつたんじゃないのか？あいつは」

オツカイは途中から耳を傾けるのを辞めて、一人酒をちびちびと飲み進めていた。マキリはその横顔を睨み付けるが、どこ吹く風だ。

既にオツカイは、聞く必要性を感じていなかった。

要するにこうだ。という答えを既にオツカイは得ていたのだから。回りくどいことは嫌いだ。だからこそオツカイは正面から自分の考えを叩きつける。

「お前はあいつと話すのが怖しくて逃げてるだけだ」

マキリの冷たかつた表情が、一気に赤く染まる。その変化は劇的だった。さながら藁が一気に燃え上がるように、マキリの激情が外に漏れ出る。

「逃げてるだけ？どこが、僕のどこが逃げてる。あいつが勝手に僕のこと決めつけて勝手なことしたから怒つたんだ。そのどこが悪い？」

先ほどまでの落ち着いた様子が嘘のように、マキリはオツカイに向かって言葉を叩きつける。しかし、その様子はまるで癩癩を起こした子供そのものだ。オツカイは頭を掻く。

「あいつは確かに勝手なことをした。お前の心を勝手に解釈して、こうするのが一番だと勝手に決めつけた。トマリが心配なお前からしてみれば一番やってはならないことだ。それはわかる」

だが、オツカイはそう言葉を区切り、マキリを睨み付ける。それはマキリを糾弾するまなざしだった。

「お前もトマリに臆病になった理由を話していないだろう。トマリがそれを一番嫌がっていることをわかっていながら隠している。それを隠したまま相手を怒鳴りつけるのは公平じゃない」

マキリがトマリを心配させたくないように、トマリもまたマキリを心配させたくないのだ。

だからマキリは狩場に出れない。トマリは狩場に出てほしい。

そんなすれ違いが二人の歪みを引き起こし、お互いの軸を歪めてしまった。そしてそれは次から次へと纏れていき、今の状態になった。

「トマリに、僕が臆病者になった理由を話させて？そんなことしたって何の意味があるの？むしろトマリは気にするだけだよ」

「ああ、あいつは怒るまでは行かないにしても、悲しむだろうな。なにせ叶えて欲しかった相手の夢を自分が邪魔していたのと同じだ。ただ、お前も夢を叶えて欲しいというトマリの願望を自分の都合で邪魔していたのと同じだ」

マキリの表情が再び変わり、少しばつの悪そうなものへと変わる。その様子を見れば、マキリがそのことを自覚していたことがわかる。

結局のところ、二人は同じことをしているのだ。

お互いが一番嫌がることをお互いにやっている。しかもそれが善意によって行われている。だから変に噛みあってしまう。しかしどうしても歪みは出る。

この二人は良くも悪くも、お互いのことを考えすぎている。

オツカイからしてみれば面倒なことこの上ない。何故こうも複雑に絡み合ってしまうのか、理解に苦しむ。

「じゃあ、どうすればいい？話して、それでどうなる？」

マキリは小さく呟き、項垂れた。気が付けば釣竿は棧橋に置かれていた。糸はそのまま続いているが、この様子では魚が来ることはないだろう。

この問題、かなり面倒だ。

当り前のことだ。二人がお互いに求める願望が二律背反になっている。

トマリはマキリにハンターをやってほしい。例え自分が送り出し

て、死んだなら結果的に自分が殺したということになっても。

マキリはトマリに心配を掛けたくない。例えハンターと言う天職を諦めてでも、トマリには生きる屍になってほしくない。

二つの観点に立って理想を実現するのはとても難しい。そもそもが相反するものなのだから。

しかし、解決策は既に見つかっている。

どうすればいいのか、ではなく、そういう時にやるべきことは決まっている。

「トマリと喧嘩して来い」

「・・・は？」

先ほどまで項垂れていたマキリが、目を瞬かせてオツカイを見た。オツカイは特別おかしなことを言った認識はなく、至って平然と話す。

「お前はさつき、一方的に怒っただけだと言ったな。それだからダメなんだ。意見がぶつかったときは喧嘩する。そして妥協点を探す。お互いに妥協する気がないなら説き伏せる。争い事はそうやって、喧嘩でどうにかするのが一番だ。どうしても説き伏せられないなら暴力に訴えても良い」

まあ、自分より弱い相手に暴力を振ったらその時点で負けだとは思うが。オツカイは呟いて、ため息を吐く。

「お前らの問題は結局お互いがお互いに黙って勝手なことをやったことだ。二人で決めたことなら多少不満があっても許せないことはないだろう」

許せないのは、お互いのことを理解しようとしていないからだ。

自分を理解しようとして、自分の為に何かをしてくれる人を怒ることが出来る人間など、そうはいない。今マキリが怒っているのはそれが善意ではなく善意に見せかけた願望の押し付けだからだ。

だから、その願望を共有して来い、オツカイはそう言っていた。

「・・・オツカイもウイさんと喧嘩したりするの？」

「ああ。俺はクーを加工屋にしたいが、ウイは普通の主婦にしたいと言う。それで喧嘩することはしよっちゅうだ。結局はクーが決める

ことだと言つて決着するがな」

「そっか」

「むしろ、喧嘩がない方が不自然だ。職人同士でも譲れない一線と言ふものは存在する。いや、職人だからこそ、とでも言うべきか」

オツカイは肩を回していた。緊張感のある場所で話し合つていたので肩が凝つたのだろうか。マキリはその様子がどこかおかしい。可笑しいと思えるくらいには回復した。

意見がぶつかったら喧嘩しろ。確かに少しオツカイらしい、極端な意見だ。けれど間違つてはいない。そう思える。

マキリは竿をもって立ち上がる。

「・・・ありがとうオツカイ。明日、少しトマリの家に行つてみるよ」

「ああ、で、どうするつもりだ？」

「何が？」

「あいつはお前がハンターになるように望むぞ。それを説き伏せられるのか？」

「ああ、大丈夫。それに関してはもう考えてあるから」

マキリは憑き物が落ちたような顔をして、ため息交じりに呟いた。

「お互い、少し妥協しなくちゃいけないけどね」

第15話

ランプの光に照らされた部屋。綺麗に整理されたノートと背表紙が擦り切れるほどに読み込まれた本が散乱し、階段に光を当てたかのようにガタガタとした形を反射する。木製の壁の染みが妙に存在感を増している。普段そこまで掃除をしない部屋だ。少し動けば埃が噴き出す。余りにも不衛生、しかしそれでも構ったことではない。重要なものはすべて手の届く範囲に置いてある。重要なものはなくしたりしない、すべてがすべて、把握された場所に収まっている。いちいち本棚に入れるよりも楽な配置をしてあるからそのままにしてあるのだ。傍から見て汚くても、主から見れば十分に整理されていた。

無造作にばら蒔かれたように見える書類たちからみて部屋の端に、人一人丁度入る程度のベッドがある。その反対側には勉強机らしき機能性しか重視されていないような机と、直角につけられた背もたれに毛皮が掛けられた程度の椅子。その椅子に少女は座って何かを書きながっていた。

言葉と計算が入り混じった数学の証明式、あるいは化学、あるいは物理。そういった科学と呼ばれるものの証明式をひたすらに解いている。何か意味があることをしているのだろうと思ったのなら、それは全く違う

いまやっていることに意味などない。正確にはいままでにやった勉強の復習をしているという点で言えば意味があることだが、少女からしてみれば現実から目を背けられさえすればその手段は何でもよい。

一瞬でも思考を止めれば、激昂する光景が頭の中に蘇る。

蘇れば、それが当然の報いだと認めなければならぬ。そして認めたら、少女はとうとうも顔が歪むことを止められない。

『僕は二度と、お前の言葉を信じない』

拒絶された。

拒絶された。

拒絶された。

二年間続けてきた自己満足がついに暴かれた。勝手なことをするなど拒絶された。

頭に血が上り、歯を食いしばり、頭の中を、腹の中を、全身のありとあらゆる感覚器官を得体のしれない、恥のような、どうしようもないものはい回る感覚を覚える。それと共に机を全力で、両手で叩き、その痛みでそれらを消し去る。八つ当たりだ。者に対する八つ当たり、最低だ。けれど、それくらいしか出来ない。それくらいでしか、自分の心を保てない。直視するのは辛い。どうしても目をそむけてしまう。

そして、目を背けてしまう弱い自分を見ることにも目を背けてしまう。つくづく現実逃避をしたがる自分にも。そういった堂々巡りが頭の中を駆け巡る。

もういつそ忘れてしまいたい。すべて忘れて雪の中に埋もれてそのまま消えてしまいたい。何もかもなかったことにして、モンスターに食われても良い。気が付けば傍らにある毒瓶に手が伸びそうになっっている自分が居る。それすらも醜い。気色が悪い。吐き気がする。そして、実際に吐いた。だからどうと言うこともない。そんな事実があったというだけの話。

善意だった。悪気はなかった。夢を追いかけて欲しかった。笑ってほしかった。

そんな言い訳はいくらでも思いつく。それこそ二年間考え続けてきたことだ。挙げろと言われれば一つと言わず三つでも五つでも、二十個までなら淀みなく言える自信がある。すべて頭の中で論理的に矛盾がないかを確かめた事柄だ。説得力だけは無駄にあるだろう。それが自分を説得できるかどうかは置いておくにしても。

歯ぎしりの音が虚空に消える。再び頬が歪む。

後悔している。

善意でやったはずのことが、実は善意でも何でもなかったただの願望の押し付けだったことを、他でもない善意を向けていたはずの本人に暴かれて後悔している。

自業自得だ。

ろう、と。

何故ならこの人は豪胆だ。後悔なんてしない。その代わりに反省して次に活かせばいいと考える。この人は自分の父親がモンスターに食われても、母親が自分を置き去りにして他に男を作って逃げて、この人は歪まず、一人で生き残ってきた。好きになつた人間を追いかけてこのポケ村まで来た。そして村に溶け込んでこうして立派な家庭を築いている。聞く度に思う。この人は強い。そして、自分は弱い。

両親が居ながらにして誰かに依存し、歪み、今こうして後悔の海に沈んでいるトマリの気持ちなど分かるはずもない。そもその性根が違う。心の材質が違う。目の前の女性の心が鋼鉄で出来ているとすればトマリの心はさしずめ腐りきった木材だ。少しでも衝撃を入れれば崩れ落ちる。

だからこそ、期待などない。

期待することなど許されない。

全てはトマリの心の弱さと愚鈍さが原因だ。

それがわかつているからこそ、腹が立つ。

「・・・はあ、あんたはよくわからないわ。多分あんたなりに考えがあるんだろうけど、私には分からない」

カリンは諦めたように声を漏らした。それはそうだろう。トマリにも分からない。自分が何を考えて行動に移したのかも何が欲しかったのかも今となってはわからない。自分にもわからないものが他人にならわかるというのは余りにも無責任だ。自分のことを一番よくわかっているのは自分なのだから。自分のことは自分でどうにかするしかない。

ましてや、もう十五だ。

結婚しても可笑しくない歳。つまりは既に大人だ。自分のことくらいは自分でやらなくてはならない。それがトマリには出来ていなかった。再び自己嫌悪に陥ろうとする思考を、カリンのでも、という声が遮った。

「二応覚えておきなさい。マキリは、あんたのことを嫌ってないよ。

むしろ、絶対に好きだから」

頭に一気に血が上った。先ほどの恥が体中をはい回る感覚ではない。それは自分がその言葉に少なからず歓喜を覚えたことへの怒り。それが割れた風船の如く、外側に噴出する。

「態々自分を死地に追いやる人間を好む人間がどこにいる!!」

苛立ちと共に足を振り下ろし、木製の床が軋みを上げる。怒号は部屋の中を木霊する。床を奔った衝撃で絶妙なバランスを保っていた本が崩れ落ち、部屋の中を埃が舞う。

「普通に考えてよ！マキリは怒ったんだよ！怒ったんだ！私がしたことに怒ったの！マキリは自分を狩場に行かせることに怒ったんだから、あんなに嫌がってたのに無理やり行かせた私が嫌いじゃないわけない！理屈に合わない！」

声を荒げてしまえば、抑えていた心のうちまで乱される。惨めで切なくて寂しくて苛立って、どうしようもない気持ちに涙となって溢れ出る。

みつともない。みつともなく怒鳴っている。最後の一線を越えてしまった。

惨めだ。自分を制御できないほどに惨めだ。頭の奥底がまだ理性を保っているのが憎らしい。しかし、堰を切るように吐き出される激情が今更風ぐわけもなく、気が付けば涙を流しながら怒鳴っていた。

何を言っているのか自分でもわからない。きつと支離滅裂なことを言っている。目の前のお母さんを困らせている。お母さんを困らせている。心配してくれたお母さんに怒りをぶつけている。

気が付けば、肩で息をしていた。その段階になってやつこのことで頭が冷えた。といっても一時的な冷却だ。今の不安定な状況ではない。つ、もう一度制御を離れるかわかったものではない。

「……ごめんなさい。もう少ししたら、治るから」

「……分かった。でも、これは貰っておくから」

カリンはため息交じりに、トマリの部屋に散らばっているいくつかの瓶を自分の手に収めた。そのすべてが、使いようによっては毒にもなるものだ。トマリが早まらないように、という配慮だろう。その配

慮は正しい。今のトマリでは冷静な判断が出来そうにない。

「今日はさつきと寝なさい。夜は要らないことを考えすぎる。一日寝れば楽になることだってある。これは受け売りだけどね」

それらをエプロンのポケットに入れると、トマリの部屋から去っていった。ドアが閉められる。廊下の光が閉ざされ、再び部屋にはランプの光だけが光り始める。

すう、と息を吸い、息を吐く。

深呼吸を繰り返していくと、じきに気持ち落ち着いてくる。

これなら、眠れるだろうか。トマリはそんなことを考えてから、自分で否定した。

今日は、きつと眠れない。

※

マキリが起きたのは、太陽が上がるのと同時だった。

一度決心してしまえばマキリは単純で、すぐに家に戻って熟睡した。余りに割り切りが良すぎると言われるかもしれないが、それがマキリの性分なのだから仕方がない。

朝の陽ざしの中、適当に飯を作る。とはいっても、保存しておいたパンにジャムを付けるだけの簡素なものだ。今日は狩りに行くわけでもなし、身体に精を付ける必要を感じなかった。部屋の中にあるものは、折れたボーンククリと頭部と胸部しか残っていないマフモフシリーズ。アイテムを入れるための収納箱に、ハンター向け雑誌『狩りに生きる』やモンスター図鑑等のハンターにまつわるものだけ。ただ、それにしても全体の数は十に満たない。マキリは活字を読むことがあまり好きではなかった。そんなことをするよりは体を動かした方が心地よい。今部屋のあるものは父親が気まぐれに買った雑誌たちだ。

簡素なベッドに簡素な机、椅子に本棚、収納箱。昔は父の装備や母の小道具が置いてあったものの、身の丈に合わない装備である父の装備はすべて処分してしまい、母の小道具もあつたところで無用の長

物。いい思い出と言うよりは嫌な思い出を思い出させる其れはマキリの部屋から消え去っている。

いつも通りの部屋でいつも通りの朝食をとる。すべてがいつも通り。何もなければこのまま農場に出向いて、コジロウと共に農業に勤しみ、仕事終わりには少し水浴びをして汗を流し、そのまま家に帰って飯を食って寝る。そんな一日が始まる。

けれど、今日はいつも通りではない。

おそらく、マキリの人生にとつてもかなりの重要度を持つ一日になるはずだ。それは既に確信していた。

朝食を終え、マキリはしばらく何もせず机に肘をついて呆けていた。

することはわかっている。昨日の夜のうちに決めた。オツカイにもそれは話した。だから、特にすることもない。

けれど、外に出て何かする気があるか、と問われればそれはまた微妙な話だった。

「・・・どうしたもんか」

まだ時間には早い。今トマリの家に行っても、トマリは起きていないだろう。あれはかなり寝起きが悪い。昨日はあまりにも強烈な出来事が起こったせいかわくはなかったが、普段はかなり、面倒くさい。機嫌も悪くなる。

だから、出来れば昼過ぎくらいに行くのがベストだ。その方が落ち着いて話も出来る。だから目下のところマキリが必要としているのは昼までの暇つぶし。

その時、マキリは自分の身体がかなりのけがを負っていることを思い出した。昨日寝るときはあまり気にならなかったが、意識を向ければまだ少し痛んでいる。包帯を取ってみれば、火傷はまだ完治とはいかずともほかの傷は大体が瘡蓋になっている。まだ狩りのような激しい動きをするのは厳しいが、日常生活を送る分にはどうにかなりそうだ。回復薬の効能と言うものは素晴らしい。

しかし、これを使いすぎると寿命が減るといふ話を聞いたことがあり、マキリとしてはあまり積極的に使いたくないものではない。俗説であ

るとは信じたいものだが。

マキリはふと思いついて、前言を撤回する。
外に出る気がしない、という前言を。

※

道具屋の奥でせわしなく動き回る影があった。

アイの夫、ユワレだ。優し気に細められた目つきと、少しひよろ長い身体が特徴的な男だった。基本的には裏方で仕事をしているため店に出てくることはあまりない。

ユワレはマキリに気が付くと、手を上げてやあ、と挨拶をした。

「おはようマキリ。良い朝だね」

「うん、おはようユワレ。でさ、アイさんいる？」

「ああ、今は中で帳簿を付けてるよ。色々と忙しくて溜まってるらしいんだ」

その色々と忙しい、という部分に思わずマキリは苦笑いを浮かべる。それをみて、ユワレもまた苦笑いを浮かべた。

「大変みたいだね。ああ、他人事みたいに言っちゃって悪いんだけどさ」

「良いよ。まあ、踏み込みずらい事情だつて言うのもわかるし」

「そう言ってもらえると助かるよ」

ユワレは笑って、マキリを家の中に招き入れた。

家の構造は至ってシンプル。大通りに面している方に道具屋があり、その奥に居住スペースがある。だから奥行きはかなりあるものの、そこまで広いわけでもない。木の床で作られた部屋の中には異国の意匠が施されたテーブルと椅子、その他もろもろの小物があり、道具屋の主人らしい部屋が広がっていた。そこで帳簿を付けていたアイはマキリに気が付くと、目を瞬かせる。

「・・・ああ、おはよう。吹っ切れたのかい？」

「うん、おかげさまで。ありがとう」

「良いさ。気付かなかった私らも悪い」

アイはため息を吐きながら額に手を当てた。しかし、それも一瞬のこと、すぐにマキリに向き合った。

「で、どうするんだい？」

「話をするよ。それで全部終わらせる」

「そうかい。まあ、それが良い。というか、結局それしかないね」

アイと話しているうちに、ユワレはどこかに消えていた。聞いていい話ではないと判断したのだろう。

そんなに重苦しい話をするつもりでもないし、お礼を言ったならさっさと帰るつもりだったのだが、気を遣わせてしまった以上はそれに少しだけ甘えるでしょう。

「それにしてもさ、よくオツカイと話す気になったね。二人、凄く仲が悪かったのに」

「今回だけの特例さ。いまでもあいつは嫌いだ。ウイもあいつのどこが良いんだか」

心底嫌そうに手を振るアイを見て、マキリは笑った。仕草や表情だけでも嫌っていることがわかる。そんな二人でも必要な時には協力するのだからよくわからない関係だ。

そして、一応聞いておきたいことがあるのをマキリは思い出した。

「トマリの方にはアイさんが行ったの？」

説得には、ではなく慰めに行く、と言う意味だ。説得はマキリがされるべきものであってトマリにはむしろアフターケアが必要だった。それはアイもわかっていたのだろう、首を横に振りながらも、否定はしない。

「そっちは母親に任せたま。まあ、不安だったからひとつや二つはアドバイスしておいたけどね」

なるほど、確かに通りだ。こういった場合のアフターケアは母親がするべきだろう。しかし、マキリは豪胆なカリンの姿を思い浮かべると一抹の不安がよぎる。

「・・・そっちはアイさんが行けば良かったんじゃないの？」

マキリが聞けばアイは少しだけ唸った。理由はあるのだけれど、どういえばいいのかわからない、そんな様子だ。

「・・・トマリはね。なんていうか、愛想は良いんだけど心を開くのは
凄く難しいって感じなんだ。わかるかい？」

「いや、全然わかんない」

少なくともマキリが見ている中でトマリは誰とでも仲良くなつて
いた気がするし、村人たちとも良く笑い話をしていた。あくまでも二
年前の話で合つて最近のことは知らないが、アイの話しぶりでは昔か
らその性質は変わっていないのだろう。アイは再び少し考えて、言葉
を紡ぐ。

「あんたはさ、ホイレンさんとさつさと仲良くなつただろ？なんてい
うか、気の置けない関係つて言うやつ？でも、あの子は自分のことを
全然話さないのさ。その代わりにあんたの話とか、村の誰かの話とか
はするんだけどね。あんまり自分の内面を出すつてことをしない。
だからつて引つ込み思案つていうわけでもないし・・・」

アイはどういった言葉で表現すればいいのか、と頭をひねつてい
る。しかし、マキリにもなんとなく意味は分かった。というか、昨日
の憤りはまさにそれが原因だったのだから。

「なんとなくはわかったよ。で、それがアイさんが行かない理由とど
ういう関係が？」

「そりゃあ私が信用されてないつていうか、私が言つたらたぶん取り
繕うだろう？あの子は」

「・・・なんとなく、わかる。」

マキリにはトマリがアイを信用していないという図式を描くこと
が出来ない。二人が話しているときはいつも楽し気で、喧嘩の兆候な
ど一つもなかった。

しかし、どこか、何故か、マキリは納得していた。

心のどこか、恐らくは無意識で納得しているのだ。勘のようなもの
だが、それが、それだけがトマリの身勝手を正確に把握し、己を臆病
者たらしめていたことを考えると信用してもいいかもしれない。

「だからカリンなのさ。流石に母親と築き上げた信頼に勝てると思う
ほど思い上がっちゃいないよ」

アイはそう言つてふう、と息を吐くと、なにかをおもいついたよう

に立ち上がった。「ちよつと待つてな」という声でその場に繋ぎ留められたマキリは、戻ってきたアイが持っている袋を見て首を傾げた。「なに？それ」

「これからトマリに会いに行くんだろう？怒ったことを謝るんじゃないのかい？」

「そうだけど」

「なら手見上げの一つでも持つていきな。少しは話のタネになる」

目から鱗が落ちる気分だった。

確かに、いざ会ってみて性急に話題に入るよりは少しくらい世間話をしてからの方が気持ちが良い。むしろ、何故自分はそのらへんに気が回らなかったのか。どうにかなるだろうとしか思っていなかった。

しかし、アイはそんなマキリを見て可笑しそうに笑った。

「そういうところは昔から変わらないね」

「そういうところって？」

マキリが聞けば、アイは笑いながら答えた。

「一度決めたら何があつても一気に突っ切るところさ」

※

トマリが気付いた時には、既に太陽は真上だった。

結局、寝たのか寝ていないのか分からない。いつの間にか寝たのかもしれないし、そうではないのかもしれない。瞼は鉛のように重いけれど、目を閉じたところで眠れるわけでもない。むしろ、目を閉じれば脳内の声が嫌と言うほどに響いてくる。

これでは眠れたものではない。眠ったように見えても、眠っていない。

ふと、トマリは思う。

もしかして、マキリのお母さん、キノがやっていたのはこれではないのか、と。

眠り続ける、と言うのは意外と難しい。特に吐いたりすると眠気が一気に吹き飛び、新たな睡眠に入るにはそれなりに時間がかかる。し

かし、キノは吐いた後でもすぐにベッドに突っ伏していた。そして目を閉じ、少し表情を歪めたりしていた。

あれは、一見して眠ったように見えた。けれど、きつと違うのだ。目を開けているのは辛い、だから目を閉じてしまう。けれど目を閉じてしまえば自分の内面を見なければならなくなる。眠れない。結果的に本当に眠れる時間はほんのわずかになる。寝不足が体力を奪い、やがては衰弱していく。

そう考えると、今のトマリの状態はキノに酷似している。それをトマリは初めて自覚した。

「・・・気分が悪いなら、とりあえず水を飲むといいよ」

そして、傍らに座る存在に気が付いた。

片手に水の入ったコップを持ち、トマリの手元に差し出している。その表情は呆れたようでもあり、困ったようでもあった。トマリの視線を受け止めると、彼は苦笑した。

「母さんもそうだったんだけど。とりあえず水を飲むと少しは楽になるよ。ちゃんと寝られる」

先ほど感じたことを、彼はしつかりと言葉にした。一カ月も見ていて、その対処法がわかつているのだろう。それだけ自分がキノと同じ状態にあるということでもある。

「・・・マキリ?」

なんとなく、声が掠れたような気がした。

おかしい。マキリは怒りながらこの部屋を出ていったのに、どうしてこんな風に優しく笑えるのだろうか。

トマリがそんな意図を込めて名前を呼ぶと、マキリは頭の後ろをガシガシと搔いた。少しばつが悪そうだが、そのいつも通りの様子がトマリを少しだけ安心させる。

「:昨日はごめん。一方的に怒鳴っちゃって、トマリにも言い分だつてあったよね」

「・・・謝ることなんてないよ。私が悪いんだから」

「そんなことないよ。どっちが悪かったかはともかくとして、僕だって怒鳴れるような身分じゃなかった」

「どうして？私が勝手なことをやってたんだから、私が悪いんだよ」
「だって、トマリは僕のこと考えてくれてたんだろ？なのに僕は」
「違う。私はただ私のやりたいことをやってただけ。だからマキリは何も悪くないの」

「いや、だからー」

マキリは少しだけ自分の語気が荒くなることを自覚して、舌を収める。今回はどっちが悪いの水掛け論をしに来たわけではないのだ。

「・・・どっちが悪いとかはこの際、やめよう」

「やめるとかじゃなくて、私が」

「だからやめようって。どっちが悪くても関係ないよ。分からない？」

「・・・？どういうこと？どっちが悪いんだからどっちかが謝ればそれで」

「それからどうするの？謝って、許したら解決するの？トマリはそれで諦めきれなの？」

マキリの言葉に、トマリは押し黙った。諦められる、そう即答するべきだった。しかし、出来ない。どちらを選んでも、自分は後悔するような気がするから。

「関係ないよ。どっちが悪いかなんて。それにどっちも悪いんだ。だから関係ない」

「・・・どっちも悪いなんて」

トマリからしてみれば、自分勝手に相手に理想を押し付けていただけだ。

それにマキリが付き合い合わされただけであって、マキリからしてみれば良い迷惑のはずだ。村を盾にして迫ってきた人間など百害あって一利なし。

トマリにとって悪は自分一人だった。

けれど、マキリから見ればそれは違う。

「トマリはさ。僕が臆病者になった理由って考えたことある？」

いきなりの話の転換に、トマリは眉を潜める。話を煙に巻こうとしていると考えたのだ。しかし、すぐに違うとわかる。マキリの表情は

トマリから逃げようとはしていなかった。

「・・・お父さんが死んで、狩りに出るのが怖くなったからじゃ」

トマリの声には自信がない。当り前だ。わかっていれば、それを解決するために動いた。当のマキリにすら分からないことはトマリにも分からない。そして、マキリはその答えを聞いて苦笑した。

「違うよ。僕が行けなくなった原因は、母さんの方だ」

「キノさん・・・?それってどういう」

トマリの声は途切れる。そして、頭の中をパチパチと、控えめな光が流れた。

それと共に、喉が震える。まさかという思い。それと同時に理解できてしまう。

「・・・心配、だった?」

トマリのことか心配だった。

トマリは今、その答えに至る。自分も同じだったから。矛盾した行動をしていたから。そして、今、マキリがお互いに悪いと言っているということは、つまり、そういうことだ。

「・・・私が、キノさんみたいになるんじゃないかって、そう思ったから?」

首を横に振ってほしい。

自分が相手に尽くせていたと思わせてほしい。ただ、与えるだけの側だったと思いたい。

奪う側だったなんて、そんなことは言わないでほしい。

けれど、疑問の答えは肯定だった。

「ごめんトマリ。僕は、トマリが一番嫌がることをやっていた」

そう言っ頭を下げるマキリに、トマリはなんと声をかければいいのかだろうか。

謝るのはこつちだ。間違いなく、自分がマキリの足枷になっている。そして自分が為した行動のすべてが、今、マキリに対して牙を剥いていることが徐々に理解できた。

マキリに気掛かりという鎖を絡み付けた。

そのくせ狩場に送り出した。

いざ怪我をすれば取り乱し、結果的にマキリをこの上なく傷つけた。

怒りなどない。怒れるはずがない。

「……ごめん、なさい」

謝罪する以外に、何が出来るのだろう。

自分以外の悪など、本当に存在しないではないか。

これほどまでに罪が上乘せられて、自分は一体どうすればいいのだろうか。

口が勝手に言葉を紡ごうとする。

「んんっ？」

しかし、その口は塞がれた。

他ならぬマキリの手によって。

「ごめんなさい、は、なし」

マキリは苦笑いを浮かべていた。困ったような、呆れたような、申し訳なきような、そんな顔を見て、トマリは目を丸くする。

「僕も悪い。トマリも悪い。だから謝るのは無し。終わりがいいから」

トマリは口を開いて文句を言おうとするが、相変わらず口にはマキリの手が乗せられている。昔は同じような柔らかい手だったのに、今となってはマキリの手はきちんとした男の手になって居る。ごつごつとしていて、自分の頼りない手とは大違いだ。そんな場違いな感想を抱きながら、トマリはマキリに抗議の目線を送る。

しかし、マキリは苦笑するばかりだ。

トマリは自分の中に怒りが湧いたことに気づき、それをどうにかして収める。

すると同時に、落ち込んでいた気持ちも少しだけ上がってきた。おかげで、マキリの言っていることを受け入れる気にもなれた。

マキリもそんなトマリの変化に気が付いたのだろう。手を除けて、トマリにもう一度聞く。

「ねっ」

トマリは少し躊躇いがちに頷く。マキリの言うことは、確かに正し

かった。トマリの心情として納得したくないところはあるものの、そうした方が建設的だということには理解できた。納得したくはないが。「・・・これからのことを考えよう。僕はこれからどうするのか。トマリはどうしてほしいのか。っていうのをさ」

そう聞かれれば、トマリの答えは決まっている。

「ハンターをやってほしい」

マキリはその答えを聞いて、やはり困ったように笑う。しかし仕方がないのだ。もはやここまで絡まってしまったものは解きようがない。ここまでトマリが足枷になってしまうことは許容できない。

「・・・それじゃあダメだ。だって僕はもう戦えないから」

そんなことはない。トマリはそう言おうとするが、すぐに辞める。

もしもマキリが自分と同じような心境だったとしたら、それを忍て狩りに行くことなど不可能だ。自分もまた心配せずに相手を送り出すことなど不可能なのだから。

それはトマリにも理解できた。

「トマリ、酷いことを言うみたいだけど、トマリの夢は諦めてくれないかな」

マキリがそう言いたくなる気持ちはわかる。痛いほどに。

今、自分がハンターをやってほしいと言っていることと、動機が同じだからだ。お互いの夢を諦めて、お互いにとって良い環境を作ろう。マキリが言っているのはそういうことだった。

後ろ向きな解決方法だ。

そして、きつとマキリにとっては一番いい解決方法だ。

この解決が受け入れられるということは、つまり、トマリが心配しなくても良い状況を作ることになる。これはつまりマキリの利益だ。同時にトマリの利益でもあるが、トマリはマキリの夢を潰したという負い目を、マキリはトマリの夢を潰したという負い目を受けられることになる。

逆に、マキリが今まで通り狩りに行くとしよう。これはトマリにとって夢が実現したということになる。マキリにとっても同じだ。しかしどちらにも心に爆弾を抱えている状態になる。そして、それはマ

キリが死んだ瞬間、もしくはそれに準ずる事態が起これば爆発する危
ういものだ。

ただし、後者にはある問題点が存在する。

後者を叶えるためには、マキリはトマリへの心配を断ち切らなければ
ならないという問題点があるのだ。そして、それは出来ない。出来
ないと二人とも結論付けてしまった。

つまり、今、二人に残されている道は一つだけだ。

「・・・これで、終わりなの？」

「・・・終わりつて言うのは、抵抗があるけど、始まりつて言うのも違
うね」

夢を諦める。これが二人の選択だった。

絡み合い続けた糸は解かれた。しかし、糸に着いた癖は取れてくれ
ない。

最も硬く結びついた場所は解けることがなく、解く方法も二人には
分からない。

けれど、マキリにはこれで良かった。

「トマリ。これからなんだからさ。そんな暗い顔しないでよ」

マキリが声をかければ、トマリは顔を上げた。ベッドの上で体を起
こしている姿が、妙に小さく見える。それはマキリの錯覚だが、一部
では正しい。トマリは今、きつと抛り所を失っているのだ。

キノが父と言う抛り所を亡くしたように、トマリも夢と言う抛り所
を亡くしている。だからこそ、ここでマキリが踏ん張らなくてはなら
ない。

踏ん張つて、共に連れて行かなくてはならない。

そのために必要なことはわかつてる。

そのために、今日ここに来た。

「これから、僕は農場で働くよ。給料はそこまで高くないけど、幸い、
ハンターをしていた時のお金があるからそれなりに贅沢は出来ると思
う。なんせ命懸けだからね。いっぱいお金は貰ってる。もちろん
一生遊んで暮らせるなんてことはないけど、よほど無駄遣いしなけれ
ば飢えたりはしない。今回のクエストだって凄かったからさ。ドス

ギアノスにドスファンゴ、それにフルフルだよ？きつと凄いいお金になる。だから、お金に関しては心配ない」

トマリはいきなり始まったマキリの言葉に目を丸くする。農場で働くことは良い。けれど、お金の話になるのはいったいどういうことだろうか。

しかし、マキリの言葉は止まらない。

「今回は結構怪我をしちゃったけど、治らない怪我じゃない。だから身体だって問題ない。肉体労働なんて得意分野だ。トマリが寝たきりになっても大丈夫。介護だって慣れてるからさ。自慢になっちゃうけど、病気になんてなったことないんだから。だから絶対に苦労なんてさせない」

その言葉の意味が、トマリには臆げながら理解出来たような気がした。

しかし、それがあまりにも希望的観測過ぎて、どうにも受け入れられない。それでもマキリの言葉は止まらずに、どんどん核心に入っていく。

「どんなによぼよぼになっても大丈夫だよ。だってこんな面倒くさい事態だって乗り越えられたんだ。これからどんなことがあっても大丈夫。二人で話し合っていけば、喧嘩していけば、大丈夫だよ」

今回は喧嘩にならなかつたし、出来ればしないのが一番だけど。マキリは照れくさそうに言ってから、言葉に困ったようにあー、と声を漏らす。

そして、一度言葉に途切れてしまえば、そこにあるのは沈黙だ。

しばらくあたりを沈黙が包み、マキリにトマリの、何とも言えない視線が突き刺さる。

マキリは頭を掻いて言葉を探すが、どうにも見つからずに肩を落とす。

年貢の納め時。若干意味合いは違うが、マキリにはそんな風に思えた。

「・・・僕は、トマリが好きだ」

かくして、話は核心に至る。

トマリが息を呑み、表情を硬くする。

まさか、とトマリは思う。

まさか、ここで、この状況で、そんな話をするつもりだろうか。

年齢を考えれば全く不自然ではない。不自然ではないけれど、性急すぎる。もう少しゆっくりとやっていきたい。

だって、ここでそれを言われてしまったら、自分はきつと縫ってしまおう。

けれど、ここで声を挟むなど出来はしない。

「トマリ、僕と結婚してくれないかな」

そして、マキリの言葉がトマリに届いた。

マキリの顔は笑っていた。しかし真つ赤だ。

トマリは顔は呆然としていた。しかし、耳まで真つ赤だ。

二人して、赤い顔をして、お互いの顔を見ていた。耳に痛い沈黙ではない。しかし、ずっと浸っていたい沈黙でもない。特に、マキリからしてみれば永遠にも近い時間だった。

「・・・どうかな、答えは」

思わず急かしてしまう。

そして、急かされたトマリは気が気でない。頭の中は混沌として、何から手を付ければいいのかわからない。ただ、どうしても言いたいことがあった。

「・・・もつと、考えてよ」

「え?」

マキリが聞き返せば、トマリは恥ずかしさをかき消すように、大きな声で叫ぶ。

「こんな部屋で!あんな話した後で!こんな格好で!こんな時間に!そんなこと言われても、困る!」

そう言われて、マキリは初めて今の状況に気が向いた。

自分がこれから言うことがあまりにも重要過ぎて、そういったことに気を配る余裕がなかった。トマリは部屋はお世辞にもきれいとはいえないし、寝巻だし、今は昼間だ。マキリは傷だらけで、トマリは目の下に隈があり、第三者が見れば二人ともさっさと休めと言いたく

なるような状況。間違ってもこんな話をする場面ではない。マキリの笑顔が少し引き攣る。内心を言語化するならまさしく「しくじった」ということだろう。

「どうして私がマキリのが嫌いとかが、そういう時には無駄に雰囲気があるのにこういう時はこんな部屋なの？よく考えたらこんな部屋見せちゃったし！私寝巻だし！マキリ傷だらけだし！」

いままでのしおらしい態度が嘘のように捲し立てる。あまりの豹変にマキリも面食らうが、それは決して恐怖を呼び起こすものではない。むしろ、今、自分に対して感情をぶつけてくれていることがうれしく感じられる。もちろん自分の至らなさを自覚させられても居るのだが。

「・・・もつと、雰囲気を考えてください」

最後は何故か丁寧語で締めて、トマリは再び沈黙した。

それは確かに怒っても居たが、照れ隠しであることもまた明白だった。

「で、答えは？」

だからこそ、マキリはここで手を休めたりはしない。相手が弱っているときこそ最大のチャンス。それはどんなときにも変わらない。マキリは今間違いない狩るものであり、トマリは狩られるものだった。

少し面白がっているような口調のマキリを、トマリは睨み付ける。しかし、その視線もどこか弱弱しい。少しの間視線を彷徨わせるが、すぐに消え入りそうな声を出した。

「・・・お願い、します」

それは弱弱しかったが、確かに承諾の返事だった。

マキリはそれを受けて満足そうに笑う。

今、自分が卑怯なことをしている自覚はあった。

強引に相手の望んでいることを押し付けて、それで頭をひっかきまわす。無理矢理にでも気分を高揚させて、その場を乗り切る。ある意味その場しのぎに近い。

けれど、それでいい。大抵のことは時間を置けば解決、もしくは解

ている存在に気が付いた。

「・・・ダメ」

トマリは顔を青くして、首を横に振っていた。トマリにもわかる。あれは生半可なモンスターではない。なんだったらフルフルというモンスターよりも、もしかしたらティガレックスよりも、あのモンスターは強大だ。

普段のマキリですら危ういのに、今のマキリが行けばどうなるか、そんなものは火を見るより明らかだった。

「一緒に逃げよう？」

マキリに懇願するトマリは、其れこそ本当に、触れてしまえば壊れそうだった。

マキリは思う。『失敗した』と。

だってマキリは、ここで見て見ぬふりをする事が出来ない。

自分はハンターだ。これからどうなるかは置いておいたとしても、今はハンターなのだ。

目の前にある危機を見過ごすことなどできない。これを見過ごすということはつまり、目の前の少女も、今まで慣れ親しんできた村のみんなも、生存確率が著しく下げられることを意味する。

そんなことは許容できない。

「・・・ごめん、トマリ」

本心だった。

自分で、今しがたハンターを諦めるといふ宣言をしたのに、舌の根の乾かぬ内に真逆のことをしているのだ。幻滅されてもおかしくない。

ここで逃げるわけにはいかない。けれど、ここで死ぬわけにはいかない。それも事実だ。

ここで死ねば、トマリが辿る道筋は自分の既知のものになってしまう。それではいけない。

だから、マキリはトマリを縛る。

「必ず帰ってくる」

トマリは顔を歪めるが、それでも止めない。

無理矢理にでも、トマリを生に絡み取る。死ぬことなど許さない。「だから待ってて。僕が返ってくるまで、健やかに、ご飯を食べて、笑って、待ってて」

時間稼ぎになればいい。これできちんと生きてさえくれれば良い。解決にならないかもしれない。けれど、解決するための時間は稼げる。

「帰ってくるから」

マキリはそう言って、トマリの手を指一本一本優しく取り外す。

トマリの表情はなおも歪んでいたが、少しだけ唇を噛み、部屋の中にあつたポーチを引き上げた。散らかっているように見えていても、どこに何があるかはすぐにわかる。

その中から一つの麻袋、そして三つの瓶を取り出すと、マキリに押し付けるように渡した。

「・・・待ってる」

トマリはマキリの縛りを受け入れる。

そうでなければ、マキリが安心して戦えないから。

いざという時、動けないから。

マキリの思惑に乗ってあげる。

マキリはその返答に頷いて、困惑しながら渡された道具を見る。

「・・・これって」

「全部飲んで」

「え?でも」

「秘薬、鬼人薬、硬化薬、強走薬。今あるのはそれが全部」

マキリは目を丸くして、渡されたものを見る。そして、少し苦笑いを浮かべると、それを一気に飲み干した。飲み干している間に、トマリは唇を噛み、表情を心配で歪め、しかしそれでも、気丈にマキリを睨み付けた。

「絶対に帰ってきて。じゃないと、死んでも許さない」

トマリの声には、しつかりとした芯があった。マキリはそれを受け止めて、出来るだけ心配事が消えるように、笑った。

「行ってくる」

トマリもまた、歪な笑みを浮かべる。

「行つてらっしゃい」

マキリは窓から飛び降りる。雪で覆われた地面で受け身を取り、衝撃を分散させる。

体はこの上なく熱くなっている。筋肉が増強されている感覚、皮膚が硬化していく感覚、肺が、足が、全身に走る万能感、そして燃える様な熱さと共に回復していく体。

無論、全快とは言えない。

けれど、戦える。

戦わなくてはならない。

「・・・この誰だか知らないけど、落とし前は付けさせてもらおうよ」

マキリは、目の間に立つ名も知らないモンスターを睨み付ける。

そのモンスターの名は、ゴア・マガラ。

少しだけ未来に、その名を与えられたモンスター。

『■■■■■■■■■■ッ!!!』

咆哮と共に、黒い何かが噴出する。

村は、まるで夜になったかのような暗さに包まれた。

第16話

木片を握る。

地面を蹴る。

振りかぶり、頭を殴りつける。それと共に木片は砕け散り、武器は失われる。しかし、足元には新たな木片がある。すかさず握り、地面を蹴る。

民家がいくつか壊されており、皮肉にもそれらの破片がマキリの武器となる。

もつとも、モンスターの甲殻を相手に効果があるのか、と言われれば苦笑いするしかないが。

観察しながら、考える。

眼が見当たらない。ということとはフルフルのように目以外のもので周囲の状況を探っている可能性がある。

体はティガレックスを一回り大きくした程度の大きさだ。突進を食らえばただでは済まない。

翼の形状から飛行能力は相当のものと考えられる。

飛び散っている粉末の正体は不明。今は出来る限り吸い込まないことだけを考える。

脚の太さは通常の飛竜と同程度。しかし四本の足があることから突進のスピードはフルフルなどとは比べ物にならないと考える。

鱗がありきちんとした骨格が存在している。つまりフルフルのような変幻自在な動きは出来ない。

そして、最も重要な情報が一つ。
相手の身体の傷だ。

翼も頭も背中も尻尾も、ほとんどすべての箇所が負傷している。赤い血液が身体に至る所から流れ出している。並外れた代謝をもつてしてもすぐには回復できまい。

人間かモンスターか。その判別こそできないものの、目の前のモンスターは確かに深手を負っていた。

これを利用すれば、倒せるとまでは行かなくても、苛立たせ、注意

を引き付けることは出来る。

村人たちの様子を横目で見れば、既に何人かは事前に用意してあった竜車に乗り込んでいる。全員が避難するのに必要な時間はあと十分ほどだろう。それまでマキリは目の前の怪物を引き付けなければならない。

勝利条件は村人全員の避難が完了すること。

「・・・まあそれを為しても、逃げるわけにはいかないんだけど！」
ゴア・マガラは身体を少し浮き上がらせ、紫と黒が混ざり合った色のブレスを吐き出す。このブレスの材質は不明でも当たれば即死することは確かだった。避けたブレスは民家にぶち当たり、容易くその形を崩壊させる。

転がした身体を一瞬立ち上がらせようとして、辞めた。逆に、地面に這いつくばる。

目の端にゴア・マガラが翼をはためかせ突進する姿が映ったからだ。

這いつくばったマキリの上をゴア・マガラが滑空していく。今立ち上がれば首だけを持っていかれたかもしれない。想像するだに恐ろしい光景だ。

マキリは即座に立ち上がる。

身体はかつてない高揚感を訴えていた。それはそうだろう。鬼人薬によって筋力を増強し、硬化薬によって体の強度を底上げしている。強走薬のおかげで息を荒げることではなく、秘薬の作用によって体力は通常の水準に近付いている。

しかし、わかる。

これはあくまでもドーピングであり、言うなれば身体を騙し続けているに等しい。この状態は決して長くは続かない。

勝利条件であるあと十分間、これが続くか。

否。

普段の健康状態であればどうにかなったかもしれないが、今のマキリではこの体の性能に体の強度がついて行かない。持ってあと五分。マキリの予想では三分が限界だ。

では、どうすればいいか。

分からない。

分からないが、それでも止まるわけにはいかなかった。

村にはまだ人の姿がある。彼らを追わせるわけにはいかない。

『■■■■■■■■■■ッ』

小さく、呻くように、ゴア・マガラは吠える。

マキリは漏れそうになるため息を飲み干し、木片を持つ手に力を籠める。

頼りない木片を構え、もう一度地面を蹴った。

※

大剣は青の軌跡を描き、鋼の甲殻に叩きつけられる。

その鋼の甲殻の前ではホイレンの大剣は単なる鈍器に成り下がる。弾かれた大剣は赤い火花を散らし、使用者への衝撃となって襲い掛かる。しかし、弾かれた大剣の動きを利用しつつ再び攻撃を加える技量は流石というべきだろう。旋風吹き荒れる戦場に数条の雷が迸る。

ホイレンが目の前の脅威と遭遇したのは、度重なる不運が原因だった。

雪山を調査していたホイレンは、山頂付近に存在していた黒雲が一時的に散ったことから、山頂付近の調査を開始した。

考えなしの結果ではない。そもそも、轟竜が山頂付近に居たということが、逆に山頂付近の安全性を保証していたのだ。

もしも轟竜と同程度、あるいはそれ以上の脅威が山頂付近にあるようなら、普通の轟竜ならば近づいたりはしない。それは本能だ。よほど頭がやられていない限りは、その原則が破られることはない。

しかし、残念ながら、その轟竜はまさしく頭がやられていたらしい。

山頂付近に到達したホイレンを待ち受けていたのは、巨大な龍の抜け殻と、その抜け殻の主であろう龍だった。

その時のホイレンの心境を表すなら『勘弁してくれ』が最も近かっただろう。

「おおおおおらああ!!!」

ることが出来る。

これがなければ、いくらホイレンと言えども一瞬で勝負は決まっていただろう。

クシャルダオラと単体で遭遇し、生き残った人間はいない。

そう言われる一番の所以が、今、恐らくは消失している。

であるならば、チャンスはある。

迫りくる鋼龍の突進を避けるとともに、足を浅く斬りつける。弾かれず、傷をつけられる程度に。金属に小さな傷が走り、それと共に電撃が流れる。

しかし、その程度の傷も電流も、鋼龍にとってはかすり傷ですらない。

それどころか、少しだけ首を傾げ、今、何かをしたか？とでも言いたげな仕草だった。

「・・・ま、あくまでもチャンスなんだけどな？」

先の見えない戦いに、ホイレンは少しだけ苦笑いを浮かべた。

※

正直、マキリにとってこの状況は絶望的も良いところだ。

ゴア・マガラの怪我の具合から見て、このモンスターはエネルギーを補給するために、すなわち獲物を食らうためにこの村に目を付けた可能性が高い。

なぜ雪山に行かなかったのかと言う疑問はあるが、なにはともあれ、このゴア・マガラの目的は肉。つまりは人間だ。

捕食するためにここに来た。つまり、こいつはマキリが邪魔をしなれば喜々として村人たちを捕食する。例えその人間が逃げていようとも、飛行するモンスターから逃げ切れるほど竜車は速くない。

つまり、マキリはこのゴア・マガラが探し出せないほどの遠くに村人が避難するまで、この村に、この体で、ゴア・マガラを押しさえつけ

ておかなくてはならない。

それは一体、どれほどの時間を稼げば可能なのだろう。

今だって、このモンスターが飛び立ち、村人たちを捕食に向かえばマキリに止める手立てはない。そもそも集落を襲われた時点でマキリに為す術などほとんどないのだ。

どうすればいい。

マキリは焦りと共に考える。

木片は絶えず補給される。しかし、それはあくまでも気休めだ。否、実際のところ気休めにすらなりはしない。速ければ一撃で、持っても五度相手に叩きつけられれば壊れてしまう。しかもほとんど相手にダメージを与えられていない。相手が焦れて逃げてしまったら、つまりは撃退してしまっただけなら、恐らくそれはマキリの敗北を意味する。

「マキリッ!!」

瞬間、意識の半分が声に集中する。

オツカイの声だ。姿は見えないが、どうにか何かを伝えようとしていることは分かる。

マキリはゴア・マガラから距離を取り、もう少しだけその声に耳を傾ける。

「俺の家に行け!そこならば——」

そこから先は、距離が離れすぎたのか、何も聞こえなくなった。家に行け?どういうことだ。

マキリは一瞬、その言葉の意味を考えた。

しかし、そこでマキリはミスをした。

その言葉の意味を考えるのは良い。オツカイが残したヒントを知ろうとするのは決して悪いことではない。

だが、敵を目の前にして、少しでも意識を外したのは失策に他ならなかった。

ゴア・マガラが、マキリの目の前で大きく体を回転させた。それはマキリに噛み付くような動きであり、対応がコンマ数秒遅れたマキリは反射的に、それを紙一重で避けられるように動く。

それは果たされた。確かに、ゴア・マガラはマキリに噛み付くこと

はなかった。

しかし、マキリは瞬時に自分の選択が誤りであったと悟る。

ゴア・マガラはマキリの身体を噛み損ねながらも、その体を回転させ続けた。

さながら、その長い尾を鞭のようにしならせて。

「くっ……！」

避けられるか、否、不可能だ。ならば何かで防がなければ、何があ
る？ 木片だけだ。それで防ぎきれるか？ 防ぎきれるわけがない。

しかし、他に方法がない。

マキリは木片を盾にしながら、尾の進行方向に合わせて飛んだ。こ
れによって衝撃を僅かでも緩和する。

だが、それでもなお木片は破壊され、尾はマキリの脇腹に容赦なく
叩きつけられる。

「っ!!!」

肉が引きちぎられる感覚と、衝撃が骨と言う骨を伝う感覚。先ほど
まで感じていた高揚感が鳴りを潜め、本来の、全身の痛みがぶり返し
てくる。

その衝撃と共に、マキリは民家に突っ込んだ。木製の壁を突き破
り、硬い地面に叩きつけられる。

叫び声すら上げられない。それほどまでに痛みは今までの中でも
群を抜いていた。

マキリは痛みにも呻き、その場に顔を突っ伏した。

「……何やってんだか、僕は」

大切な人たちの為と言えば聞こえは良いが、実際にはただの自殺行
為だ。どこの世界に木片一つで飛竜と戦うハンターが居るというの
か。自分を嘲る声は止むことなく、マキリの胸中に渦巻き続ける。

こんな敵に勝てると思っているのか？

今やっていることは、結局あの父親と同じではないのか？

無責任な言葉を吐いて、最後には何も守れないのではないのか？

先ほどまでの高揚感の反動か、その声は止むことがない。

しかし、ここで諦めては結局、何も変わらない。

臆病者であった方がまだマシだ。

地面に手を付け、頭を上げて、息を大きく吐き出した。

一刻も早く、モンスターの前に戻らなくてはならない。

生態も弱点も行動パターンも何もかもが未知の相手であっても、脅威だけはひしひしと感じている。さあ、立ち上がれ。足を付け、前を向け、走り出せ。

歯を食いしばり、マキリは目線を前に向け、思わず固まった。

そこにあつたのは、今にもブレスを吐き出さんとする、目測一メートルほどの距離にあるゴア・マガラの口。

そして、なんてことはない、小さな希望だった。

瞬間、爆音が轟く。

黒の一撃は壁を破り、屋根を吹き飛ばし、家を無数の木片へと変えた。限られた空間内で放たれた強力な一撃は、逃げ場を失い、結果、全方向への圧力となって爆散した。

黒い煙が周囲に立ち込め、その中に巨大な影が見える。

今度こそやった、目障りなハエを殺してやった。そんな笑みを漏らして然るべきだろうその影は、しかし、歓喜の声を上げることがなかった。

『■■■■■■■■■■ッ!!』

聞こえたのは呻き声。それも、何かに傷つけられたような、この村にて一度も上げたことのない声だった。

「・・・感謝しなきゃね」

マキリは一人、抜身の武器を持ち、若干肩で息をしながら、少しの笑みを浮かべていた。

引き付けるだけならば、この武器は要らなかった。

マキリが完全に死ぬつもりで、武器がなくとも耐えきれるという確信さえあれば、必要はなかった。

しかし今、この段階において、その一本はまさに救いの神と成り得た。

蒼と白の雷を纏うその刀身は鉄色。身の丈ほどの長さではあるが、幅は極めて細い。扱いの難易度は片手剣の比ではなく、防御も効か

ず、ただひたすらに回避と攻撃を繰り返すだけの武器。

しかし、それこそは父の愛した武具。洗練した技術。継がせた想い。

故に、これは彼にとつての切り札となる。

『武器を作ってるの！』

何故、あの時折れていたはずのものがここにあるのか、想像はつく。だからこそ、感謝する。

無論、状況が絶望的であることには変わらない。ドーピングは既に終わりを見せ、秘薬を使ったところで身体はまだボロボロだ。しかも何かが体の中で暴れ回っているような不快な感覚もする。そうでなくとも、マキリはまだ飛竜などフルフルを狩ったことしかない。目の前のモンスターは手負いとはいえ、どう考えてもフルフルよりは格上だ。

しかし、これでまだ、マキリが生き残れる可能性は、蜘蛛の糸一本分程度には繋がった。

尾で飛ばされた場所が鍛冶屋であつたという幸運。ゴア・マガラのブレスの前にそれを手に入れることが出来たという幸運。そして、昔の鍛錬が今、実を結んでいるという幸運。

あらゆる幸運があつて繋がった一本。

『鬼哭斬破刀・真打』

分に合わないにもほどがあるが、それはご容赦願いたい。

どうせ、ここで死んだなら終わりなのだ。

マキリは自分の武器を、太刀を振るう。

蒼白い閃光が、暗い村を明るく照らした。

緊張感と常に向き合うしかなかった二年間は、確かに、マキリの中に息づいている。

マキリは再び地面を蹴る。

重心を揺らさず、無駄な力をそぎ落とす。刃の揺れは最低限。足の動きは最大限。

回転を終えたゴア・マガラが振り向かぬうち、刃を足に向けて振り下ろす。刃にかかる負荷は減らし、武器の鋭さのみで斬りつける。

そうでなければ、大剣よりも遥かに細いこの刃は驚くほど簡単に折られてしまう。

幸いにも、マキリの太刀はゴア・マガラの鱗を断ち、肉を抉った。武器に掛かる負荷は限りなく小さい。

しかし、ゴア・マガラもやられるばかりではない。尻尾を振り回し、翼を羽搏かせ、マキリを間合いの外に出そうとする。マキリはそれに逆らい、ひたすらゴア・マガラに密着する。時折身体を掠めていく鱗はマキリの肌を切り裂き、若干の切り傷となる。

だが、それでも、ゴア・マガラに余裕を与えてはならない。飛び立つ余裕があつてはならない。

だからこそ、マキリは狭い場所で振るいにくい太刀の性質に逆らつて、至近距離で攻撃を加える。

鱗一枚一枚の、頭の動き一つ一つに、翼の筋肉の脈動に、脚運びのパターンに、嘖き出される粒子の多少に気を配る。

一つたりとも見逃してはならない。見逃しては死ぬ。その確信。臆病な精神を持つがゆえに。

頭を休ませてはならない。足を止めてはならない。武器の扱いを粗末にしてはならない。腕を振るい続けなくてはならない。

相手に、己の脅威を刻みこまなくてはならない。

「ローっ！」

息を吐く音。切り捨てられる音。鱗が擦れる音。互いの足遣い。時折漏れ出るうめき声。空気が切り裂かれる音。地面が潰される感覚。

全てを感じ、全力で本能を働かせる。

太刀の特徴は数あれど、最も重要なことは『脆い』ということ。大剣と比肩する長さ、恐らく全武器中最も薄く細い刀身。速度、鋭さ、間合い、そのすべてを得ようとした結果無くした強度。それは容易に太刀の刃を破壊する。

大剣ならば耐えられるような負荷にも耐えられない。片手剣で受け止められる攻撃も止められない。避けようにもリーチ故にとれる回避行動は限られる。

最悪だ。

マキリにとって、『臆病者』にとって、太刀は最も手にしたくない武器の一つだった。

それでも、マキリはこの武器を己の一番に据える鍛錬を繰り返した。

偏に、父に追いつく。そのためだけに。

一閃。

ゴア・マガラの右後ろ脚を、マキリの太刀が足の半分ほどまで切れ込みを入れた。

間欠泉のごとく血が噴き出る。

流石のモンスターもそれには耐えきれずに身体を横たわらせる。いま、この瞬間にもゴア・マガラの足は修復しているが、傷がふさがるまでまではあと三秒ほどかかる。マキリはそう見た。

だからこそ、そこで追い打ちを掛けなくてはならない。

今、ここだ。

恐らく、マキリの、限りなく小さな勝機があるとすれば今、この瞬間だった。

「っらあああああ!!!」

張りつめていた感覚を更に引き伸ばす。

極限状態まで緊張を持っていく。髪一本の動きすら気に掛けるような精密さをもって、マキリは太刀を振りかざす。

やることは至って単純。

ひたすらに速く、鋭く、太刀を連続的に相手に叩き込むだけ。

しかし、武器を振るう速度が速ければ速いほど刃の制御は難しくなる。刃こぼれの率は上がっていく。

基本をあくまでも忠実に再現しながら、極限の緊張状態で一気に相手の身体を切り刻む。

その繰り返しこそが、太刀の奥義。

気刃斬り。

「……………」

一振りから一振りへの接続を迷ってはいけない。

軌道は流線型を描かなくてはならない。

相手から流れ出る血が、太刀を赤く彩るようではなくてはならない。さながら、赤い気迫を纏ったかのように。

マキリはひたすらに倒れ伏したゴア・マガラの身体を切り刻む。腹に、首に、足に翼に頭に、長い間合いであらゆる部位を一緒くたに切り裂きながら、その肉を断ち切り、血を奪っていく。

『■■■■ッ』

ゴア・マガラは身体を捻る。

その攻撃から身を引こうと、まだ完治していない足でも足掻きまわる。

されどそれはマキリに見せていた腹を背中に変える程度の効果しか齎さず、そうなればマキリはその背中にターゲットを移せばいいだけのこと。

マキリの気刃斬りは止まらない。

自分の身体に降りかかる粒子も血液も斟酌せずに振り続ける。

しかし、制限時間は既に終わろうとしていた。怪物の足は既に紛いなりにも回復を遂げ、足は地面を踏みしめ始めた。

見舞うことが出来るのはあと一撃。

たった一撃しかない。

ならば、ここで最大の一撃を与えるしかない。

マキリは太刀を大上段に構える。

気刃斬りの締め。最後の一撃。

滑らかな線に送る最高のピリオド。

「ふっ!!」

全身の力を込めた振り下ろしは、避ける術もないゴア・マガラの身に吸い込まれ、

その肌を切り裂くことなく、地面に落ちた。

「……は？」

マキリは今起きたことが分からなかった。

起きた現象ならばわかる。

マキリの手が太刀を途中で手放し、結果的にマキリの一撃は届かずに終わった。

けれど、その原因は。

紫色に変色し、所々に紅い血管が浮かぶ両腕は、マキリに何も教えてはくれなかった。

※

戦闘は終盤に差し掛かる。

少なくともホイレンにとつては、自らの攻撃をちつとも意に介していなさそうな鋼龍を目の前にするホイレンにとつては、そう思いたい状況だった。

「……流石に、へこむな」

鋼龍との戦闘を続けたホイレンの防具は、とても防具とは言えない有様だった。

左腕、左足部分の防具は消失、胸部には生々しい爪痕が残る。損傷がない場所などなく、すべてのものが風が吹けば飛びそうな具合にホイレンにくっついていた。

風の弾丸は触れなくとも体勢を崩し、氷のブレスは人間の走る速度を超えて追ってくる。巨体の攻撃など受ければお陀仏。爪の一撃もまた同じ。翼の風圧に立ち止まれば次の攻撃を避けることはほぼ不可能。

すべての攻撃が、大鎌を持った死神に見える。だからと言って受け身でいてはそれこそ体力が尽きるのはホイレンの方だ。だから攻め続けるしかない。

「おおおおおおー！」

雄叫びを上げ、鋼の甲殻を殴りつける。

流星に鋼ともなると瞬時に再生することは難しいらしい、ホイレンの与えた傷は確かに、そのまま残っている。内側まで届いた傷に関しては言わずもがなではあるが、それは小さな希望だった。

足に叩きつけられた大剣を一瞥する。

鋼龍は方向を上げつつ、前足をホイレン目掛けて薙ぎ払う。しかし、その時ホイレンは鋼龍の視界から消えた。

一瞬、鋼龍はホイレンを見失うが、胸部に与えられた衝撃で相手の位置を掴む。

そこにいるのなら、こうすればいい。脊髄に刻み付けられた行動原理は極めて迅速に実行される。

極めて単純な本能に従い、鋼龍は腹を地面に擦り付けた。

しかし、それでもなお相手の手ごたえはない。

それもそのはず、ホイレンは鋼龍の目の前に立っていた。

「おらあつ!!」

掛け声と共に、鋼龍の頭に大剣が叩きつけられる。小さく、鋼龍はうめき声をあげる。

およそ大剣とは思えないほどの俊敏さ。そこにマキリがいれば驚くとともに呆れただろう。大剣の重量を使った体重移動、最適な体運び、そしてモンスターの行動を予測しての回避行動、反撃行動。

すべてが一級品だ。

しかし、先ほどから似た様な一撃を何度か入れても、目の前のモンスターが倒れる様子はない。

効いてはいるはずだ。でなければ、うめき声など上げはしない。

しかし、体力の何割を削っているのか、それに関してホイレンは考えたくもないが、精々が一割程度だろう、頭の冷静な部分は冷酷な結論を下した。

血は流れていない。元から体は傷ついている。体力も消耗しているはずだ。

しかしそれでも、古龍であることに変わりはない。

一撃を入れたホイレンは、その場から離れる。

すると、鋼龍は一時的に、周囲に風の鎧を纏った。それはすぐに霧散したものの、自分の周囲に風を起こす程度、こいつにとつては朝飯前なのだろう。それは制御装置であろう角が壊れていても変わらな。一瞬だけならば風を起こせる。そして、その一瞬が取られれば人間は死ぬ。

不公平だ。

しかし、それが現実だった。

「・・・だから、知恵、絞らねえとな」

ホイレンは少し口角を上げて、鋼龍の胸元を見る。

先ほど腹を地面に擦りつけられた時は血の気が引いたが、今なおそれは健在だった。

鋼龍もまた、何かに気が付いたように上を向いた。

流星は天候すら変える龍。これもきちんと察知できるらしい。

だが、無意味だ。

察知できたということとは、既に発動したということ。

いくら古龍ともいえど、所詮は生物。

生物では、雷の速度は避けられない。

はるか上空から、閃光が呐喊する。

「万が一、ってな。持ってきたいてよかったぜ」

準備するのは手間だったが、そんな声は容易にかき消された。

爆音。

雪が解け、蒸発し、強烈な閃光が周囲に突き刺さる。

空気の温度は急激に上昇し、少し離れていたホイレンにもその熱が伝わってくる。

避雷針を応用し、雨天時のみ、大自然の力を人為的に発生させることができる武器。

爆雷針。

もちろん、いつでも使えるようなものではない。あくまでも上空にある雨雲がいまにも雷を落としそうなほどに静電気をため込んでいなくては使うことができない。

だから今。

ここまで耐えた。

その成果は、目の前にある。

風は止んでいた。

絶え間なく続いていた地吹雪はゆらりと揺れるカーテンのように、ただ虚空を漂っている。

悲鳴を上げる暇もなく、鋼龍はその体から黒い煙と吐き出ししていた。

その痛み、ホイレンには想像することすらできない。

人間では雷に耐えることなどできない。雷を操る古龍や雷を操る古龍級生物の防具であれば別かもしれないが、そもそも自然の力をどうこうすることなどできない。

もしも爆雷針を裸一環で受け止め切れた人間がいたなら、それはもはや人間でもハンターでもなくただの化物だろう。

なにはともあれ、今、目の前に居る生物がどれほどの痛みを受けているかは想像すらできず、よってホイレンは緊張を解くことも出来ない。

例え鋼龍の鋼が解け、その体をヘドロのような模様にしようと、露出した肌が焼けただれ、見るも無残な姿になろうと、威風堂々とした姿が見る影もなく、地に臥せっていようと、油断できない。

それが目の前の存在だった。

『.....』

小さな声。

しかし、声は声だった。

瞬間、風が再び起こる。

「っ!!」

ホイレンは咄嗟に距離を取る。

まさか、と、やはり。

第18話

この状況を、天は我を見放した。とでもいうのだろうか。

マキリは靄がかかったような頭で、ふと考え、すぐにその思考を押し込めた。黒い塊を避け、そこから飛び散る粒子を出来るだけ吸い込まないようにする。だが、それをやっても体の怠さは消えたりしない。

目の前のモンスター、名前もわからぬそれに対し、マキリはそれなりに善戦した。

満身創痍の中ドーピングを実行し、相手にしたことも聞いたこともない飛竜を相手に、木片を武器に時間稼ぎを試みて、実際に村人たちはほぼすべてが村から姿を消していた。

もしも自分が当事者でなかったら、よくやったと手を叩いて褒めてやりたい気分だ。マキリは若干の笑みと共に考えて、自分の両手両足に目を向けた。

これさえなければ、もしかしたら、勝つところまで行けたのかもしれないが。

両手両足は、何も知らないものが見れば顔を顰めるほどに、気の弱いものが見れば失神するほどに、元の色からはかけ離れていた。

元は雪国特有の日照時間の短さと日差しの弱さによつて白かった肌は、真逆の黒がかかった紫に変色していた。所々に赤い血管が浮き出ており、その様子がまた吐き気を催させる。その影響は色だけではない。一センチ動かさそうとした指が五センチほど動いてしまうような過敏な反応。それが身体のすべてに現れている。マキリが動けているのは奇跡に近い。

もしかしたら自分の顔も、今このような色をしているのかもしれない。思考能力が段々と落ちてきたマキリはそれを考えられずにはいられなかった。

『■■■■ッ』

短く咆哮した竜は、マキリに向かって、地面すれすれを飛びながら滑空してくる。

これを食べらつたらさぞ痛いだろうな、ぼんやりと頭で考えながら、横に転がる。普段と比べれば緩慢なそれでは、ゴア・マガラの攻撃を完全に避けることは叶わない。背中に浅くない傷が残され、マキリは小さく呻く。

先ほどまで痛いほどに感じていた緊張感はどこかへと霧散し、代わりに緩やかな感慨と諦めと、それとは真逆な、グロテスクな破壊衝動が内側から身体を叩きつけている。

もう何もかもどうでもいい。どうでもいいから壊してしまえ。

理屈も何もない、本能ともいえない何かが頭の中で囁いている。

「・・・あの、黒い粒子、だな」

ゴア・マガラの吐き出す黒い粒子。マキリはなんとなく、その正体が毒の様なものであると推測できていた。

そして、だとしたら、なんと悪趣味なモンスターなのか。

粒子の形にして空气中に散布されれば、空気を吸っている生物すべてにその毒は齎される。身体能力としての脅威はマキリが対処できていることから百歩譲って大したものではないとしても、広域にわたって生物を弱らせる能力など生物の域を超えている。

そんな能力は、一歩間違えれば生態系を完全に破壊してしまう。

それは生物ではなく、天災の所業だ。

「おかしいな」

そんな生物が、選りにもよって、今日、こんな村に来ることも。

様々なモンスターを相手にしてきた父親からも聞いたことがないモンスターが、目の前に現れることも。

そのモンスターに、自分が殺されそうになって居ることも。

「理不尽だ」

しかし、それが現実だった。

ゴア・マガラの絶え間ない攻撃をどうにかして避けながら、あるいは避け損ないながら、マキリはじりじりと後退していく。

マキリの手の中に太刀はない。先ほどすっぽ抜けた太刀は、今のマキリから五十メートルほど向こう側の地面に突き刺さっていた。幸いにも折れてはいないようだが、紫色の腕では太刀を制御することな

ど到底不可能。過剰な反応をして刃が折れる姿が完全に想像できる。そして、今の自分に、その太刀が拾えるとも思っていないかった。何度目かわからないゴア・マガラの突進に引っかけられ、マキリは地面を転がった。

そして、遂に、起き上がることも出来なくなった。いつしか味わった感覚。起き上がる意思はあっても、身体が動かない。

ほんの少し前、どこかのハンターに会う前の状態にそっくりだった。

「・・・また、かよ」

いい加減にしてほしかった。

朦朧とする頭で、どうにか立ち上がろうとする。けれど体の感覚は異常なままで、一度倒れてしまつては起き上がることすら出来そうにない。

巨大なものがゆっくりと、地面の振動を伴って近づいてくる。

それは絶望の足音でもあるが、ゆっくりとしてくれることはマキリにとつても有り難かった。

死にたくないと思う一方で、心の中は死を受け入れ始めていた。

受け入れてしまえば、あとは残されるものの心配だけがある。

村のみんなは逃げ切れただろうか。子供たちはきちんと無事だろうか。今の自分の様な状態になつては居ないだろうか。道中、他のモンスターに襲われてはいないだろうか。

トマリは、ちゃんと生きてくれるだろうか。

マキリの思考は、最終的にそこに行き付く。

気が付けば、振動は止み、そこには黒い影があった。

こいつは、僕で満足してくれるだろうか。

考え、少し笑った。

こんな巨体が、それで満足するものか。腹が減ったから人里に降りてきたのだろう。獲物が多くいる場所に来たのだろう。

空腹の、激しい代謝を持つ生物がこれで満足する訳がない。

けれど、少しでもこいつの腹が膨れるのなら、犠牲になるのも悪く

ない。

マキリは身体から力を抜き、静かに目を閉じた。
その瞬間。

「――主人から離れるにゃ!!」

ゴア・マガラの頭が小さな爆発に揺さぶられた。

そして、マキリもまたその爆風に吹き飛ばされた。

「――つてえ」

鈍くなった痛覚が、それでも痛みを訴えてくる。

だが、それのおかげで少しだけ頭が冴えた。

声には覚えがあった。

「・・・なんで、まだ残ってんの。コジロウ」

「そ、それは、事情があつてにゃ」

コジロウはその相好を申し訳なさそうに崩すが、申し訳ないのはこつちだ。

流石に、農場にまで気を回している暇はなかった。

マキリは自分にそう言い訳するが、今、ここにコジロウが居てしまっているということは皮肉にも、マキリに少しの活力を与えた。

マキリは過剰に反応する身体を制御し、どうにかして立ち上がる。

気を抜けばすぐにも倒れこんでしまいそうな身体を、意志の力でどうにか持ち上げる。

「・・・とりあえず、逃げてくれる? なんとか時間は稼ぐからさ」

精一杯、空元気を飛ばした。

マキリにできることはそれくらいだったから。

正直、戦う力などどこにも残っていない。

けれど、アイルーならば逃げられる。

地中を潜っていくことが出来るアイルーならば。

「・・・遠慮しておくにゃ」

しかし、その覚悟をコジロウは鼻で笑った。

マキリはそんなコジロウを、文字通り死にそうな顔色でにらみつけた。

「君一匹居たって何もできない」

今更だ。

マキリが万全の状態なら、心強いと思っただかもしれない。けれど既に死に体のマキリには、心強い味方ではなく守らなくてはならない枷に過ぎない。

「その通りだけどな。誰がそいつ一匹だつて言った？」

新たな声が聞こえた。

立っていたマキリは、情けないことに、安心感で膝を付きそうになつた。

ゴア・マガラでさえ、新たな乱入者に対してどこか計りかねているようだった。

後ろを振り返るまでもなく、その男はマキリを追い越し、真ん中から折れた大剣を背負い、みすばらしい外套を羽織り、そこに立っていた。

「死にそうな顔してんじやねえよ。こいつの頭、獲って飾るくらいの意気は見せて貰わなくちゃ困るぜ」

マキリは滲み出そうになる涙を堪える。

「・・・今まで、何やってたんだよ」

少し、恨みがましい声を出してしまった。

そうでもしなければ、倒れこんでしまいそうだった。

それをわかつているかのように、マキリの言葉を笑い飛ばす。

「まあ勘弁しろって。雪山で古龍に遭って、そいつに地面割られて、クレバスの中にある川に落ちて、さっきここに流れ着いたんだぞ？流石に考えてほしいもんだなあ。そんな状況でも助けに来る俺の偉大さって奴を」

マキリは驚愕も呆れも通り越し、笑ってしまう。

そんなことを、まるで二日酔いになってしまったかのように軽く言ってしまうのだ。どこまでも口の減らない男だ。そして、その口の多さが今のマキリには好ましかった。

「・・・さて、この名称不明のモンスターぼろぼろだし、お前の顔色は最悪だし、色々と聞いてえことはある。が、それは後回しだ。とりあえず」

ホイレンは聊か頼りなくなつた大剣を構え、ぼろぼろの身体を引きずつてなお、不敵な笑みを崩さない。
「二狩り行こうか。マキリ」

第19話

大剣が頭を打つ。

若干足りないリーチ、重量ではあったが、ホイレンは欠けた大剣で目の前のモンスターを相手に奮闘していた。

「おおおおおらああああああ!!!」

頭を打ち付けた勢いそのままに、再び一撃、アッパー、フック、怯んだところに振り下ろし。

足りない威力は手数で補う。

そう言わんばかりの乱打に、マキリは目を見張る。

マキリ自身、自分がそこまで弱いとは思ってない。

臆病者さえ出なければ、中堅あたりの実力はあると自負している。

そのマキリから見て、やはり目の前の人物の実力は卓越していた。

「ご主人、武器持ってきたにや。あと道具屋にあった回復薬も」

傍らのコジロウが、重かっただろう太刀をもって佇んでいた。マキリは頷いて、それを手に取る。しかし、やはり体力の消耗は激しかった。まともに歩くことも難しい。

仕方がない。マキリはそう考え、持ってきてもらった回復薬を一気に口に含んだ。

「・・・はあ、ちよつと楽になった」

体が若干熱くなつたが、その程度で済むのなら安いものだ。

残念ながら、身体の過剰反応は止まる様子を見せない。

ただ、体力が戻れば、心にも余裕が出来る。

もつと言えば、今はホイレンが敵を引き付けているのだ。その間に休めるというだけでも、マキリには度を超えた贅沢に思えた。

そして、時間さえあれば、マキリでも学習する。

「・・・よし、もういいかな」

マキリは立ち上がり、軽く太刀を振った。

時間さえあれば、慣れることは出来る。

過剰反応するのなら、その過剰反応を計算に入れて身体を動かせばいいだけのこと。

息を吸い、吐いた。

一呼吸の間に、マキリはホイレンとは逆の、尾の側に回り込み、尾を斬りつけた。

「・・・あれ?」

そして、マキリの疑問の声と共に、斬りつけた尻尾が宙を舞った。

『■■■■ツ!?!』

尾を斬られたゴア・マガラは、小さくうめき声をあげた。しかし、倒れこむことはしない。ここで倒れこめば、今度こそ終わりだということとを本能で知っていたのだろう。

そして、尾を斬ったマキリと言えば、不思議そうに自分の太刀を見つめていた。

「・・・僕、こんなに強かったっけ?」

モンスターの尾、という何度も斬りつけてようやく切り落とせるような代物を切り落とす。しかも一撃で。

それほどに技術が成熟している自覚はなかったのだが、マキリがそう思っていると、ホイレンは笑った。攻撃をしながら。

「ははは!そういうこともある!とりあえず切れ!ほれ斬れ!正直俺、もう限界!一晩氷漬の川に流されて死にそう!」

「の、割には元気そうだけど」

「それでもしなきゃやってらんねえんだよ!ちよつとでいいから回復薬飲ませろこんちきしょう!」

確かに、ホイレンの外套の下はほぼインナーだけだった。防具もほとんど役に立たないような戦闘を繰り返したのなら、体力をかなり消耗していても可笑しくはない。

「——よし、じゃあ、今度は僕が時間稼ぎするよ」

マキリの口角が上がり、少し獰猛な、臆病者には不釣り合いな笑みを浮かべた。

すつと吸い、ふつと吐く。

太刀を振るい、ゴア・マガラの後ろ脚から血液が噴き出る。

それを見て、マキリは笑みを濃くした。

不思議な感覚だった。

マキリの身体は異常だ。先ほどまでは身体を動かすのにも難儀していたような有様だった。

だというのに、今、この瞬間、マキリは思う。

この上ないほど、好調だ。

太刀筋がいつもよりも鋭い。面白いくらいに切れ味が良い。先ほどまで表面を切り裂くのがやつとだったのに、今では鱗ごと肉まで切り裂くことが出来る。

振るい、当て、引いて、断つ。

時折、翼が、爪が、マキリ目がけて振るわれるが、それを食らうこともない。

「・・・くっ」

口から、歓喜の声が漏れ出る。

ああ、いい心地だ。

こんな気分は何年ぶりだろうか。

一撃一撃に命を乗せる感覚。一瞬の命のやり取り。自分の人生すべてを、いまここにぶつけている高揚感。

そうだ、この感覚だ。

父親がどうこうじゃない。

村の為なんかじゃない。

これがあるから、マキリは何を置いても狩りを忘れられない。

トマリが心配しているという事実を知っていても、湧きたつ衝動を抑えきれない。

この感覚があるから。

「狩りがやめられないっ！」

逆袈裟にゴア・マガラの腹を切り裂き、傷から血が流れた。

ゴア・マガラは溜まらず、といった様子でマキリから距離を置いた。

その際の風圧で、マキリは少しの間身動きが取れなくなった。

そして、マキリは初めて気が付く。

ゴア・マガラの体色が、最初の紫色から若干、赤みを帯びていた。

何かの前兆か。マキリは身構え、ゴア・マガラは大きく頭をもたげ、息を吸った。

なマキリを押しとどめる。

「まあ待て、マキリ。焦るな」

「どうしてー！」

「よく考えろ。らしくねえ。コジロウがここに居るんだぞ？」

マキリにはホイレンの言っていることは分からない。考えるつもりもない。今、ここでやらなくちゃならないことは一つ。敵を飛び立たせないことのはずだ。コジロウが居るからと言って、どうこうできるような敵ではない。

いよいよ、ゴア・マガラは地面から体を浮かせ、村の上空へと進路を取ろうとする。

しかし、ホイレンはため息を吐いて首を振った。

「コジロウが居るんだ。他のアイルーに声をかけてねえわけがねえだろうが」

瞬間、ゴア・マガラの背中が大きな爆炎に包まれた。

「やってやったにゃー!!」

「我らがキツチンの仇にゃー！」

「にゃー！」

目を向ければ、まだ壊れていない屋根に乗っかっていたアイルーたちが快哉を叫んでいる。

一瞬何が起こったのか理解が遅れたが、アイルーたちの姿を見て、やっとマキリは悟った。

ホイレンは、マキリの身体が動くためだけに時間稼ぎをしていた訳ではない。

ゴア・マガラが逃走を図ったときのために、予めアイルーたちに爆弾を持たせて配置していたのだ。

「・・・そんなのありか」

「狩場以外での戦闘だ。ルール無用。相手を殺した方の勝ちってな」
恐らく、時間をかけてもマキリはホイレンと同じやり方は思いつかなかっただろう。

マキリにとって村民とは守るものであり、戦うものではない。一緒に居られても守らなくてはならないだけで、足手纏いにしかならな

い。

しかし、ホイレンにとっては違うのだ。

利用できるものは利用する。そういった考え方なのだろう。

マキリは自分の中に、苛立ちが生まれるのを感じた。

「……ちっ」

「あ？お前いま、舌打ちした？」

「……別に」

マキリは言葉少なに否定して、ゴア・マガラに向けて走り出す。

最早体の動きに不自然なところは見られない。

跳ぶように走る。全身傷だらけ、肉がむき出しの敵に対して武器を振りかぶる。

この勝利は、自分の勝利ではない。

心の中で苛立ちが強くなる。

この勝利は、あくまでもホイレンの作戦勝ちだ。

苛立ちが、太刀を握る力を強めていく。

ゴア・マガラは目の前の敵に対して最後の抵抗を試みる。口の中に黒い靄が見える。

しかし、遅い。

体力の限界に達した生物の速度が万全の状態よりも早くなることなどあり得ない。

相手の動きを学習したマキリにとって、そんなものは障害になり得ない。

脚と上半身のわずかな動きだけでそのブレスを躲す。紙一重、それに恐怖は感じない。

ゴア・マガラには視覚が存在しない。

しかし、それでもマキリにはその表情が驚きに彩られたように感じられた。

ただ、もはやそれは、どうでもいい。

首に太刀を叩き込まれ、噴水のように血を噴き出したゴア・マガラは、地面に伏し、小さく呻き、動きを止めた。

マキリはその様子を見届け、太刀を鞘に納刀すると、小さく深呼吸

をして、これまた小さく呟いた。

「・・・次は負けない」

その目、闘争心に彩られた目を向けられた相手は、軽く、陽気に笑って見せた。

「そうかそうか。お前、負けず嫌いだったんだな」

※

アイルーたちの連絡により、避難していた村人たちは村に帰還。

二人の狩人は村の調合師の作った薬を飲まされ、温泉に入りたいたい要望した一人の願い虚しく、ベッドに叩き込まれた。

それから二日後、村では温泉を堪能する一人のハンターの姿が見られた。

しかし、もう一人のハンターは、幼馴染の調合師によって、一週間はベッドに括りつけられたまま過ごすことになる。

画して、臆病者のお話は。

彼の数日間に及ぶ奮闘記は、これにて終わり。

彼が果たして勇敢な狩人になったのか、優しき農民となったのか、それは彼の心次第である。